45—93

播南谿著述
平出古刀祢標注

標註東西游記

西遊記
續西游記

明治二十七年發刊

標註東西遊記序

旅行はどをかしきものはあらじ、岩が根のこゞしき山路をたどりては樵夫どもの物語につかれをやすめ、荒浪のよする濱邊に漂ひては舟子等の歌に苦しさを忘る、都會に出でゝは大廈高樓に寐ね美酒佳肴に飽きて、一日の王侯となることもあれど、邊鄙に赴きては茅屋に雨露を凌ぎて松風の聲荒波の音に夢を驚かされ、麥飯に飢餓を支へても終日の疲勞を休むる能はざることあり、境遇日々に變りて見聞時々に同しからず、珍らしきを好み新たなるを喜ぶは人情の常なれば、たとひ苦しくつらきことはありとても、今日の人にして旅行を好まざる者はあらざるべし。されどいにしへは旅行をうきことの限りといへり、今にしてこれを思へば、夏の蟲の氷を疑ふが如き感あきにあらねど、當時旅行のいかに困難なりしかを聞きたらんには、誰かこれをうべなはざらんや。さがしき山にも路なく、深き川にも橋のありたらばこそあれ、大方は人家もいとまばらにして宿驛も遙に相隔りければ、行きくれて宿りすべき屋あきときには、木の下蔭に宿り、或は草引き結びて眠らざるを得ざりしことも、その常なり

き、且つまた猛獸毒蛇の憂へ、山賊海賊の懼れありしのみならず、飢を凌ぐべきよすかだになきこともありしかば、米をも擔ひ甑をも持たではかゝはざりけりとぞ。されゞ能因法師は都をば霞とゝもに立ちしかど秋風ぞ吹く白河の關と詠み、紀の貫之朝臣は土佐より都に歸るにだに、五十日餘りを費したりき、その困難想ふべし。旅はうきものといひしも宜あるかな。江戸時代とありては參勤交替といふことありて、海内の諸侯皆な江戸に往來せしかば、山にも路を開き、河にも渡しを設けしなど、いにしへにくらべてはこよなき便りを得しかど、あは山路はけばしくして歩行に難み、廣き河には橋もかかりしかば、少しく水の增す時には、たやすく渡ること能はずして、徒に減水の時をまつのみなりきとぞ。今にたゞこれを思へば實に夢の如きかな。明治の大御代とありてよりは、山にも平かなる路をつくりて車を通はし、河にも大いなる橋を渡して往來の便を計れり。しかのみならず陸には一日に百里を走る流車あり、海には風浪の憂へなき汽船ありて、朝には上野の花を眺めて夕には松島の月を賞することもいとやすくなりぬ。唯往來の便り、此くの如くよろしくなりしのみならず、到る處に旅舍の設けあれば、糧をもたらすの煩ひもなく、木蔭に宿り、木を枕とするの困難もなし。されば人皆な旅行のたのしきを知りて苦しさを知らず、變遷は世の常といひながらかくばかり古今差別の甚しきものはあらざるべし。さて旅行のさまのうつろひかはれるにつけて、想ひいださるゝは、紀行の變遷なりけり。貫之朝臣が土佐日記をかゝれしより、紀行といふもの代々を經ていとさはに物せられたれど、大方は歌を交へ文を飾りて、その詞藻に誇り、或はおのれ一人の心やりにせるのみぞ多かりし、今まこれを見れば文學として面白きと、且ついにしへの驛路のありさま、人情風俗政治などの片端を窺ふたよりとはなれど、他に讀者を益することもなし。然るに江戸時代となりてよりは一般に學問も開けしかば、實學に志し、兼ねて作文に長けたりし者も多く出でたりき、隨ふてまた旅行を好み紀行を書きたりし者も少からざりき、橘南谿の如きはその一人にして、然も抜群なるものなりき。

そも〳〵南谿は、もと醫を以てその家業とせしが、理學にも通じ、文學にも疎からざりき、平生旅行を好み、陸奥のはてより筑紫のすみ〳〵に至るまで、殆と

足跡の到らざりしところなし。さて當時の旅行はいにしへの如く甚しき不便もおかりしかど、おは今の人々の夢にだにも想はざる困難ありき。南谿もその旅行の間には幾度か生命をも失はんとせし危險をも犯したりき。かくて文學上の名勝佳區は云ふもさらなり、英雄豪傑の興敗せしところ、孝子順孫節婦義僕のいでし土地など、遍く探り、委しく尋ねて記るしたるのみかは、人情風俗の差別、氣候、產物等の異同に至るまで詳に考へ記るさずといふことおし、これあに紀行文の一大變遷にあらずや。これを見る者は坐ながらにして海内を遍遊するの思ひあるのみおらず、よろづの智識をも得ること他にこれに比すべき紀行あるを知らず。その文章また平易着實にして明快周密なれば、いさゝか文法の疵瑕はあるにもせよ、今日普通文の標準とし模範とするにはこよなきものおり、宜おる哉、世人早くよりこれを寫し傳へて愛讀し、また板本となりてもひろく世に行はれたり。

今や文學大に開け、旅行また便利とおりたれば、おのづからその紀行も新聞に雜誌に目も及ばぬ程いづれど、或は徒に貫之朝臣の餘風を慕ひて歌文にのみ心を用ひたるもの、或は學識の足らず穿鑿の精しからざるよりして見るべき價なきもの、或は行文の拙くして讀者を倦ましむるものおど多きが如きいかにぞや。

今日の青年は幸にしてこの文運隆盛の御代に生れ、未曾有の教育を受けたるものなれば、南谿の紀行を見て古人の困難を犯しゝこと、用意の周到おりしことおどを追想して名山大川を跋渉し、辛酸をなめ心膽を練り、或は僻地荒阪を廻りて人情風俗を察し、舊跡遺聞を探りて有益おる紀行を作り、以て世用を爲さんことを勉むべし。徒に文明の利器を利用して安逸のみ事とする者は、あにこゝに余が友平出古刀禰は尾張名古屋の產なるが、累世の醫家に生れながら文學に志篤きを以て、その初め中學の課程を修め、中ごろ醫學を修めて業を終へ、後更に文科大學に入りておのれが嗜好せる國文國史の講究に力を盡くし去ぬる七月またその修業を完うせり、たゞ一科の業を修むるにだに速成を希ふ今の世にしてかくばかり學の道に志深きはあに珍しからずや、彼れ常に南

谿の醫家にして文學にも長じたりしことを想ひ、其名の餘り今の世に現はれざることを惜み、このたびその紀行を校正し、頭註を加へて今樣の活版に付し、ひろく學生をして實用的紀行文の標準を悟らしめ、世人をしては遍く各地の有樣を知らしめ、萬の智識を得しめんとす。おのれまたこの紀行の文體をよみ七、常に愛讀せるものから、その再び世に出づることを喜び、一言を書きそへて讀者の注意を乞はんとするのみ。

明治二十七年十二月

高津鍬三郎

標註東西遊記上

橘南谿著述

平出古刀禰標註

發行の主旨

思へば五年前恰かも明治二十二年のことなり、先考一たび腹の心地例あらずとて病の床に臥し給ひけるより、日々に重りて、醫藥の効はか〳〵しうも見にざりければ、最早この世に永く住むべからずと覺悟し給ひ、我等兄弟をも枕邊近くあらべて後の事などねもごろに諭し給ひき、その後は醫藥も効あるべかりしかど、日頃讀書を好み給へる性とて、かゝる際までも種々の本とりよせて讀ませ給ひけるが、今は讀書の魂盡きたり、汝讀みきかすべしとのたまへば、われ承りて枕邊の本とりて讀みのこしたまへる所より讀めり、其折よめる本こそ、この東西遊記なれ、一ひらいまだおはらざるに、父のおのが嗜める本をば人に讀みきかせらるゝ程の、身の甲斐なさと歎き悔み給ふを、われも

慰むべきすべを知らで、哀しさ胸に迫り、涙いつしか頬のあたりをつたふ、傍に侍ふて看護する人人も、顔をそむけて鼻うちかめり、かくて幾もなくて父はうせ給ひぬ、われその頃までは東西遊記を知らざるにあらねど、さまで深く思ふことゝてはなかりき、さるにおき父のいまはの際まで讀み給へるといふこと肝に銘じて後は、只管その書をつかしく愛にて、明暮とおく暇あるときは手に取ること多かり、讀み讀みて、思ひあはすことあれば、上に標記しなんどしける間、この書にいふべからざる妙趣あることをおぼゆ、はては南谿といふ人、かつて知れることあるやうに、其人の姿、言葉なども、かくもあるべしと胸に浮ぶほどにおりぬ、そも此東西遊記は著者が自ら經歷せる國國の奇觀異聞を始め、孝子忠僕の善行に至るまで、何くれとなくしるして、或は褒め、或は誡しめたれば、智育德育の道にかなひ、剩さへ其文章は平易簡潔にして流麗なるにあらざれど、辭句皆眞摯を旨とし、意の赴く所に筆達して、いさゝかも晦澁不明の迹なく、實に我邦有數の能文といふべし、されば國文の摸範として學校の教科書にも充つべく、また家庭に備へて婦女兒童に讀ましむるには、こよなき良書ありける、されどもこの書、寛政の古へに刊行せられたれば世にうちたにたるにはあらねど、また多からず、故に吾まづこれを刊行せんとは志せり、されどもかばかりの次第のみなれば、この忙しき時に其勞をとるべくもあらず、なき父のいまはの際に望みて嗜み讀み給へることを思出ば、一日も早くこれを刊行して世に弘めんとの志自ら切なり、かく思ひ起つまゝに、遂にこれを刊行することゝおせり、さてこのたび新刊するには、文字の誤り、假名遣ひの少からぬを訂正して、んと思ひしが、南谿自らそれにて甘ずるものを、愚なる吾が恣に改删すること、著者の本意を傷くるに似て、角を矯めて牛を殺す恐れなきにあらざれば、そのまゝになしつ、また篇中の挿畫も一二を除けば必要と思ふべきものなし、挿畫をはさまざれば印刷も容易ければ、要にあらぬを悪く省くことと定めしも、更にまた思ひ返すにその畫もいたく心をいれて蘆雪、吳春、素絢、應瑞など、當時の名家を選びてかゝせけるものを、流石に削り去ることの惜しく、父も蘆雪が畫ける正木の顔のいと面白きことよとのたまひけることの、耳の底に殘りあれば、愈これを削るべからず、乃ち悉くさしいるゝことゝおせり、また讀者に預しめ橘南谿、其人の經歷性行を紹介せんとれもへど、如何にせん、そのこと多く傳はらず、また傳記の據るべきものもなし、僅にこの書及び北窓瑣談、雜病紀聞、偽

寒外傳なんどの、南谿自著の書の中に見にたる逸事を拾ひ集めて、やがてかれこれ考へあはせ、やう〳〵に一篇を綴りなして次に附したれど、事の誤りは少からざるべく、逸事猶餘りあるべし、この患は標註の上にも然り、もとその記事に思ひあたれること、同じことの他に見にたること、あるは山川の地位、人物の小傳など、おのれの知れるを何くれとなく記したれど、預じめ標註してんなどゝ思ひはかりてなしたるわざにあらず、自らの好事に閑餘の筆を弄したるなれば、精粗一樣に整はず、遺漏もとより多し、剩さへ頭欄の紙白餘りおくして、能く掲け盡さざりしこともあれば、これを以て讀者を益せんこと或は難かるべし、さりとて今これを補正するに暇おくて、こゝに標註東西遊記と題して梓に上すことゝなしぬ、其名實に逸ふといふ譏は、吾が甘じて受くる所なれども、希ふ、世間の人たち、まづ標註を外にして本文を熟讀玩味せられもせば、おのれに同好の友を得たる喜びあるのみならず、なき父を慰むる便ともなり、また文壇の幸となること少からざるべし、あなかしこ

明治廿七年一月

標註者識

橘南谿小傳

宮川春暉、字惠風、橘南谿と稱し、梅華仙史と號せり、寶暦の初め、伊勢國藤堂侯の領内に生れぬ、幼きころより物の哀れを知るといふ情いと深かりき、七八歳の頃なりける、ある夜其父の傍にありけるに、父は孤燈を挑げて孟子を讀めり、春暉はその見給ふ書ぞ何事かかゝげあると問ひける、父はされば汝にも讀みきかすべしとて、羊を以て牛に代ふる章を講しきかせてけり、春暉は幼心にも堪がたく、哀れさ胸に塞にて泣き出せり、傍にありし母も、その子の泣くにひかされて、胸迫りてそゞろに涕を催しぬ、かくて夜更け、各枕に就きぬ、結びし夢のさめし朝にも、春暉は其哀れを忘るゝこと能はず、また其哀れをしるせる書を忘るゝと能はざりき、その後は折節父に請ひて孟子を聽けり、聽き聽き、自も讀みもする間に孟子七卷は心易く誦するはゞになれり、かくて孟子より論語に進み、さては學問に志すことゝありぬ、やがて西山といふ學者を師として心のまゝに學べり、『平かなる地方壹町ばかりもある所に、紅葉のひまなく植つめて、其中に菴結びて住みたるは、いかばかり嬉しかるらん』との優しき望は、彼が十歳の時の望ありき、而してその望は終生彼の志望を支配せり、多くの書を獵

るに從ひて、彼の意中に崇拜すべき人傑として追慕せしは、西行、兼好、老子等、總じて厭生的の人ならざるはなし、就中兼好は彼の最も意中の人ありき、故にそのいへる詞に『月は隈なく花は盛りあるをこのみ見るものかはと、兼好は厭に風流の意いと深かるべく、つれ〳〵草の一書、其才氣の絶倫あるを見るへし、この法師とうち向ひて物語せは、人をして心醉せしむへし』とはいへり

その父は春暉が十四五歳の時に失せぬ、されば家計の上よりも彼をして讀書にのみ耽けらしむべきにあらず、また彼は孝養の心いと深くして、母の生計のことに苦心せんことを思ひ、遂にその職として醫とならんと志して醫術を學びぬ、その業畧ぼ成りて、僻遠の地にては名をなすに足らざればとて、十九歳の春遂に故郷を去りて京師に上りぬ、されども老たる母を唯一人故郷に捨置んこと、心安からずとて幾もなくして母を迎へとりしも、いまだ日々の糊口に苦しむほどなれば、奴婢を置くに資なくして母子相對ひてくらせり、其母は貞順方正なる婦人なりき、春暉か鄙より出て、京洛の物珍しきに心浮れ、花よ月よと遊行にのみ傾き、折〳〵は夜も早く寢ね、又朝遲く起きてよしなき技藝に日を費し、徒なる雜談に月を重ぬることのありしに、その時々に母は温言を以て

汝が鄕國を去り來りて、かく貧困に住居するは何の爲ぞや、我もまた汝が行末をも見ばやと、年老し後に墳墓の國に別れ來りて守り居るは、學問をも勤めよき人にもなりて天下に名をも揚げよかしと思ふのみ、然るに汝かくいたづらに年月を費して世の人並に游び暮らすことは、始めの心は忘れたるにや、さらで父母の國を輕輕敷去りしを、其罪は何をもてつくなふことや、汝は心あらば能々とれもひ見るべし』なぞ誡しめぬ、其折〳〵は春暉その庭訓身にしみて、其任重くして途遠きを思ひ、自ら恐れ愼しみ、勵み勤めて、醫術の蘊奥を究め、殊に香川太冲の學流を汲めり、彼れ太冲を稱して曰く、漢土の醫は文質に勝り、皇國の醫は質文に勝れり、文質兩ながら備りて、漢土に愧ちざるは、特り香川太冲のみといへり、彼れ、また本邦の醫籍を評して『後世の書はわけて文盲不文あり、唯賀川子玄の產論、畑柳安の醫學院學範の二書は甚佳なり、本邦醫書中の第一の文章とすべし、其外の醫書は唐土抔へは渡し難し』といへり、その醫學を勤勉せし餘暇にはまた博く和漢の書に涉り、物に觸れ、情動きては詩を吟し、歌を詠し、また俳諧を嘯きぬ、いつしか同好の友を得て、彼が東西漫遊の志を促さしめたり、其友といふは、奥羽の端より筑紫の端まで、あらゆる奇勝を探りて、笈埃隨筆

を著せる俳人五井塘雨これなり、塘雨が庵の門は常に鎖されて、肱笠雨に暫しの檐をかるも、顔は笹蟹の絲にからまるほどなるを、春暉は親しみてこれと往來せり、塘雨が探り來れる東西の奇勝には、春暉殆と心醉せるが如し、彼が漫遊の志こゝに於て勃々たり、この時春暉が家計漸く豊かならんとす、春暉素より富貴を好めり、されども彼には富貴に勝る無上の樂あり、彼れいへらく、『富貴は人の欲する所にて余もこれを憎めるにはあらねど、もし唯世の中の樂みを論せば、身のよせも重からで寶もゝたず、衣食の事はいつれの境に居れるにも、人の惠むばかりのさへありて、皆人のきそひあらそふ富貴のみちは、少しそむけつゝ、須磨の秋吉野の春、唯心にまかせて時にれくれず、又思ふ人あれバ千里の遠きをも必す尋ね訪ん事こそ、いと興深からんとは、我のみ思ふかもしらず』といへり、故に漫遊は彼が無上の快樂たりしなり

天明元年その母死せぬ、親を失ひし子の哀しみは孰れもかはらず、春暉はその哀しみの中にねもごろに黒谷に葬りぬ、春暉いまだ妻を迎へざれば子もあらず、既に兩親に別れてければ、今は孝養の絆も斷れて身に繫るものなし、こゝに至りて其年既に西遊を思ひ立てり、彼が漫遊の素志は塘雨の如く曾に天下の

奇勝を探らんためのみにあらず、寧ろ『諸國の風土氣候を親しく身に受け考へて、著す所の醫書にあやまり少きやうにあらしめ、普く世間の病者の益にもならんやうとのこと』なり、なべて彼の漫遊の主旨は醫術修行にして、山水の明媚を探り、奇勝絶佳の地を踏むは其餘事にあり、しかるにまた障ることあり

そもこの天明の初年といふは、光格天皇の初世にして、幕府には德川家治將軍たり、老中田沼意知恩寵を專にし、威權を恣にし、賄賂公行し、刑賞もとよりあたらず、享保の治政漸く弛みて上下驕傲に耽り、諸藩の財政困窮し、士民の賦課重く、物價騰貴し、商況振はず、就中細民の困難日一日に深きに陷れり、世既に斯の如くなるに、あまつさへ天變地災年毎に夥しく、伊豆の大島、大隅の櫻島等の噴火を始め地震火災洪水等各地に災し、氣候甚だ不順にして三伏にも暑さを覺えざる程なりき、されバ凶作うち續きて、殊に西國は飢饉の慘狀を見んとす、從つて人心も甚だ穩からずして野盜强盜夥しくありて劫掠の噂まち〳〵なり、若し漫遊の時を選ば〳〵この頃はゞ便りあしきはなし、しかるに春暉は其二年の秋、思ひ立つまゝに門生文藏なる者を從へて鹿島立ちしぬ

春暉はまづ京畿を出て〻道を山陽にとれり、播磨には曾根の松を覩、備後には痢疾を療して弘法大師の御來降と崇められ、やがて三原より安藝周防を經て長門に至り、赤間ヶ關より豐前の小倉に渡り、それより豐後を歴遊し、南境に聳にたる祖母ヶ嶽に登り、日向に下り、霧島山に天の逆鋒を探り、大隅薩摩を廻りける間にその年は暮れぬ、明くる春に至りて肥後國玖摩の城下に五十日許の間留り、やがて肥前の長崎に至りしは、若葉交りの茂みに杜鵑一聲音づるゝ頃ありき、顯微鏡、隣目鏡、エレキテール等聞くにつきて、見るにつきて心を驚かすものゝみ、七月長崎を出立ちて雲仙ヶ嶽に登り、それより島原に出てゝ船に搭して、天草島に渡り、惣象山に不知火の奇觀を看、九州全國廻り盡して、四國に渡り、伊豫に扶桑木を搜め得て、やがて京師に還りしは其年の秋なりき

かく西遊をはりけるに、また東遊を思ひ立ちて天明四年の秋、門生養軒といふを從へて鹿島立ちぬ、京城を離れてより道を東海にとれり、まづ其心を惹きしは鎌倉あり、古の人が大津の浦に比べしといふ繁盛も、今はわれにわれて神社佛閣に留めたる昔の偉に懷古の情忍びあへず、江戸より水戸に遊び、筑波山に登りなどして其年を暮らし、やがて仙臺に到りしは其翌天明五年三月なり、

末の松山、鹽竈浦、野田の玉川など名勝舊蹟を探り、九月より其翌六年三月に至るまで奥羽の北端、さては越後越中の地を探りぬ、かゝる北邊に遊ぶ人、大凡は皆、春の季より秋の半まで雪既に消え霜いまだ降りざる時を選ぶなるを、春暉は醫術修行の爲めなればとて、朔風肌を劈き深雪征途に迷ふ時を選びしことなれば、道々の艱難はいひもつくすべからず、飛馬川の波浪、尾國の雪、羽州の鬼、津輕の饑餓其他千辛萬苦身の危きこと度々に及べり、三月の中旬越後より佐渡に渡らんとして颶風に遇ひて止み、信濃の諏訪松本に遊び、川中島の古戰場を吊らひて更に越後より越中に入り、加賀を經て越前に來り、近江に廻りて小川村に中江藤樹の講堂をたづねて京に歸りぬ、

かく西遊東遊合せて五年、其他南紀の歴遊等を併せて漫遊すること前後四度に及べり、その東遊を畢へて歸京せし後は門を張りて醫を業とせり、又朝に仕へて尚藥に任ぜられ、石見介に叙せられぬ、名聲京城に高くして贄を執りて其門に入るもの少からざりき、彼は好で傷寒論を講せり、從て其著書にも傷寒論に關はるもの尤も多かり、傷寒論分注、傷寒論邇言、傷寒論外傳あり、其他痘瘡水鏡錄、痘瘡玉環方、藥方小牋、國語律呂考等、寛政の初より前後相踵て刊行せられ

たり、春庵自らいへらく、『吾醫を學ぶこと廿餘年、醫學に於ては和漢古今に讓らずと竊に獨り思ふ、其他の技藝年若きより多端に渡りて、畢然とも何事も人並にも至れることなし、これは修業の功足らざるなるべし、未熟の藝にて時にふれよく出來たる時、人の稱美を得れば慮あることは知りながら、何とやら嬉しき心地し、人の毀を聞ては悅さる心地す、但醫學の事を他人評するには、よしと稱せられても嬉しくもわらず、惡敗そしられても腹立つ心聊も起らず、これは自ら安心立命し居る故あり』といへり、彼の如き謙讓なる心を以て猶此言あるは、自ら其醫術に信する所厚かりしを知るべし、彼は我國の文學を研ぎ、歌を詠じ、て、少くも所謂國學者流の偏僻あるべきに、能く和蘭の醫說には一揖を施せり、彼れ和蘭を評して『細工の微妙なることは世界の內阿蘭陀に勝る國なし』といひ、また『天下之醫學大抵漢人長窮理、阿蘭人精實測、阿蘭人之辨臟腑筋骨鑿鑿可據、其論皆盡精妙無復餘蘊、觀解體新書而可見也、……其實測之精多和漢古今未曾有之說、』といへり、これ彼が遠く崎陽に遊びて「エレキテール」顯微鏡に驚歎せし結果あらざるべからず、しかも彼はかの「エレキテール」に摸して自ら發電器を造り試みぬ、この點に至れば、西行兼好輩の厭世者流を慕ふ

にも似ず、怪は何處までも其奧を究めんとす、日常投する藥物にして、假りに奇効あり、靈効ありといはゞ、これが所以の理を尋究せざれば休まず、徒に奇といひ、靈といふは自ら愧づる所となせり、故にいへらく『醫家先生の詞に奇妙といふことあり、苟も醫學する者はいふべからざることなり、……この奇妙奇妙といふ詞によりて、醫學の筋終にかくるゝことに至る』といへり、また『北極星地を下るの高下によりて、地球の南北を知ることとなり、地上にては眞直に貳拾五里程を隔つる時は天にて壹度を逆ふ故に、北極星の度數を知れば居おがら國の南北を知り、又國の寒暖を知る、醫者も國々の氣候を知らざれば其國の陰陽變化を盡さず、故に疾病をも察することゝ能はず』とて、西游東游の途すがら、北極星の度數を測らんとて、行旅に携帶し得べき、便利なる測量器を創製して携へありき、行く國々に於て測れり、其成績の三四を揭ぐれば

大隅國佐多郡佐多岬	三拾壹度弱
山城國　京都	三拾五度強
武藏國　江戸	三拾六度強
越中國　新川郡富山	三拾六度五分強

出羽國秋田郡秋田……四拾　度五分
出羽國磐手郡澁民……四拾　度七分
陸奥國津輕郡碇ヶ關……四拾壹度四分
陸奥國津輕郡青森……四拾壹度七分
陸奥國津輕郡三馬屋……四拾貳度貳分

春暉また音律に精通し、梵寺の鯨聲を聞きて其音調を覺れり、天王寺の鐘を聞きて古鐘にあらざることを知り、南長柄の鐘を見て唐土北燕の物にして其伴、異の黃鐘なるに感し、又自ら黃鐘調の鐘を鑄さしめて其發音を究めたり、こゝに至れば彼れは宛然理學者の如し

春暉は當時の醫學者の中に於ても有數の者にして、其著書も頗る樞要のもの多し、殊に我國の醫學史の上に於ても其名を記せざるべからざるは、彼が脚氣に關る所說あり、脚氣に關る醫說は梶原性全の頓醫抄、長田德本の梅花無盡藏を始めとして、曲直瀨道三の醫學天正記には治驗を揭け、香川修菴の行餘醫言、後藤艮山の校正病因考、永富獨嘯菴の漫遊雜記、皆これを論及せるも、未だ春暉の所說の如き創見あり、春暉はまづ統計的に『脚氣は京都江戸に多くして他

國に病む者甚だ稀れなり』といひて、地方病なることを推考し、『又脚氣は王侯貴人に稀れに、又雇夫、下賤、勞働の者に無く、唯江戸にては侯國の武士勤役に來り居る者は最多く、格別身を營まざる商賈にあり、京にても商賈の手代或は終日坐して動ざる職人、または他邦より來り居る者、書生等に甚だ多し』と論し、其源因を卑濕に歸して濕拔きの法を創意せり、其法といふは床下の土地に幅三尺深二尺許なる空堀を掘り、地形の低き方に水氣の下り去るやうに勾配を附け、其溝の中に茶椀程つゝの石を入れ置けば、床下の水濕滴りぬけて濕氣の蒸し昇ること格別に少しといへり、また其療法に向つて轉地を緊要なる療法として唱道せり、脚氣に於ける轉地療治の無二の偉効あることは醫學者の確信する所なり、而してこの療法を創意せしは春暉その人なり

寛政の初め春暉は城南伏見に移り住めり(後また京都に還り住みしが如きも其年月を知らず)、其居宅は梅山に程近し、春暖の日毎に書生うち具してこれに遊びぬ、游步閑散自ら和靖に比せり、畢竟梅華仙史の號これによれるか、また常に桃山の觀月臺を賞し、『諸州の名勝を見たれど、かしこの如く明媚にしてしかも艶なる風景はなし』とて、折節は杖を曳けり、これより先妻を迎へて女子

を設けぬ、四十に今一つ足らぬといふ年に至りて始めて男子を設けり、親の身の嬉しさは早く成長せよかし、やがてなに敎へん、おににすべき、我身ながらいと程遠きことまでも思ひとれるに、はては笑を催して

おのが身の老ゆくことは忘られて
ひとゝなる子の末ぞまたるゝ

その子生長して後、春德といひ、芳谿と稱し、桃仙と號せり

『天下に漫游すること前後四度にして都合五年餘、それより京に歸りても、日夜治療に奔走し、敎授に罷勞し、學問の暇おく、著述の功を飲けり、殊に幼少より甚多病にして、痩たることは主家おき犬の如く、死に近き痢病患ふること四度、時疫傷寒各一度、其外一月二月枕に臥す怪病は、每年病ざる事もなし』といふは、これ春暉が當時の歎なりしに、この頃より不幸にも喘息に罹りて、一ケ月に三回も四回も發作して、讀書に、遊行に、苟くも精神、肉體を勞することは皆發作の誘因となれり、さりながら彼は勉めて其業を勵み、餘ある暇には筆硯に親しみて著述をなせり、寛政七年東西遊記を刊行して世に出しぬ、これ嘗て東西漫遊せるうちに見聞せる奇事異聞の實記なり、その記事皆世人の意外に出るものの多きのみならず、その文章もなだらかに、中には德育の模範とおるべきものすら載せて、懇に說き諭す所あれば昔く文士の間にもておされて、彼の文名江湖に嘖嘖たり、其年正親町某卿を訪ひけるに會ま和歌の會の催しありて、春暉にも題を分ちたれば春月幽といふを探り得たり、乃ち詠して

花鳥は霞つくして暮るゝ夜に
のこりてかゝる春の夕月

とはよめり、彼れ言へらく『何事も趣を解するとに解せざるとに其味はあることなり、譬へば杜鵑の聲おもしろしといふものにはあらねど、唯その鳴くおりの夜ふけ雨しめやかなる五月雨の空に、ほのかおる一聲他の音に比すべきものなし、故に昔より杜鵑の聲鶯の初音よりも人人の待詫ることあり、此境を會せされば詩も歌も通ずべからず』といへり、而して春暉は能くこの趣を解せり、東西游記の文は唯ありのまゝを寫して、浮華の迹おし、讀み去り讀み來りて、謂ふ可らざる妙味を感する所以は、蓋し能くこの趣を解してこれを草せしによるのみ、寛政九年東游記續篇刊行せられ、翌十年西游記續篇刊行せられたり、而して猶東游記三篇を世に出さんとし、また其間に醫書の著述世に出さゞる

もの卷を重ねたりき

春暉著述に心を勞すれバ宿痾愈彼を苦しめり、今は止むおく仕を辭して薙髪せり、時に四十四歳なり、これより後は著述は素より、詩歌俳諧に至るまで、かりそめにも思ひを費やし、筆硯にたづさはることは聊もあづからざる如くおせり、然れども猶多年の心勞を以て草し置ける醫書の稿本半成りかゝりたるが、心に忘れ難く覺にて、見るにつきて慽みの種子とおれバ、鋭意其稿五十卷を加茂川原に齎らし行きて火をかけて燒きすて、消え殘る一片の灰に心安じて『我身の病患に沈めるをも陰陽の妙用を論し極めて、餘りに天地の秘を洩せる事を初めて知りて、この草稿を燒たる後は心にかゝる事なく、何となくのどやかにてながく其後は喘きも漸く輕くなりぬ』といへり

その後は單に醫を以て業となして、只管餘生を養ふことを勉めたり、されども暇あれば猶帷を垂れて醫書を講せり、文化二年正月十日遂に永く眠りぬ、其生年を知らざれバ、其享年をも知ることを能はず、大凡を以て推し測るに五十に三つ四つも過ぎたるべし、その遺稿に雜病紀聞、橘氏醫話、藥量考、讀產論、方意辨、度量衡考辨意、漢語律呂考、北窓瑣談等ありき、春暉また老子を愛讀し、自らこれに

註解を加へて一本をなす、名けて老子和字解といふ、常にその『成而不恃、生而不有』といふ句を守り、予か一生の趣向これにありとて『この句を守れば其功にも誇らず、功に誇らざれば、人の恨を買ふこともなし、自然に志も大になり、勤も怠らぬやうになるなり、この句の功德甚だ大なり、後世に同志の人あらば味へ考ふべし』といへり、春暉は能くこの語に養成せられて、またこの語の人たるを得たり

東西遊記原序

史遷か跡を、追て名山大川を探るは、丈夫の志わさなるへし。志かはあれと官あ
る人は身を意にまかせす、處士は路費にとはし、いかにともすへからすとおむ、
謝肇淛かなけきはさることなり。はた是れにくはふるにいとかたきことなん、
かす〳〵あるへき。まつ心剛に身健ならされはあたはす、舊記をしらされは勝
地の感おし、文筆にともしけれは錄すへからす。かく取あつむるとのかなはね
はにや、こゝにはさる人もしるせる文もいとまれなり。むかし郡縣の政おりし
代國々の守掾などにてくたれりし人々、歌よみしたる所には名所とて今も聞
ゆれと、時うつりてありしにもあらぬか多く、國々の風土記といへるも大かた
にはろひたれは、其由もまたしられす。中頃に能因西行の両法師おとこそけし、
かるさかいへも執行せられぬと聞ゆれと記行こまやかならす。後には宗祇法
師あれと是も名たる所斗をあら〳〵しるされたれは、其けしきさへ明らかな
らす、まして土風人情をやはつかに能野山中の小兒か米をしらす、越路の雪に
妖怪のあらはれしなといへるたくひのみは、俳壞のれもむきをしるのよしに

はありける。こゝに此西東遊記は橘君子の著す所にして、其質かのかたきことゝもをかね備へて、危を犯し嶮を凌き、年月を重ね、實をもて錄するところあり。其勇其志感ずるにあまりあり、はた仁義を基とせる物から、所〳〵忠孝の人の行狀を記し、政の善惡をもおもはしむるは、一言半句の間にも人を勸るの微意みゆるなん、世に稀有なる書といふへし。さるにある人のいふ、此君子人のためになるはよし、自かへりみるにはいかに、其山川跋渉の間、幾たひか死地に入られたりしは、王陽かにくむ所、命をしるものは巖墻のもとにたゝさるのいましめにもたかへりと。予いふ、然り、しかれとも、こゝろあるものはまたかゝらて、は其志成へからす。孔夫子の宋に窘、陳蔡に厄し給ひしも、みちを天下に施しつらんの志によりてなり。佛徒にしては玄奘三藏のごとき流砂の難を犯されけるにこそ其願はありけらし。今橘君も其身をわすれて醫療の術を極め、ひろく世を救ひ遠く後にはとこさんの志なれは、其間には北方の强もまし過るけれと、其過はみつからしりて、門生の詩にも感悟せられたれは他の口を入へからす。およそ此筆記を得て居おからに千里の外をしるは、又なきたまものならすやはいてれのれは若きより遠遊のねかひはありおから、其かたはしにも及はて、今はいたつらに頭の霜を重ね、閨の埋火をたのむのみなれは、わきて此記に心醉せりとおんこたへ侍りき。つひにこれをしるして橘君によせ侍るは序ともなりおましや。

閑田子蒿蹊

東西遊記

凡例

一予醫學修行の爲に漫遊する事、前後合せて五年、東西南北到らざる所なし。然るに此書只東西遊記と名付るものは、京を日本の中央とし、二つに分ちて東西とし、南北は其中にこむるもの也。

一予が漫遊、もと醫學の爲なれば醫事にかゝれることは、雜談といへども別に記錄して同志の人にも示す。只此書は旅中見聞せる事を筆のついてにしるせるものにして、強て其事の虛實を正さず、誤りしるせる事も多かるへし。見る人其杜撰をとがむることなかれ。

一此書中にしるせる事、其事〳〵に付て思ひ考ふることも多けれとも、わさと此書中には愚按を加へず、議論取捨は見る人の心にあるへし。

西遊記目錄

壹の巻

一槍垣女　一牛の生皮　一猪の狩倉の大蛇
一琵琶の妙手　一知らぬ火　一榎木の大蛇
一樒馬　一石敢當

武の巻

一冷暖玉　一孔明の陣太鼓　一飯野の風穴　一廉頗夫婦對面
一甕龍　一十六日櫻　一魂祭り　一渡り鶴
一獵犬

三の巻

一長江の旅泊　一山女　一求麻川　一龍門の瀧
一山靈　一玳瑁　一一足鳥　一麝香鼠
一春天　一神樂　一いろは

四の巻

一篤實　一仙人　一孝行　一流人

一阿蘇山　一仁斯至
五の巻
一天の逆鉾　一目鏡橋　一家豬口　一地獄
一東海氏の墓　一清正公　一山沙口　一與次兵衛か瀦
一景清か母　一卓子　一鐘乳穴

西遊記目錄終

○天明癸卯は天明三年なり。○南谿自著の北窓瑣談に、檜垣の女の圖上人に見せたりしに、今より千餘年前にかゝりたる紋樣にて、なほ異樣なり。袖長く後の方へなびくなり。○檜垣女の圖は、昔人の間に、此圖に人物の如きものを成せるなり。○寶暦二年、細川越中守重賢、老臣堀平太左衛門勝名、中山儀右衛門、秋山靭負、定政に命じて、延設せしめ、學館なれり。○後撰集は、村上天皇の天暦五年、大中臣能宣等に勅して、古今集以後五十年間の歌を撰集せしなり。○扶桑拾葉集は、德川光圀の編輯せしなり。

西遊記卷之壹

檜垣女

南谿子著

天明癸卯の春、肥後國岩戸の觀音の巖窟の中に、或人願ひの事有りて五百羅漢を石もて彫刻して安置せしに、其事やう〳〵成就して猶窟の額にも安置せばやと人〻はかりしかど、たやすくもいたり通ふへき所ならねは、石工をふごといふ物に入れて、繩もて山の峯より釣り下して辛うして其額に至り、岩をゑりうがちたりしに一所やはらかなりしかは、いぶかしくてくはしく見るに石の筐一つを埋たり。とりいたして人〻集り開きみるに內に、一重の石筐有り、其蓋に檜垣女形自作といふ六字を彫付たり、蓋をひらけは小き像を入れたり、像は陶器のやうにも見ゆ。わたくしにはからふへきに非ずとて熊本の官府にもて出つ、すなはち時習館に下したまふ。館の學士打集りて其事を書記し且其像を寫し、石にゑり紙に寫しそこゝもてはやしぬ。其頃予も熊本にありしに、人〻より此物語を聞侍りしかは、其圖をこひ得て都のつとにはあしぬ。此檜垣の女

○檜垣巡集は、また群書類從卷二百七十二に載せたり。
○大和物語は花山天皇の作なりと云へり。
○滋春の作なりと云へり。
○和語に云、筑紫の白川といふ所に住侍ひけりと云云

は其名高くして諸書に見へたり。後撰集十七卷に、筑紫の白川といふ所に住侍けるに、大武藤原興範朝臣のまかりわたるついてに、水たべんとてたちよりて乞けれは、水をもて出てよみ侍りける。

年ふれは我黒髪も白川の、みつはくむまで老にけるかな

又扶桑拾葉集第弐卷に檜垣か家の集を載たり。又大和物語に純友か討手の使に大武小野好古下りて、檜垣の女か家のありしわたりを尋て、いみ去うあはれかれりと見へたり。又諸本にも、むかし筑前の太宰府に檜垣の廬り去つらいて住し白拍子、後におとろへて此白川のほとりに住しなりと見へたり。檜垣の女はまことに賤しき白拍子なりしかと風雅に長し一世に名を施し、猶千秋の後を期して、かく人跡絶たる所に我像をみつから造りて籠置る事、丈夫にもおさおさおとらさる志なりけり。興範好古の何くれおと其故おきにしもあらす。

牛の生皮

鹿兒島に遊ひける頃、めづらしき罪人有りけり。城下を去る事遠き田舍の百姓何某といへる者、慾心深く愚かなりしか、かね〳〵何者にか聞けん、牛の生皮は

○鹿兒島は薩摩國鹿兒島郡の南端にあるて島津侯の城市なり

○天保公裁といふ書に甲斐國巨摩郡西河内領の農民亥の年寅の日寅の刻生れ一兒の生膽ハ、癇病の藥となると信して拾歳の小兒の生膽を取りしことみゆ
○北窓瑣談に酉谿自ら云く、無益の事にハ蟷螂の小蟲といへとも殺生すましき事なり、況や我慰に好みて物の命を害し傷ひやふる事は不仁の甚なりといへり

偶たつときものありとて、親しき友壹人かたらひて牛をいきながらに皮を剝取りぬ。其くるしみ鳴事たとへんかたなし剝終りて其皮を賣けれと格別の重寶になるものにあらすとて誰買求る人もなかりし。此事村役人聞及てけしからさる心根の者おりとにくみて城下へ訴へ、城主にもいたくにくませ玉ひて、貳人共に獄屋にめしこめられ、ついに刑をくはへられにけり。仁政禽獸に及へりといふべし。世の人生の字を心得違ひてよりこのかた、狐狸犬鼠甚敗にいたつては人までもいき膽を取るなどいふ事有りて、上も無き妙藥のやうにもてはやし、折節は心強き惡人有りて禽獸の腹をいきおがら剖破り、其苦痛をあはれます膽を取得て悦ふ事おろかおりといふへきや、なさけおきといふへきや。近江の藤樹先生も考へ置給ひし事あり、生膽の生は生鯛生栗おといへる生と同し事にて干からひざるものを生といふ、生栗と書るとて栗の實にいきたるは有へからず、生はなまとよむべしとこそ。いきたるには活の字を書あり、醫書なとにも蟾酥なと取るには活蟾と書たり。右の罪人にもかねて此事を聞しめはかゝるわざはひはあらさらましを。

榎木の大蛇

○求麻郡の城下は相良侯の城市人吉なり云ふ

肥後國求麻郡の御城下五日町といへる所に、知足軒といふ小庵有り。其庵の裏はすなはち求麻川なり。其川端に大なる榎木あり。地より上三四間程の所二またに成りたるに、其またの間うつろに成りゐて、其中に年久敷大蛇すめり。時々此榎木のまたに出るを城下の人々は多く見及へり。顔を見合すれは病む事あるとて、此木の下を通るものは頭を垂れて通る常の事なり。ふとさ二三尺まわりにて惣身色白く、長さは縱に三尺餘なり、たとへは犬の足のなきかとし、又芋虫によく似たりといふ。所の者是を一寸坊蛇と云。昔より人を害する事はなしとなり。予も毎度其榎木の下にいたり、うかゞひ見しかと、折あしくてやついに見さりき。

猪の狩倉の大蛇

是も予か遊ひし前年の事なりし。求麻の城下より六里はかり離れて猪の狩倉といふ所あり。此所の百姓二人山深く木こりに入りしに、其ふとさ四斗桶はかりにして長さ八九尺はかりある大蛇、草の茂げれる間よりさはと出て追來る。のがれ得べうもあらされは二人ともに取てかへし、木こる那刀もて命をかきりに働しにつゐに大蛇を打殺しぬ。この事予か求麻にいたりし頃、いまた半年斗の後なれは、右の打殺せし所にいまた骨は朽殘り、其時の俤をも見つへけれは、いさや行て見んと求麻の本卿者右田助右衛門誘ひしかとも、はや蛸蛇膽は腐りぬへし、骨のみ見る事も益なし、是はかりの大さの蛸蛇は此邊にてはめづらしからすとて等閑に打過しぬ。此蛇も榎木の蛇と同種類なるへし。かく短く太き蛇もあるものにや。

蛸蛇膽、蛸蛇骨、皆醫家の珍重する奇藥なり。予いまた是までに其眞物を見る事をたも得されは、膽骨ともに得たくて右田をもすゝめしあり。今にておもへは獨りにても行て見るへき事を、彼地の人〻のとかくめづらしがらざるにて、それに聞なれて、予もあまり珍奇の事にも思ひ取らで等閑に打過せしなり。かへすゝも殘り多き事なりぬ。

琵琶の妙手

都の琵琶は只平家物語をうたふに、其聲の調子を引出すために琵琶を用ゆ。又雅樂の琵琶は太鼓にるいして畢竟は拍子のみなり、律は糸の事なれは有りう

○蛸蛸は本草學の智識には餘り富まざりき、また自らもしかいへり

○蛸蛇は目膿、痛心、腹脹急、痛下部、脹急痛、小兒八癎等に治効ある由、本草綱目に見へたり

○琵琶法師は源氏物語明石の卷にも見えて古くよりあ

るが、平家物語をうたふことハ徒然草に後鳥羽院の御時信濃前司行長遁世して慈鎮和尚の扶持をうけ平家物語をつくり生佛といひける盲人ゝ教てかたらせけり、武士の業ハ生佛東國の者ゝて武士に問聞てかゝせけり、彼生佛の生れつきの聖を今の琵琶法師は學びたるなりといへり

○寄多村信節云、一種盲人琵琶を彼し地神經を師して讀神を祭る、佛說地神經一卷あり、鄙俗の文字ゝして國中になきものといへり、この經祝なるものを今ハ琵琶法師と呼て當道の背者ハ賤しめて部類を異ゝする者あり、古へびは法師といふはすべ

ちともいふへし。只此二種あれとも遊ふ人稀にして感する人も又稀れなり。俗間には絶てなし。九州には琵琶法師といふもの夥敷有りて琵琶を彈し、路頭に立て米をもらふ、其うた其律かまびすしくして聞に堪へず、又琵琶は地神經をひく。三味線法師あとのいやしき者によはひすへきものにあらずなど、おこかましくいひのゝしりて篭稜するも有り。薩摩大隅の二國もつとも多し。されと此二州なるは他國とは大に異なり、其形も平家琵琶なとよりはちいさく、撥は黄楊木にて作り甚大にして扇をひらけるかとし。年若き武士皆琵琶をもて遊ふ。彼二州は名たゝる勇猛の風なるに裾高くかゝげ、長き刀を十文字に横たへたる荒おのこの、夜な〳〵琵琶ひきありく其風情おもひやるへし。其調正しく其かた雅にして他の國の琵琶とは似もよらず、殊に大隅國には池田甚兵衛といふ人有りて當時第一の名人なるよし、夜ふけ月清きに獨り琵琶を彈すれは浦千鳥集り來る事常のとなりと聞にそ、其人ゆかしくて彼地に尋いたり見るに始羅郡の砂清き浦にはとりして茅の軒端物さひしく住なせり。かくといひ入るれはとく迎へ入れて相見る、其人むそじにあまりて温潤の質なり。打つけに琵琶のぞみたれは遠くたつね來りしにかんせしにや又好める道ゆへにや、

で、ハ彈て平家かたる者をいふ、

賤きびは法師も古くありしなるべし、直幹申文の讃岐ゝ地上ゝ孤を數て居りびはを彈て錢乞ふさまの盲人をかきたり（嬉遊笑覽卷六）

○此寛政十年戊午の大隅國の人池田甚兵衛上京して、余か家ゝ逗留し、余か琵琶を寫しめゝ木の下の新田正月の琵琶一面を作り、始て都に贈り、其琵琶の銘を美耶古と名付し、余か家の寶とす

○始羅郡は始羅郡の誤なり

○但馬守は平經正なり

○平盛子は平經正の子なり

○皇宮亮は皇后宮亮なり

○四位下は正四位下なり

○竹生島は竹生島社前ゝ琵琶を進むこと平家物語に出たり

いなめる色もなく木の下といふ名器を取出して、ひとつふたつ彈せり。其たへなる事はさらにもいはず、誠にいにしへ但馬守なと堪能の名を得て水神も感せしなといふを、今の京都の琵琶に思ひくらべてはいぶかしく疑しかりける か、今日此國の琵琶を聞てはしめて水神の感せしも理りなりと覺へ、年ころのうたかひは皆はれにき。京都のむかしの聲は皆此あたりに傳り殘りて、今にてはかへつて京都はむかしの聲たへたりとこそしられ。又過し年江州竹生島に詣でし時經正の彈玉ひし琵琶の撥ありとて見侍りしか、水牛にて造り本のかたはくりて末は三味線の撥のとく廣さ纔に、貳三寸には過さりし、此國の撥とは天壌の相違なり。竹生島にあるは後世の僞物あるへしやとおもふ。予もあまりめつらしさに撥壹つ求得て都のつとに持歸り、人に見すれは皆目を驚せり。又鹿兒島にありし時森本見流なる人の家に招かれ、種々馳走の上寶生といへる法師をよびて琵琶をひかせり。遠近、五倫、花の香、小町、玉章、似我、墨繪、老曾の森、鵞鶯の夢なといふうた數〳〵ひけり、先其うたの名も雅にして其章もまた古めかし。其音のひゝきは春の鳥の霞の中に囀るかとく、谷の清水の岩はにむせふに似たり。其しらべ高きは冬の嵐の枯殘る松に渡るかとし。京都なとにて

○伊東氏ハ源頼朝伊東祐時を兒湯郡都於郡の守護とせり、其子孫この地の豪族となれり、天正の頃島津氏ゑ合併せらる

○大友氏ハ源頼朝大友能直を豊後の守護となせしよりこの地の豪族となる、其後大友義鎮に至りて其勢益盛となる、其子義統島津氏と戰つて大に敗らる

○しらぬ火のこと、中島廣足の不知火考あり、この章と對照すべし

○筑紫の海ハ肥前筑後肥後の三州ゑ亘る内海なり、一

聞つる平家琵琶などには似もよらす、彼白樂天か琵琶行はじめて思ひ合せり。又崩といふものあり、是は薩州のむかし伊東大友おとゝ合戰の事を語るにて、其聲もはげしく琵琶の手も繁手おり、はしめのうたとは格別に異なるものおり、もつとも是わ新ち敷間ゆ。はしめのうた誠にめづらしく覺へて只京都に此聲無き事の口おしけれは、予も一つふたつ習ひ歸りて、京都にも傳へんとおもひしかと、誠にむつかしくたやすく習ひ得へくもあらねは殘り多かりしをもだしぬ。此夜の雅興すてかたくて別に琵琶行一篇を作りて日記にしるせり、又彼うたの章をも書寫して歸りぬ。のぼりての世の事に心あらん人は、彼琵琶京都にも傳へよかしと思ふのみ。

しらぬ火

筑紫の海に出るしらぬ火は例年七月晦日の夜おり。むかしより世に名高き事にて、今も九州の地にては諸國より此夜は集り來りて見る事なり。京都の人に見る事のすくおきは盆後のゆへなるへし。京より九州に下る人々も多くは皆商人の類なれは、盆前に京都へ歸るやうにのぼり來り、又下る時も京都にて盆

に前海といへり、東西凡六里、南北凡八里廿四町、
○長崎ハ肥前西彼杵郡の東南よあり
○島原は肥前國南高來郡に屬し、半島の東端にあり、長崎を距る十七里
○天草島は肥後國の西海よあり宇土郡の西南よ位す、上島下島の二島よりなれり、この島の四方に天草洋あり、上島一に瀬戸島といへり、周圍三十七里餘、下島は其西南に位す、周圍七十里餘

をしまひて後下るゆへに八月に入りてやう〳〵九州に下り着く、此ゆへに七月晦日の頃は上方の人の彼地に留り居るもの甚すくなし。予はかゝる奇異の事のみ探ちんためはかりに下れる事なれは、盆後早く長崎を立出て雲仙か嶽にのぼり、それより島原に出て城下より舟にのり、天草に渡り、天草の惣象といへる山の峯にてしらぬ火を見物せり。先島原にてしらぬ火見るは、いつれの地よろしきやと尋とふに、肥後國宇土、八ッ代、松ばせの邊の浦々よし、又誠によく見ゆるは天草の島ありといふにそ、さらは天草に渡るへしと便船尋るに、邊土ゆへに便船もなけれは、ちいさき獵船をかりて渡る。此日天氣殊にのどやかにして、海上風靜なれは四方の詠め殊によし、雲仙か嶽はうしろに成り、むかふはるかに東南に連りて天草の島青み渡りたり、此海は高山の麓ゆへに殊に深くて百五六十尋も立るとそ。のれる船は獵船あれはかゝる事もよくしり居て語り聞す。もつともおもしろかりしは此船頭けふも鉾といふものを以て魚を取れり。其鉾の形鎗のとく柄の長さ三間、先きは鐵にて作りて三ッにわれかへり有りて長さ壹尺程なり、石ッキの所に長き綱を付たり、船頭此鉾をつかふ事妙にして海上に浮める魚は小きものといへとも、これを突事鳥さしの鳥をさすがとし。大なる魚の船に遠きは此鉾を投るに矢を射るよりも惱なり。けふも鉾を持て船はたに立居たりしか、むかふの波間に黑く見ゆる物あるを、やがて件の鉾を投かけたりしに魚高く躍てのかれ行く、船頭したり顔に彼綱をたけ長くゆるしやる、船をもあやとりて其魚に從ひゆき、をばらくして靜に綱を引寄せたるに、其魚彼鉾のカ〜リにとぢられて段々船近く寄り來る。船頭鉾の柄を取上るまゝに船の中にはね上たれは、其たけ八九尺餘の魚の形細くして口吻恐ろしく京都にてさよりといふ魚に似たり、早魚といふものありとそ。口はしの長さ貳尺六七寸も有らん、末鋭く屑鮫のとく只獸の角のとく魚に有へきものとは見へす、かの一角の魚吻なりといふも此魚にて信せり。あまりめつらしけれは船頭に此口はしはかり求て歸れり、肉は油を取るといふ、あまり大魚ゆへに食用には成りかたしといふ。扨はからさる得ものに心なくさみて、數里の海上も程近きように覺へて、はや天草の地方に近付り。天草の砥石山あといふ所を右に見なし、三角といふ所より山の間に船さし入て行く。左右六七町に過じと見へ、水清く山峙て風景又他に異なり。北へくゝけ南へまかりて尋入るに、緑につゞく小松の間に藥屋の軒いと靜あり、何人の住けらしとゆかしくも見

○ふの早魚といふは鹿島地方にて「いらのくり」と呼ぶ魚ならんか

る。右の方は波打際所廣く、砂子の清き事霜を置るがとくあれば、いざや此所にて船去べしといへば、やがて渚に船さし付て錠おろす。船頭いふは此濱邊にはちいさき蛸多し、おり立て取り玉へといふに、潮は淺し砂は清し。皆々おりて蛸は例の鉾打かたげつゝ船さし行しか、程なく二尺に近き鰡壹つ突得て歸れり。取わへず料理て養る、鮮けくして味の美なるとさらにもいはず。やゝ時移りぬれは船さし出していそぐに、暮近きに天草の物象といふ所にいたる。此所は少し民家あり、多くは漁夫なり。此村にわかりてしらぬ火見る所の案内を賴みしに、百姓一人心よううけわひて、いたくけかれぬ莚一枚携へ、先に立てのぼる。東の海の岸にさし出たる山あり、高さ七八丁もや有らん、此あたりにての高山なるか此峯よろしと莚打敷て座す。眞向ふに肥後國有りて唯一望につくす。宇土熊本は少し左に見へたり、右に日奈久、向ふに八代、其間の海上わたり五六里に過きす、南北は入海數十里にして其限り見へず。案内の人指さして右なるは鼠島なり、左は大島なり、それは三つの島、これは幾島と數〳〵おしゆげに海上三里はかりに、いとちいさく島〳〵見ゆ。しらぬ火はいつれに出るやと問ふに、島

○熊本ハ肥後國飽田郡、宇土ハ宇土郡、日奈久ハ葦北郡、八代ハ八代郡ヨリ隔セリ

々見ゆるあたりといふ、初の程は人里も遠くいと物凄き島山なりしか、追々に知らぬ火見物の人々出來りて數十人に及ぶ、皆此近國より二日路三日路をも來りて見物する人々あり。程なく海の面もやゝ夕煙引渡して人顏もさだかならねは、所〳〵松どもあかして酒など取出し、思ひ〳〵に小唄、淨留理、太鼓、三味線或は謠、狂言あゞ各藝を盡して戯れ遊ふ。夜陰の事なれは誰とはしれず、殊に諸方より集りたる事あれは遠慮はなし、彼座に登り、此莚に連り、隔なくむつびかたらふ事有馬但馬あと温泉の場の交のとし。今年は例よりは殘暑も強けれとかゝる海邊の高山に殊に空は心よく晴たり、小夜風おもむろに吹ていと涼しけれは夜の更るもしらす、はや夜半にもなりしかと知らぬ火のさたあし。今年はしめて見る人は今宵はいかなる事そ知らぬ火は出ざるや、但しはそらとなりやなと口〳〵にいふ。予もあやしみ居たりしか八ッ近きころに遙向ふに波を離れて赤き色の火壹見ゆ。暫して其火左右にわかれて三ッになるやうに見へしが、それより追〳〵に出る程に海上竟う四五里はかりか間に百千の數をしらす、明かなるあり、幽かなるあり、滅るあり、燃る有、高き有、低き有、誠に甚見事にして目をおどろかせり。其火の色皆赤くして灯燈の火を遠くのそむかとしたとへは

○薩岡沾涼の諸國里人談卷三に云、寶後國宮古郡甲浦の後の森より挑灯の如き火初更のころより出る、また松山よりひとつの火いて、空中にて行合ひ、戰ふさとくにして少時捨あひて後出たる所の山森に入るなり、四五月八九月にか

ならすあり、されを筑紫のさらぬ火といふなり、そのかみよりありて來歴されす、日本第一の妙火なり、今筑紫のさくら岡となる

○景行天皇紀云、十七年五月壬辰朔從筑紫北發船到火國於是日沒夜冥不知著岸遥見火光天皇詔挾抄者曰直指火處而往之即得泊岸天皇向其火處曰何謂邑也國人對曰是八代縣豊村亦名火村其火猶然而是人之火非人火故名不得火主然知其國曰高田與清の國名考火國をいふ條に云、此國分爲二未知在何世然而神功紀肥後國之名見于欽明紀故取好字作肥者依其火前國名始見于此國也

大坂の天神祭りを夥敷集て見に異ならす。實に諸國より來り見るもいたつらおらす。所の人に問ふに年によりて多きとも少き事も定らずとそ、今年はすぐれて多く出たるも予か幸ひといふへし。廣き海中に出る事なれば天草に限らす、肥後地よりも、何れの浦にても、皆よくみゆるなり。しかれともいかなるわけに、や、高山にのぼる程多く見事に見ゆるとて、此山あとも群集せるなり。此夜は此あたりの者海中に龍神の燈明を出し給ふなりとて、れそれみて渡海の船を禁んす、獵船といへとも此一夜は乘る事おし。遥し年肥後の士ひそかに小舟に乘りて彼火の出る所にいたりみるに、只其火前後に遠くありて我船近くは壹つもみへさりしとそ。予も今宵まのあたり見しかといかなる火といふ事をしるへからす。むかしの人の知らぬ火と名付置しもものとものの事と疑にし。唐土には桃江の神燈あと是に似たる事もありとそ。扨夜明るまてかくのとくにして旭出れは火の光り漸〻に薄く成り行て星とともに消滅す。むかし火の前の國、火の後の國と名付られしもゆへ有るとなり、中古の世、火の字をいみて肥前肥後と改られしとそ。又和歌の言葉なとにも去らぬ火の筑紫なと書り。九州に遊ん人はかならす此折を考て行へきとなり。

○栗田寛氏云、權馬見當らす、吾妻鏡に見はあらさる馬の誤にあらさるか、揭の字權とは形似たるより權馬と心得たるにやあらん、揭馬の字はいまだ見ず、吾妻鏡寛元四年八月十五日の條に云、鶴岡放生會也、鶴岡放生會也、將軍家有御出之儀、云云、十六日の條に同馬場之儀也、流鏑馬十人騎、揭馬乞而射手十人云云、揭馬とあり、文治五年四月三日の條に云、鶴岡祭、二品御參宮、馬長十騎、流鏑馬十騎、競馬三番、競馬とあり、うの馬長の假名にアゲムマとあり、また建久二年三月三日の條に鶴岡宮法會臨時祭馬長十騎、流鏑馬十六騎、

權馬

薩州日州の邊は都遠けれは都て古代の風殘れる事多し。諸所の神社に權馬といふとあり。權馬といふ名目東鑑にも見へたりとそ。其權馬といふ事いかなる事と所の人に問ふに、何にても心願ある人、其思ひ崇ふ所の神社に權馬を奉るといふ。其式小荷駄馬野飼馬を不撰、數十百疋取集め鞍あぶみ皆具して其上に幣を切かけ、口取の者馬一疋に三人程つゝ付て皆白衣に袴かけ、神樂の太鼓を相圖に其馬を一度に追立、鳥井前より拜殿を廻る事三遍、數十百の馬、數百人の口取いやが上に折重り、我先にと一同に押廻る。其間神樂を頻りに奉る、太鼓の響、人馬の聲夥敷して一村に震ふ事あり。此事濟て流鏑馬を始む、いとといさましくて古風ある事あり。其流鏑馬競馬などといふ事も近世上方には稀なる事なるに、此邊には諸神社皆あり。殊更日向の宮崎郡下北方村にある神武天皇の宮に行ふ流鏑馬競馬は最嚴重なり、其地方七八丁計平地にして古松森〻と生ひ茂り、無双の境内あり。宮居は中央に東向に立玉ふ。馬場は宮居の南北に開きて幅十五六間計、長弐百間に餘れり、北より南へ向ひて乘る事なり。例年九月廿七

騎、相撲十六番とあり、その馬長の假名よもアゲムマと訓ませり、馬はアゲムなるべし、アゲムの風のふべしに遺しき心地すと婚しき

○敵防大明神繪詞に云、倩流國住人岐司隱和田繁有社前時流頭役の時鏑馬のあげ馬閑如云々

○神武天皇の宮、今宮崎神社なり

○島津家の式、其臣弓馬師範役川上十郎左衛門の家傳なり、こは其十代の守立久の主島津陸奥の家を傳ふ、これ大道物の家を傳ふ、これ上十郎左衛門義久に傳へり、世々其家に傳へり、○和訓栞に云、弓道はもと東藤に出でたるものなり、東藤弓道は犬追物と見えたり、犬追物、其禮近衛院の御宇より傳へり、古へ半弓なり、其後左右の騎用ふ、射手は小笠原家の式なり、家に儀式あり、放ち行司の家に出でたれて家に貞應元年に命せられ、三郎東藤に命じ、東藤に入道將軍

日當日なり、前の廿三日より足揃をなす、村〻より奉る馬の遲速に從て、番〻を定む、大凡例年馬の百五六十疋斗なり、馬の上中下を分ちて五匹つゝを壹組となす、扨其當日には左右に土俵を築上て、棧敷を搆へ、見物人爰にあり、早朝より始つて暮に及ぶ、各三遍つゝ乘るなり、北の馬の出し口に大綱を引て五疋の馬の足を揃へ、出入無き樣に搆へ、乘人は狩裝束のとくに出立、襷をかけ、誠に勇ましけあり、馬主の寄り人馬壹疋に五六人つゝ口綱を取り、互に片唾を呑て相圖を待つ、馬は一しは人よりも勇んで、はや馳出んゝとはやり出す、行事の人聲をかくるやいなや、綱を切て一同に馳出す、五疋の足音震動し、乘人のかけ聲樹木に響きて夥し、馬はもとより此日のはれの爲に飽に飽て飼立たる事あれは、古に聞へし駿足にもおさゝ劣るまじく見ゆ、乘人も互に勝負を爭ふとなれは、爰をせんとゝ勵む馬の競ひ爭ふとは人にも十倍す、されゞにや出し口にて少しの後れあれは、早とても勝ましきと思ふやいなに十間廿間にて馳止り、打ともあはれとも馳る事なし、或は中途にて馳後れたるは横さまに切れて見物の中に馳入る事有り、是其力の劣れるを恥てなり、又相當の力ある馬の相連て馳行に、縱に後るゝ樣あれは其馬先きの馬に追すかひ、横さまにひたとも

たれて押かゝるにそ、先きの馬强く押されて少し横に寄る所を、つと馳拔るあと、馬にも色〻に智惠ありと見ゆ、扨馬は立替〻乘るに乘人は縱十人斗にて貳百間斗の馬場を三遍つゝ、百五六十疋の馬を朝より暮に及ふまて少しもひるます乘ると、誠に馬上の達者ともいふへし、又薩州には犬追ふ物あといふ馬術射術の式あり、折々其稽古をなす事なり、他國には稀なる事にて弓馬の家に犬追物なとは極秘とする事なり、薩州には其祖先島津三郎兵衛尉忠義鎌倉將軍の時、犬追物の申次を勤し例に寄りて、御當家　大猷院樣御上覽の御時東都に於て島津家より犬追物を勤られしより今に至て傳來して彼家の事とすことなり、又牧の荒駒を捕る事あり、奇代の見物事なり、牧の中に諸士の棧敷を夥敷設け、扨騎馬數十騎歩卒數百人四方を圍て牧の駒をかり立て棧敷の前にかり出し、騎馬の士は志す荒駒を乘り伏る事なり、其樣荒に荒たる牧の駒を追詰て或は脊より脊に乘り移り、くつわをはまするとあり、細引を打掛けて引留るもあり、竹の輪を打かけて差留るもあり、思ひ〻の働誠に目さましき壯觀なり、其隊伍の備へ、歩卒のかけ引、軍陣の修練にしていと正敷事なり、此事奥州相馬にもありて、年々其日限極り居て、他國よりも見物集るとあり、大抵は其趣似

のことを記せるものの林春齋の犬追物の望記あり犬猿院は三代將軍德川家光なり

たる事なり。中土には土地狹く牧といふものもなく野飼の馬も稀にて、かゝる兵馬調練もなし。人皆かしこけれども年々柔弱の風に移るとあるに、邊土は物事おろかなる代りには、又かく古風ある事もありて治世に武を不忘、聖人の教にもかゝべるわさも多かりけり。

○石敢當の墨本は帝國博物館にも藏せられ、墨古十種の中にもみゆ。其文字は「漢故侯相、姓流珠、字林漫、父子、姓流珠、字林漫、曰、五代劉智遠、晉押衙、路王從珂、反、惡帝出奔遇干衢州、智遠遇力士石敢當、智遠戰、帝傷、晉祖與怒、議事、智遠而入、石敢當格鬪而死、智遠殺帝左右、因燒傳國璽、石敢當生平逢凶化吉、禦侮辟邪、能知危、後人故凡橋路防衝要之處、必以石刻其形、書其姓字、以捍民居」、或

石敢當

薩州鹿兒島城下町々の行當り、或は辻街などには、必其高さ三四尺斗なる石碑あり、石敢當といふ。文字を彫付たり。いかなるゆへそと所の人に問ふに、昔より致し來れる事にていかゝるゆへといふ事を知らすといふ。後に輟耕錄を見しに此事出たり、其文曰今人家正門適當巷陌橋道之衝立一小石將軍或植一小石碑鐫其上曰石敢當云云。薩州は日本の極西南に在りて唐土に近く、むかしは船の往來も自由なりしかは、彼地にてかやうの事を見及ひ來りて此地に作り置しにや。又田畠の中に石にて衣冠の像を彫りて居へたり。田夫に問へは田の神ありといふ。是も彼の輟耕錄に見へたる石將軍の類にして、日本の衣冠の像に作りたるものにや、皆他國にては見ざる物なり。伊勢あとには石を將棊の駒の

時以詩曰甲冑當年一武臣、鎖下安衡捍吉衡、道路三叉口、居民、埋汉泥邊百戰身、銅柱承倍間、紫塞守關老、紅塵來往休、英雄來往人間、見盡英雄來往此、此說ニテ明ナリ、又好古小錄等の書にも問々其說みゆ。

○兩好餘話ハ浪華國制官大學士南鮮人奥田元繼述時韓等ニ問答せしこと云、徐氏筆談ニ云、石敢當亭一以爲比傍三石氏而所人姓名貴國亦堅邪、此石碑、仙樓、元繼の說なり、石敢當ニ說古猶未詳邪、無此事、僕何答、皆記室成大中の說なり。

○朝鮮邦ハ此事

形に作りて山神と彫付て村里の出口には必あり。是も他國にはあまり多く見さるものなり。石敢當は京高辻天滿宮の社前に昔はありしといひし人あり、今はなし。

西遊記卷之一 終

標註西遊記卷之壹

西遊記卷之二

冷暖玉

もろこし玄宗皇帝の御時、日本より黒白自然の碁石を献ず。其石冬は暖にして夏はひやゝかなり、故に冷暖玉といふ。日本に手談池といふあり、其池中に集真島あり、其島上に凝霞臺あり、此臺邊皆此冷暖玉なり、帝も希代の珍寶なりとて甚是を愛し給ふと云。此事八宏譯史あゞ其外唐土の書籍に多く見へたり。予かゝ九州に遊ひし時豊後に其所ありと聞て、ずなはち行て見る。佐賀の關より東南の方に入る、木こりの山路いと荒て行先おほつかなきに、藤山吹ちり殘りていと深く霞こめたり。妻木こる山かつに道をたつねて日影もはや午に過る頃、山を皆のぼりつくしてはしめて朗なる所に出たり。遙にむかふの山の麓に藍をとけるかとくいと清らかに青み渡りたるは入海なり。海に添ふて漁村あり、礒あれし小松の間に漁夫の住家軒を並へたり。行かふ人は豆のとく、つなける舟は木葉に似たり。しはらくこれに對すれはげに畫中にある心地して、又人間の世界にあらす。それより山を下れは黒の濱白の濱といふ所あり。山二ッ三ッ隔

○唐の玄宗の時は我奈良朝の初よりあたれり

○八宏譯史は錢塘の陸次雲著す所なり

○佐賀關は豐後國海部郡に屬す、東西拾三町餘、南北六町餘の地なり

○古松軒の西遊雜記に云、佐賀の關は肥前國の地にして九州にては東方の海へ入る、黒ヶ濱といふ、虎ヶ崎の佐田の上六里餘とこれなり

たり、白き雪のとく、黒きは漆のとく、海邊者かくのとくにして色異なるをましへず、海底までもかくのとくにて白の濱は潮までも白きやうに見へ、黒の濱は又黒みわたれり、堀り穿ても沙土なし、其さよらかなる事たとへんものなし。唐土の書籍に手談池といへるは此入海をいふなるにや。凝霞臺は出崎の山の絶頂に肥後侯より異國賊船の遠見に置れたる番所あり、渺漫たる大海に突出て高く聳へたる山のいたゝきに築き立たるは誠に凝霞臺ともいひつへし。やゝ久敗見めくりて黒白の石をひろひつゝふくろに入て携へ帰りしかと、百千里の長途なれは荷重きに僕つかれ、少しつゝすつるに、京に帰り着く頃はやう〳〵に十斗そ殘れり。

國々に皆名高き奇石名玉も多し。紀州那智の濱に數里か間黒白自然の碁石あり。一説には唐帝へ献せしは那智の石なりと云。是亦豊後の産におとらす。備後國には其色雪のとき白砂あり、他國には無き品なり。盆石を好む人は此白砂を珍重す。盆石の砂には備後に限れりといふ。

赤間關の硯石は世の人皆知れる所あり。土佐にも此石に似たるあり、其は青きもの上品なり、赤間よりは細密にして潤澤あり上品とすへし。然れとも密に過

○赤馬關は長門國豐浦郡にあり、海に臨みて港を為す、一に下ノ關と稱す、五港に亞けり、○長門國厚狭郡より産する紫金石、紫線、紫眼石、紫雲石等皆硯材に宜し、○四遊雜記に云、赤間ヶ關と稱せる硯石はこれ〳〵の名産なり、此邊の石は淺村と云ふ所の山より出へし、上品なり、○七八町は濱さいふ所のみ、白き小石の黒みを白き光有り大小至もなき石也、外此黒石更に小石玉なる濱交にて白き光あるにて、黒石の如なるにらすて、理にあらて、於ては小石の黒色々考へ万分の一に敗なる集しろ非さ、其理さらに見て、解せ作なせ造物者の人云ん、と打過ぬ、土人云、閣夜自濱に來て、歩むき時い、足下走より火出て、外より見れは鑿の飛ゆるに見ゆ、交るやうに是は合ふ石なる時石中さのすれ出るなり

稱す、繁華の港にして、○長門國厚狭郡より、○五港に亞けり、○四遊雜記に云、硯材に宜し、硯石、青雲石、紫眼石、紫線、紫雲石等皆

て小硯にはよけれとも大文字なとの書用には、墨おりかたくして又あしきにや。

長崎の山より近き頃蠟石を出す、新渡の唐蠟石よりは潤澤ありて上品あり。しかれとも出る事少くして世間の用には足りかたし。

大隅國の石は密なれとも甚柔なり、彼國石燈籠或は手水鉢、石碑、佛像等皆此石を用ゆ。いかやうの巧ある細工にても施すへし。又よく水氣をふくむゆへに苔むして其うへ數百年の久しきにもたゆへし。彼地にて五百年に近き石塔を見たり。薩摩國、琉球國等皆石碑には此石を用ゆ。予も彼地にて老母の石塔を造らせ、琉球の毛瑞鱗か手跡にて碑面の文字を彫り、船につみて京へのはせたり。三百餘里の海上をへて恙なく京へ着ぬ。老母を葬りし黒谷に建置ぬ。其石やわらかなりといへとも、是をうてば磬の音あり。珍石なり。

攝州のみかげは其石麁ありといへとも、堅き事にいたりては日本第一といふへし。故に長崎或は薩州なとにても石碑に此みかげ石を以て作る人あり。長崎は石麁にして且やわらかなり。薩摩は石密にしてやわらかなり。すへて南國は石皆やわらかにして、いはゆる下品なり、琉球の石あとは殊にやわらかにして用

○黒谷とは洛東金戒光明寺をいふ

○肥後國八代郡水島より產する硯石其名高し

○星石ハ同しく烏水精なり

○肥前大村は東彼杵郡に屬し長崎を距ること九里なり

○天草石なるも○雲根志によれば肥後國勝浦にもあるさゆ、佐用姫の望夫石ハ人の知る所なるが三霞根志によれば三河國赤坂の上宮路の山の望夫石といふものある由いへり

るにたらすといふ。

肥後國八代に白濱といふ所あり。皆大石にして其色雪のとし、海邊皆此石にて遠くより望み見れは布をさらせるがとし。城下の町々にも皆此石あり、甚明徹潤澤にして玉の種類なり、俗に是を肥後瑪瑙といふ。誠に瑪瑙に類して愛すへきものなり。

薩州の島々には水精多し、霧島山の峰にも水精多し。予も是を見る靈山なるゆへに人皆おそれて取らず。同國大口村には黑水精あり、道路に皆これあり。信州和田峠の星石によく似たり。

肥前國大村には青黃赤白黑の五色の海石あり、甚美なり。大村領の寺院又は大家などは、其塀皆此五色の壹尺わたりはかりなるを積まじへ、しつくゐにてつなぎ高く築上てねり塀となす。甚見事なるものにして世間に稀なり。

琉球の屬島より霞のとき細石を出す。うるほひなく只潔白にして奇品なり。備中より出る石是に似たり。其外但馬國に白石あり。肥前の佐夜姫の化石等又世に珍敷ものなり。猶深山僻地には種々の奇石珍玉あらさるもの有へからす。今只其見る所をしるすのみ。

○聖祖康熙元年清と國號を改む

孔明の陣太鼓

唐土當代になりて清朝と國號をあらため、世々賢明の帝王出給ひて年々月々に四海太平の化をたのしめるに付て、これまて埋れ居たりし種々の奇書珍器出る其中に、諸葛孔明南蠻の孟獲を征伐の時かの地にて用ひられし陣太鼓八ツの内なかば既に官府に集りぬ。猶のこれるを天下に詔をくたしあまねくさぐり求め給ひしかと、いつれの所にかくれたるや、去れざりしかは委敷圖寫して日本の地長崎までも尋來りしに、其頃全盛の唐通事職河間氏の家に年頃久しく炭取となし用ひ居たり。かゝる珍器とはしらずして臺所の用につかい居たりしか、此圖を見るに付てつくゝとおもへは我家の炭取こそよく似たりとて、洗ひ清めてくはしく見るに、胴の裏に篆書の銘有り。皮は唐金のとき金を湖く打延して張たり、獸皮は用ひす、是は南蠻温濕の地ゆへに獸皮は用ひかたきゆへにやといふ。其外銅の摸樣一々清朝よりたつね來たりし圖に寸分違はざりけれは大に驚き、はからすも希代の名器を得たりと珍重たゞならす。此事唐人に聞へけれは早速彼方へいひ送り、價は何程にても望み次第に出すへく、

且又朝廷へ申おくりつれはのそみの品は何にてもわきまふべけれは此太皷所望したき由唐人より云きりに乞求めしかども、河間大に秘藏して此太皷我手に有る事天より我にあたへ給ひしあり、むなしく清朝へかへさんは我のみあらす、日本の恥辱ありと千万金をもかへり見す強く申切てさし置ぬ。其後河間氏幾程もなく身上不如意に成りしかは此太皷を質物とおして銀子三拾貫目を借り得、又年久しく過ぬ。其後河間氏もいよ〳〵おとろへて此太皷は久敷長崎の質屋にありしか、先年東より下向し給ひし御人、大金を出して此太皷を質屋よりうけ出し、東都に携へ歸りて今にては御秘藏とおれりと、長崎の人おしみ語れり。誠にめつらしき事なり。河間氏利に迷はさりしによりてかくのとき珍寶も長く日本の物とは成れり。

飯野の風穴

日向國霧島山の西北の方に飯野といふ所あり。こゝに大なる穴有りて時々風を吹出す。昔より其奥を知るものなし。ある年那須大右衛門といふ武士、飼なれし犬を引つれて狩に出しかふと殊にすくれて大なる鹿壹ッを狩り出し、追かけしに其走る事風のとくすみやかにして逸物の獵犬おりしかと追付かねて見へしが、とある山きはにいたり、鹿犬ともに見うしなひ、いかに尋れともさらに見へす、聲のかきり犬を呼しかとつひにかへり來らず、大右衛門大に怪しみ日暮てまて草をわけてたつねさかせしかと、たつね得すしてむなしく家に歸りぬ。年久敷飼置し寵愛の犬おれは、行衛しれすとて扨置へきにもあらす。殊に又大右衛門こそ鹿に犬をとられしと人に指さゝれんと口れしきわさなりとおもひめくらすに、其夜もいね得す、明日をおそしと再ひ飯野にいたりて又たつね求れとも、いつくをそれといふへきたよりもなけれは、唯茫然としてあきれ居たりしか、つく〳〵とおもへは、此見渡し廣き野原にて見うしなふへきやうやあらん、唯いぶかしきは此風穴の中なり、鹿の逃入りしに云たかいて我犬を追ひ入りしならん、さあらはいかなるあやしき事かありて、我犬の害にあひしもはかり難し、いで此穴に入りて實否を見とゝけんものをと思ひ、いそぎ家に歸り、繩よ松明よと云きりに穴に入るべき用意をなす。妻子朋友此体を見て大に驚き、むかしより底の云れさる彼風穴、いかなる變事あらんもはかりかたし、縱に一疋の犬のために此身を輕んする事ひが事なりと口々に諫め、妻子お

○風穴といふもの諸方にあり、諸國里人談に甲斐國身延山、和泉國牛瀧山にある由みゆ、

まゝ伊勢國磯邊のあたりにある由きく

とは泣沈みて留しかと、大右衛門さらに聞入れず、皆〳〵にいとまこひをなして、彼風穴にはもむきぬ。せひなくも皆々從ひ行ぬ。大右衛門は腰に細引の綱を付、覺ある一腰を帶し、左の手に松明をともして、もし穴の底より此綱を引かは急に上に引あゞへしと約束して、づひに穴の中にそ入にける。すゞさまに下る所も有り、又斜に行所も有りて、やゝ深く下る程に地やはらかにて綿のとく平なる所にいたり付ぬ。松明を以てこれを見れは木葉落入りて、年久敷あり、朽たるか積りてかくやはらかなるなりけり。此所より奥は穴少し細く成りて左右にわかれたり。いつれの方にか入るへきと地に耳を付て聞試るに、左の方の穴の底と聞へてかすかに犬の鳴やうに聞ゆ、さらはとて左の穴に入る、其深き事限りなし。漸々に入るにしたがひて犬の聲たしかに聞ゆるにゞ、悦ひいさみていそき下る程に、其犬大右衛門か裾に飛付けり。是我主人の來るを知て力を得て悦へるなり。其所に落付て見るに我犬は恙なし、其地をはらく平にして向ふには大河流れり。怪敷ものかたは出來れと怒りのゝしりしかゞ、答ふるものも無れは久敷居るにもおらすとて、犬を抱やう〳〵に匍ひのぼる。千辛万苦してやう〳〵もとの二道にわかれたる木葉ふりをきし所まて歸り上りぬ。此所よ

りは道急にしてのはりかたければ、下け置し綱に犬をからめ付て其綱を下より引動かせしかは、上には待もうけたる事なれはいそき手ん手に綱をたぐりあげしに、犬はかりを引あげたり、驚きあやしめと此犬かく上り來るからは大右衛門も恙なしとさとりて、又綱を下しやりぬ。今あげたりし犬又しきりに穴に飛入らんとするを、人々綱もてきひしくからめ付て入れず。此犬主人のいまだ上り來らざるを以て氣遣ひて、又穴の内に入らんとせしあり。大右衛門も綱の下り來るを見てみづから腰をからみて引動かせしに、人々悦ひいそぎ引あけて、再ひ死せるものゝよみかへれる心地して恙なかりしを悦あへり。鹿の行末はつねに云れす。うたかふらくは此穴の内住所なれは逃入りしを犬の追ひ入りしにや、大河より奥は犬も翼あけれ〻いたり得すして殘れりと見へたり。犬よくものいはゞ其時のやうすも云るへきにと、人々おしみあへり。すべて薩州領の人はかくのとく死生をかへり見す、勇猛の氣諸國に勝れたり。

康頼夫婦對面

大隅國宮内正八幡は大社にして宮殿いと美々敷靈驗もいちしるしくてたうとき宮なり。社家四氏あり、桑幡留守、宰相司澤といふ。桑畑氏などは今まで七十餘代相續して由緒誠に正敷、むかしは惣頭なりしか今にては留守氏惣頭なり。すへていつれもおみおらぬ家柄なれは、國守よりのもてなしも薄からす、又其家居おともあしからす。いにしへ後寛康頼成經の三人硫黄か島へ配流の頃、折しも此留守氏位階昇進のため京へ登りしに、康頼の室硫黄か島に近き國の人のぼり來りしと傳へ聞て、ひそかにみづから留守氏の旅宿に尋來り、夫康頼はいかゝ〳〵の事なり、大隅の國は硫黄か島に程近しと承る、もし今生のおもひ出に彼島にひそかにたつね渡り、今一度相見るへきたよりも有へきやとれもひ入侍れは、女の身のわきまへなくも尋ね侍るあり、あはれよきはからひも有おらはよきに頼奉ると、誠あまりて去りかたく見ゆれは、留守氏もこれを感し、さあらは我に云たかひて下り玉へ、折よき船にひそかに渡しまいらせんとて、打具して大隅にくたりぬ。其後いかある事か有けん、けふは風のたよりあしく、けふは波あらしおといろ〳〵にいひなして、一とせ近く我家に留置ぬ。いく程なく京にも相國の怒りとけて康頼成經の二人は歸洛といふにそ、既に大隅國加治木までかへり付、やがて宮内の八幡宮に詣られしかは、留主氏も康頼の室隱

○宮内八幡、今鹿兒島神宮といふ。桑原郡宮内村より國分彦火出見尊を祭る。官幣中社なり

○曲亭馬琴の後寛康頼夫婦再會の說を引て云、康頼の妻留守氏に就て大隅へ逃き彼家に留せしに、夫に再會せしは、留守氏の家の口碑なりといふ。說に傳へたるにや、人の心にはさまで厚からぬべきにはあらもあり。しかれども老たる康頼を母にはなれて、栗野にる母を捨てはされば、康頼たれ詠し配所にて薩摩潟の小島にはいかに親しかりしかは、重親の子を思ふこゝろ、なほ且慕ひ姑の後に去て、任にをまかせて、慰むべきなり

の牽は見かへりもせず、はるゝ〳〵さ、鬼界島に赴んとせしろの志眞に似て眞にあらず云〻しるせしは、馬琴の例の餅性のやごさへみへておかし

○硫黄島ハ薩都に屬し、東西一里十三町南北二十六町、硫黄島の東に隣り、硫黄火なりて、火なり

○硫黄島古はまた鬼界島といひて薩摩の南島より琉球稱なり、この島人なふ人なふ三普清行の國珍傳に「所謂琉球國奥人之地四方無風英知所趣」とあり、また今音物語圓珍傳なるせる條よりも、源平盛衰記に鬼界は十二の島なれや五島七島

し置へきにあらされは、康頼を我家に請し入れて夫婦の對面ありけり。それより霧島にもうで夫婦打連て歸浴有けるとあり。其頃より今に代々子孫相續して、殊に今にては留守氏社中の惣頭と成り、繁榮なりげに邊鄙にはかへつて古き家も有けり。

龜龍

薩州硫黄が島の海中に時々龜龍出づ。其形今世に繪にかける龍のとくにて口大なり、長さ一丈二丈のものもあり、甚猛烈なるものにして、人を見ればすなはち食ふ、島にても甚是をおそるといふ。近世阿蘭陀より龜龍の子の長一尺はかりなるを藥水に漬して、四角に大なるふらすこに入れて渡し來る、藥水に漬し置たれは其色合形狀取たる時のまゝありといふ。小なりといへとも其形ゑかける龍のとくにして甚おそろしき姿のものなり。此五六年前に長崎阿蘭陀通事吉雄幸左衛門、阿蘭陀より龜龍の長さ四尺はかりにて活たるを取寄せたり。甚勇猛にして人を見れは食んとするの氣色あり、久敗飼置しかと用心にもてあませし程なり。養ひ行といかさりしにや、つゐには吉雄氏にて死せしとなり。

○名付たり端五島は日本に隣へり、云〻とみゆ

○愛媛面影卷五和氣郡の條に云「鳴穂寺」山越村にあり「十六日櫻」龍穂寺山よりあり、毎年正月十六日花を開く名木なり

○冷泉殿とは冷泉初春の塔村なり、はつ花櫻の歌一に云

初はるのはつ花櫻めづらしや都の梅の花の盛に

予か長崎に遊し頃は龜龍既に死せし跡にて見さりき。本草綱目には、だりやう長一丈に及ふものは、氣を吐く雲を起し雨を致すといへり。さも有ぬへく覺ゆ。

十六日櫻

伊豫國松山の城下の北に山越といふ所あり。此所に十六日櫻とて、毎年正月十六日には此さくら滿開して見事あり。松山より花見とて貴賤群集す。寒氣面をそぎ餘雪梢を封する頃に、此さくらのみ色香めでたく咲出れは、遠近の人とも にもてはやして殊に其名高し。過し年先太守より和歌の御師範、京都の冷泉家へ此花を贈り玉ひし事あり。其時冷泉殿より御返事の御和歌あり。

十六日ざくらといふ花を、頃しも睦月半のたよりに折こせしを、末の四日に都に來りつきて、色もうるはしく馨くはかりの初花櫻の花にあん。

賞翫の辭

きゑのこる　雪かと見れは　年々の　む月半に
さくといふ　初花櫻　はつ春の　柳の木のめ
それもまだ　色別そむる　ころにはや　若葉催し

はこるふを　散さぬ風の　たよりもて　心有人に
見せはやと　折こせはこそ　けふ見そめつれ

反歌

初春の初花櫻めつらしき都の梅のさかりにそ見る

○播國里人談巻四云、伊(上ハ脱)與國和氣山越村工恩寺の櫻の林の中に毎年一木の櫻あり、正月十六日に花咲、よつて此名あり、常寺の住僧、實より此櫻を寵愛せ、我子と云て、老に及ぶまで、此花を見るまゝ病ふす臥すまゝ命をたもつ、水に向ひて餘波なをせ、憎みけれたはその盛なこれ、正月十六日なり、それより此日花咲さなりしてこれ

猶此外に都鄙の詩人歌人、俳人あと見る人とに吟詠して賞翫す。予か彼國に遊ひしは四月の頃ありしかは、花の時におくれて見さりき。殘り多き事あり。彼國の人に此櫻の由來を聞に、むかし山越の里に老人有けるか、年殊に老て其上重き病にふし賴みすくなくなりけるに、只此谷の櫻に先立て花をそ見すして死にあん事のみをあけきて、今一たひ花を見て死しなは浮世に思ひのこす事もあらじあと、せちに聞へけれは、其子かなしみなけきて此櫻の木の本に行て、何とぞ我父の死し給はさる前に、花を咲せ給はれと誠の心をつくして天地にいのり願ひけるに、其孝心鬼神もかんし給ひけん、一夜の間に花咲亂れ、あたかも三月の頃のとくなりけり。此祈りける日正月十六日ありけれは、其後は今の世にいたるまても猶正月十六日に咲けるありとそ、其由來も又正しかりぬ。又伊勢國白子といふに子安の觀音とて名高き寺あり。其寺内に不斷櫻とて常に花

○か勢參宮名所圖會三白子觀音の條に云、不斷櫻境内にあり、年中常に盤の一花を開く、日奇樹なり、歌人文人住作多し、本城の都の時、一鐘皇業庭に召れ一夜に枯

咲る櫻あり。是は都近ければ古今ともに其名高く、歌人俳人もつとも吟詠多し。只三月は誠に花多く、其餘は花すくなし、冬なとは纔に尋求めて見付る程あり。然れとも常に其はなたへせすして咲る事世にたぐひなき名木あり。又薩州には崎島とて冬の内より咲る櫻あり。予か遊ひし年は誠に暖なりしゆへにや寒中に櫻多く咲たれは、珍敷て所の人にたすねけるに、崎島櫻とていつもかくのとしといふ。正月はしめには眞盛なり。彼國は人家に多くうへてめつらしからす、崎島とは琉球の領分にて琉球より南の方二三百里へだたれるよし、誠に南國なれはかくもおるへし。此さくらも都近くへ移しうへは必かく早くは開まじ。薩州は日本の地なれとも極めて南に片寄れは格別暖氣にして草木も大に異なり、梅なとも冬葉落すして花をひらくものあり、梅に葉と花と同時に見る事上方にてはめすらしき事あり。其外聞も地にうへてよく榮へ育つ、蘇鐵は佐田の岬邊には一山のこらす蘇鐵なるあり。又山川といふ所には龍眼肉の樹、又は橄欖樹あと榮へ茂れり。是らは南國暖氣なれは珍らしともいふにたらす、伊豫國伊勢あとの櫻は不思議の事ともあり。

魂祭

○本朝故事因緣集に云、摂州白子海に不斷櫻あり、此所に觀音寺あり、其中に櫻あり、其色々不思議ありと云

○佐田岬は大隅國大隅郡に屬す九州大陸の南極なり

○山川は薩摩國揖宿郡の海邊にあり

○島崎通志卷上ノ下ニ云、右如十一月二日死有家之墓所燈籠十三日夜日ノ火ノ點燈者二ツ三ツ大家當家ニ三百餘ツ五十ツ七百餘ツ十四日十五日夜四天山ノ地獄ノ白雲如十四日夕方日ノ光内男女各逆墓所行日暮ルヲ待燈火點燈ス燈籠ノ酒有持運親類知宅日ノ酒ヲ人々留ル人ノ眼ス前墓ノ知ル墓ヘ相互ノ小兒三日六日ノ花火ヲ挑ケテ黄ニ至ル

七月の玉祭りは何れの地にてもあるか中に、長崎は誠にすぐれて仰山なり。長崎の地の墓所は、皆四方の山の半腹にありて、町よりもよく望み見ゆるに盆中は各灯燈をともす事なり、はか一つにてうちん二つ三つ、富るものは墓とに十二十の灯燈をともせり、元來數千万の墓あるに又數双倍の灯燈あれは幾千万といふ數をしらず、夜に入れは四方の山皆火と成て其見事なる事浪花の天神祭りよりも勝れり。扨十五日十六日家とに墓祭りとて人々あらそひて美々敷酒肴を携へて墓の前にいたり、先祖への馳走なりと稱して、終日終夜酒宴を設魚類はもとより三味線尺八のたぐゐを携へ行て舞ひうたふ。又隣の墓所にも此通りあれは京地あとにて花見などに行しとく、隣家の人と打混してたがひに酒を送り、肴を取かはして大に酒興に入る事あり。他國の魂祭りのとく愁傷の体はさらになし、珍らしといふへし。長崎にては其地に渡り居る唐人折ふしに官府のゆるしを得て五十人六十人打連立、崇福寺福濟寺あとといへる唐寺に詣で、ホサ祭りといふ事をなして佛を祭り、其所にて大に酒宴を催し、終日たのしむ事あり。是等の事にならひてや。

渡り鶴

○屋久島は大隅國誤郡に屬し、種子島の西にあり、其南門倉岬を距ること四十五町、二十六里、東西周回十六里、南北六里餘、文武紀、齊明紀、等よりみえたり

○古史には屋久を按玖又は益救と書けり、古くは推古紀、等よりみえたり

○屋久島の全島皆山にして重嶽さいふ、就中八重嶽は最高く六千宮浦嶽三百四十五尺あり、其他永田嶽栗生嶽これに亞けり、常に雪なり、三峰ア戴き海上數里にして望むべし

琉球近き島に屋久島といふ島、大なる島にて、むかしは日本の外なる一ケ國として、國史あとにも屋久國人來朝するあぞと見へたり。此島に八重嶽とて高さ十三里の高山あり。此山より良材を產じて世に稱ずる薩摩杉などいふ木も此山より出るとぞ。又此島よりよき硯石を出す甚上品あり、余も一面を得て珍藏せり。すへて南國の鶴、春に至り北方に渡らんとする時は、數千里の北海を一飛に越へ行事ゆへに羽つかれて海中に落んとを恐るゝゆへにや、此屋久島の八重嶽を廻りて空高く飛上り、虛空に至りてそれより北に向ひて飛渡るなり。中途にて羽つかれて次第に落るといへとも、高くより飛事ゆへに容易に海面まで落るとあくして朝鮮の地方へ付く事とそ、此八重嶽の絶頂より猶〳〵舞〳〵して虛空に入事なれは人の目も及はさる高くに入りて、はしめて北に向ふなり。鴈あとにても小鳥類にても北地より日本へ渡り來るには、中途にて羽つかれて海中に落んとを慮りて、鳥とに枯木の枝をくはへて來るなり。海中にて羽つかれば枯木の枝を海面に浮めて、其上に下り立て羽をやすめ、又其枝をくはへ飛來る事とそ。それゆへ北海邊にては秋の初め鴈の渡り來りし時は、海濱に枯枝おびたゞしく落あるなり。秋の頃は海濱の人鴈の捨置たる枯木の枝をひ

ろひ集めて、風呂を焚て漁人集り浴するとなり。是を北海邊にては鴈風呂といふ。微少の禽獸といへども相應の智はあるものなり。

獵犬

薩摩は武國にて若き人々山野に出て鳥獸を獵る事、他國よりも多し。すべて山野に獵するには、よき犬を得されは不叶事なり。彼邊の犬常の人家に養ひ飼ものは、長ケ低く上方の犬よりも少し小なり、常に座敷の上に養ふて上方の猫を飼ふかとし。至極行儀よく上方の犬よりは柔和なり、異品といふへし。又獵に用る犬は格別に長ケ高く、猛勢にて座敷に養ふとなく、上方の犬を飼ふ通りなり。猛勢なる事は上方の犬に十倍せり。先年虎の餌の爲に彼國の犬を入れしに、其犬、虎の咽に咬み付て虎を殺せし事、世間の人の物語にあるとくなり。かゝる猛勢なる犬ゆへに常〳〵は二三匹寄り集れは早必咬合て喧しきに、大勢獵に出る時なとは諸方の犬を皆〳〵各繋ぎて牽行事なるに、町を出るまでは側近く寄れゞ必咬合て騷けれ共、既に山に入ると其犬とも常〳〵はいかやうに中惡敷、よく咬合ふ犬にても、甚中よく成りて、綱を解き離して犬の心任せに馳廻らすれとも犬同士咬合ふ事無く、互に助合て山を働くなり。是向ふに猪鹿といふ敵あるゆへに犬とも皆一致の味方に成りて中よき事とそ。是に依ていふに、むかし朝鮮御陣の時、彼地にては日本人いかなる者も皆一致に成りて、相互に助け合ひ至極親しかりしとそ。向ふに異國人の敵あるゆへに日本人同士は格別に親しみ厚く成りける事尤の事なり。一家の中にても親子兄弟夫婦等の中あしく爭ひ怒る事は內證とにて、畢竟は榮耀我儘なとゝもいふへきにや、もし盜賊にても入らはいかなる中惡敷家內にても一致に成りて防ぐへし。此故に詩經にも兄弟かきにせめけとも外には其あなとりをふせくとも見へて、他人の親しきよりは中惡敗骨肉の方厚かるへし。此所を心をひそめて考へ辨へはおのつから友愛弟順の道にも叶ひて、親しきより以て疎に及ふの敎をも知るへし。人畜の別なく同種の親しみ、同根の愛は天地自然の道なり。

西遊記卷之二 終

○大村は肥前國彼杵郡に屬し、大村氏の城市なり

○長江は長與にあらざるか、長與は肥前國彼杵郡に屬し、鯛浦に望む

西遊記卷之三

長江の旅泊

肥前國大村の御城下をかなたこなた見物し終り、それより小船をかり海に浮んで長江といふ所に渡りぬる船の内より、はや夜に入りぬれは、案内も知らぬ旅の空に夜に入りて宿を求んもおはつかなしといへは、船頭のしるべの家有りとて川の岸なる所へ送り入れぬ。いと貧しくいぶせきふせ屋なりしかとも一夜の宿り、あるしの妻心よくもてなすに嬉しくて、手洗ひ足そゝぎおとして打くつろぎ、夕の食なとも取しためて、やすらひたるに其家南おもてにして、しかも大なる川を前に受て、海つらさへ遠く打のそめは風景のおもしろきに、六月二十日頃の月海上にさし出てさゝ波のきら〳〵しきはこがねをちらすかとく、濱風また涼しくて限りなき興に入り居たるに、此家の子の十一二はかりなるが他の家の子に頭打れたりとて、こなたの父親又さきの子の頭を強く打ぬ。さきの父親又怒りてこなたの子をうてば後にはたがひに親と親とのいさかひと成りて打合しに、こなたの親力強くて打勝て歸りぬ。しばらく有りてさ

きの家の近きあたりのおのことも大勢集り來て、打負たる意趣をはらさんと縄にせまき家の庭に込入りぬ。こなたにも又近きあたりより若きもの大勢救ひ來りて、はじめは詞戰に其かまひすしき事いはんかたなし。しばしがほどは田舍人のいさかひ又めずらしと傍に見居たりしか、次第に大勢集り來て縄の家に數十百人こみ入りたれは、予か居たりし所も奪はれて座し居つへくもあらず。兩方たかひに怒りのゝしりて棒庖丁の類を携へ來り、既に打かゝりぬれは、ゆへも無きにそゞ杖に打れ疵付ん事のおそろしくていそぎ走り出たるに、案内は知らず立入るへき所も有らず、喧嘩はます〳〵はけしくすべきやうも無くて、かなたこなた立まひ居たりしに、年老たる者壹人出來て旅の人不慮の事にあひて力なくもおはすらん、むかふに見ゆるは我舟なれば、いそぎ彼舟に乘り玉ひて休足し玉へとねんごろにいひて、多葉粉の火なともてなし呉らるゝに、力を得て乘りうつりたり。獵船と見へていとちいさく宮少しふきかけたり。月はくまなくすみ、小夜風すゞしく吹渡りてさし捨たるたゐなし小舟、引汐にゆらめきて行末もさだめぬに、宿りとめたるはいと心はそけれと又風景のおもしろきに心なくさみて、出るまゝに詩歌數〳〵書付く、陸には猶いさかい

○櫂無し小舟は舟棚なき舟なり

やまで大勢打合ひぬれと、川中にへたゝり居れはあやうくもあらず、されと夢むすぶへくもあらねは、夜もすがら月と喧嘩とをながめ居たるが、明方近き程には露おきそひて風いとひやゝかに、ふすま戀しう思ひしかど、すべきやうもなくて筥引かづきて臥ぬれと目もあはず、とかうする間に夏の夜のみしかき、明やすきならひあれは、山かつら引渡し、鳥の聲花やかなれは、草鞋引むすびて食もせず、舟よりぞ立ぬ。誠に旅路のならひあはれにも又おかしかりき。

山女

日向國飫肥領の山中にて近き年菟道弓にてあやしきものを取たり。總身女の形にして色殊の外に白く黒き髪長くして赤裸なり。人に似て人にあらず、獵人も是を見て大に驚きあやしみ人に尋けるに山の神なりといふにぞ、後のたゝりもおそろしく取すてもせず、其まゝにして捨置ぬ。見る人も無くて腐り果けるか、何のたゝりも無かりしとあり。又人のいひけるは是は山女といふものにて、深山にはまゝ有るものといへり。總て彼邊にては菟道弓といふものを作りて獸を取る事あり。けものゝ通ふ道をゥヂといふ、其道を考へ知りて其所へ弓

○飫肥は那珂郡に屬し伊東氏の藩地なり

○昌東翁の諸國周遊奇談卷三、豐前國中津領の山中に山男、山女は木の樣なる皮にて衣のごとくなる者を割て縫ひ綴り、籠の如く編ひ綴り、身に纏ふ色青白く山男よりは丈も低く痩さらばえたなりなど、見

○花月曲にはいへる謡曲の題目なり。筑紫彦山の麓に住みし七歳花月と云ふ天狗なりしが、ある時、天狗の奪ひ去りし所なりとて、こゝに清水寺を建てゝ、其父知れざりしを尋ねて求めたりとぞ。昔は天狗住むと傳へし山作にこれ再求めたりとぞ。今は天狗住まず、全く州なにひにて汰ぜられしなり。

○球磨川は肥後國球磨郡の一川にして、水源遠く那須、椎葉山、五ヶ村邊より出て四方に流れ、八代郡の西北にて白川と合し、流れを更にして八代に至り、肥後の海に入る。水流二十里、川巾十間餘、長八十二町、下流十五町、二代に入て、二代に下り、二代に上る。

○球磨郡に屬す。

の三急流と稱せり

○渡も球磨郡に屬す

をしかけ置、糸を踏は弓發して貫く機關なり。狼猪なとも皆此弓にて多く取得るとぞ。誠に邊國には種々の怪敗ものも有けり。但し九州には天狗の沙汰甚稀なり、薩州鹿兒島邊にはたへてきかず、四國には天狗多しといふ、伊勢の邊には別而多し、皆高山には是有る樣子なり。かゝるたぐゐも國〻の風土によりて多少あるか。

求麻川

肥後國求麻川は九州第一の急流なり。源遠く那須、椎葉山、五ヶ村邊より出て四十里はかりも流れたり、殊に大河にて求麻郡の眞中をつらぬき、求麻の人吉の城下を過て八代に至り、肥後の海に入る。予か歸路には相良の御舟にて此急流を下りぬ。船はもとより輕し、人も纔に予と僕と貳人に船人三人都合五人乘なれは、一しはに飛かことく八代まて十六里の川を纔二時に下り着たり。其頃は三月のすゑなれは春水殊に多きに、人吉御城下青井の宮の前より船に乘れは送別の人〻おびたゝしく打集り、名殘の恨いふもさらなり、高橋、雨森、右田の三士は猶船に乘り移りて酒肴など携へ纔を解はもとよりの急流、見送りの人々は霞の中に入りて招く扇もはや見うしなひぬ。盃壹ッふたつめぐらす間に渡りと云所まで下りぬ。人々はつきぬ名殘なり、歸りの陸路も遠けれは此所より上り給へとすゝむるに、いつくまてといふ限りもあけれは、人々も撰をうるはして上りぬ。予もしはし船を離れて、又酒壹ッふたつくみて別る。是より下も水逆巻落て殊にすみやかなり。船はいとちいさく細く作りて首尾に梶を付たり。是は眞逆樣に大岩に流れかゝりたる時、あとばかりの梶にては船の廻る事遲きゆへに、先きにも梶を付たるとなり。常に先の梶を第一に動し居て岩角を避思ふ方に船をめぐらす。又中程に楫を持て壹人立り、是は舟を前後左右に動かす爲なり。此三人の船頭しゞらくも油斷せず、舟を操る。浪殊に逆巻所にいたりては、船の兩方に高き板を立つ、是は浪の舟中に入らさるやうとなり。十六里の間に四五ヶ所はいたつて難敵の所ありて、浪の高き事山のとく、怒れる岩角浪の間におひたゝしく峙出つ。かゝる所にては領主なとの通行の時は瀨越しとて、其前後四五町或は八九丁はかりも船を離れて山に登り、此嶮惡の瀨を越し終りて又船に乘り玉ふとなり。予はいと珍らしく覺へぬれは興に乘して其瀨をも船に乘りなから下りぬるか、其目さましき事筆の及ふへきにあらす。渡り

○嘉久藤は日向の諸縣郡にあり

より下つ方は兩山けはしく峙て峯は頭の上に臨み、流れ殊にせまりて、細く怪巖峨々として屏風をたゝめるかとく、壁を付たるかとく、龍の騰るがとく、獅子の踞るかとく、或は雜樹影茂れる中に入るかとすれは松杉森々たる岸に臨む、或は山吹の散かゝりたる、躑躅の咲そろひたる、山櫻の己か梢とあらはれ出たる、千景万色眸をめぐらすにしたがひ、兩山只走るかとくにして、李太白か輕舟既過萬重山と詠せし、かゝる境にもおもひ出らる。彼巫峽の急流は唐土第一にして、舟の下れる事疾鳥迅雲も及ばずといふも、いかで是には過ん。予も興に入りて一絶句を作る(別に記行有り)。程なく八代の井手といふ里に着ぬ。誠に舟中の心よき事、今も忘れかたし。日向より求麻に入りしも、兼て聞つる急流を船して下るへき爲なりけるか、日頃の望たりていと嬉し。求麻の地は極深山の中にて廣大の平地なり、別に一世界のとく仙境ともいふへし。他國に出入る路、日向の嘉久藤口と此求麻川筋と二道のみなり。此川の傍に山路有れとも絶嶮にて殊に細し。されは相良侯にも東都御參勤の時も此川を船にて下らるゝとなり。家中の面々も皆船なり。誠に數百里の海上をへて東武に出る事なれは、家中の人々も其妻子親友なと此川はたに出て見送りの時殊にあはれある事なり。其

○加治木は大隅國姶羅郡に屬し、鹿兒島灣に望めり

○龍門瀧は姶羅郡加治木郷小山田村にあり、源を清澄の山中に發し網

時に船の纜を解やいな陸より船の中の人に水をかくる事あり、船の人々笠をへだてゝ水を防く、此まきれに急流の事なれは數十町下り過て涙をそゝくひまおく、はや見送りの人顔を見うしなふ事なり。予が發足の時も其とくありき。誠につきぬわかれに落くる涙せきかねて、取る手さへはおちかねたるに、水をそゝきて船を飛す、陸地の別れに異にして、物いひかはすひまもなく、速にてよけれと、又更に心はそくあはれあり。

龍門の瀧

瀧は紀州那智山の瀧天下第一、其次に日光山の裏見のたきといふ。那智のたきは日本のみおらす、唐土にても是程の瀧はおきよしあり。其外は中國九州四國の間に少しの瀧はあれとも、大なる瀧はたへてなし。那智日光の二つのたきは予いまた見されは論する事あたはす。只隅州加治木の北に龍門の瀧と名付るあり。昔唐人加治木の湊に入船せし頃、甚此瀧を愛して常〳〵此所に遊ひ、唐土の龍門の瀧を見る心地せりとて、此瀧をも龍門の瀧と名付けるとそ。幅五六間高さ二十間斗とも見へたりしが、其地の人に聞ば高さ五十間に幅十間ありと

掛川となりて海に入る高八丈なり、四尺幅七間夏時は三四條に分れて落つ

○昌東病の情況周勝奇談卷三、豐前中津領の山賊など木を伐りに出すに牛馬通ひがたき所は山男といふもの

ど、是は只仰山にいふなるへし。然れとも誠に見事の瀧にして數丁の外に響き、予か遊しときも甚の八つ過の事なりしか、瀧の中より虹數十條起り、錦を織れるがとく、殊に見事あり。瀧壺尤深し、此中に大なる龜久敷住るよし、甲のわたり四五尺斗あり、此地の人は毎度見る事ありとぞ。予漫遊の間に見たる瀧にては是を第一とす。然れとも格別の邊土なれは其名をたにしる人なし、おしむへし。其後又肥後國求麻の山中にてかゐめの瀧といふを見たり、龍門の瀧よりは小なれとも、又見事の瀧なり、瀧の上より十間餘の材木を流し落すに、瀧壺甚深くして其材木異逆樣に瀧壺に入るに、とゞく瀧壺に沉み入りて、しはらくしてやう〳〵に再び浮上るといふ。されは瀧壺の深さ何十間といふ底をしりかたしとあり。誠にさも有ぬへく見ゆる瀧なりき。

山童

九州極西南の深山に俗に山わろといふものあり。薩州にても聞しに彼國の山の寺といふ所にも山わろ多しとそ、其形大なる猿のとくにして常に人の如く立て歩行く、毛の色甚黑し。此寺あとには毎度來りて食物を盜みくらふ、然れと

も鹽氣有るものを甚嫌へり。杣人など山深く入りて木の大あるを切り出す時に峯を越へ谷をわたらされば出しかたくて、出しあやめる時には、此山わろに握り飯をあたへて頼めば、いかなる大木といへども輕〳〵と引かたげて、よく谷峯をこし杣人のたすけとなる。人と同しく大木を運ふ時に必うしろの方に立て、人より先に立行事を嫌ふ。めしをあたへて是をつかへば日々來り手傳ふ、先使終りて後に飯をあたふ。はじめに少〳〵にても飯をあたふれは、飯を食し終りて逃去る。常には人の害をなす事あし。もし此方より是を打ち或は殺んとおもへは不思議に祟をあし、發狂し、或は大病に染み、或は其家俄に火もへ出あど種々の災害起りて、祈禱醫藥も及事なし。此ゆへに人皆大におそれうやまいて手さす事あし。此もの只九州の邊境にのみ有りて、他國に有ることを聞かす。冬より春多く出るといふ。冬は山にありて山猿といひ、夏は川に住みて川太郎といふと或人の語りき。然れは川太郎と同物にして所により、時によりて名の替れるものか。

玳瑁

玳瑁は南方蠻夷の海中に生して、其甲を阿蘭陀人持渡り、婦人の頭の飾り、櫛かうがいとなして其高直なる事金玉に勝れり。日本にも此玳瑁あり。肥前島原領の海中、其外薩州の南海、大隅國垂水の海中にも是あり。其龜纔に徑り壹尺餘にしてそれより大あるものあし。故に其甲甚薄く櫛に作りかたし、只手箱などの飾りに用ゆ。又珊瑚珠も熊野の海中より出つ、是も甚小にして緒〳〵などの玉には造りがたし。これを以て見れは蠻國より渡り來る珍寶も皆此國をくわしく尋求めなはあらさるものも有へからす。唐紙も近年薩摩にて製す、甚見事にて渡り來るものより遙に勝れり。然れとも價高直にして、賣買には唐土より來るもの勝手ありとて、京地などへはいまたのぼり來らす、孟宗竹の筍を水に漬て腐らしめ造るといふ。其外細工物などに至ては唐物に擬して作るに、彼方の物よりはこなたの物大かたは勝れり。太平久敷して人の工も段々に委敷成れり。

一足鳥

肥後の國八ッ代の求麻川をさかのぼる事八里にして、神の瀬の岩戸といふ所あり。天下の奇所なり。予か此岩戸に遊ふ事其前より聞へたるにや、庄屋大島喜

○我邦に玳瑁の用ひられしはの世の後の人心なり。世代を經て銀の草子の玳瑁の枕はなし。通人の櫛かうがいは是なり。

○武江年表に云、城東へ始て紙屋唐人入て、朝正の儀齊藤門蔵右衛門と稱ふ。中川の樂州和州の產物出しい諸國へ通ふ。年下の頃江戸へ來て住り、白壁町に春官許を文化三寅年得て、深川に寄文政十亥年に廣橋に專ら賣來り、橋本に賣買せし地を製せて世に行ふ。

左衛門出迎へて神の瀨に至る。神の瀨の神主緒方靱負、其子大膳案内して其窟に至る。窟は求麻川の北側にて山に入る事半道はかり、其道いと細く苔の緣りは道を封じ、岩間の清水ひやゝかにして行先き心はそけおり。やゝ谷深く入程にいたく遠からで岩戸の口にいたり付ぬ。打見るより心驚けり。誠にたとへは獅子の口の張りたるとく、南向にて高さ廣さともに十四五間はかりもや有らん、上よりは石鐘乳の甚大にして柱のとく、或は人のとくあるが、つらゝの下りたるやうに、口より奥に至るまて遠間おく下れり。其石鐘乳の間に鳥有りて飛ありく、脊中黑く腹白く、尾みじかく全体燕に似たり。此鳥只一足おり、世界の中に只此岩戸の中はかりに生する鳥なりといふ。奥より口にいたるまて數百羽むらかり飛て程遠くまでも飛下る。されど甚すみやかにしていかなる形とし かと見定めかたし。此岩戸の神のつかはしめおりといひ傳へて、昔かしよりも し此鳥を取る時は、此近村邊〳〵の祟起りて、大風洪水疫癘の類大變きそひ出 て民のおげきいふはかりおし、ゆへに此地の人甚相おそれてつゝしみ敬ふ。誠 に此外に日本國中に一足の鳥ある事をきかず。唐土にても又めづらし。希代の 鳥といふべし。扨此岩戸の中へ入る事弐三十間はかりにて行當れり。此あたり

までは口廣きゆへに明し、此行あたりの所より右へ曲り、口の廣さ三四間はかりの穴あり、此中はくらき事夜のとし。しはらく心をしづめ岩角に取すがりて此中を見るに、向ふへは十間はかりもや有らん、下は其岸より前の方へくり込て切岸よりもおそろし。其深き事はいか程ともしりかたし、上の方もいかはと高きや、うつろにしてしるへからず。猶久敗心をしづめ底の方を見るに、遙の底に鏡のとくきらめくもの有り、是水なり。其深さ凡二三十間も有へきや、目くるめき足ふるひて久敗は見とゞめかたし。こなたへ退て大膳に是を問ふに、此水は靈泉にて時によりて增減有り、水の底は深き事むかしより知る者おし、水までも三十尋の繩を下けて猶とゞきかたしとなり。此岩戸の中明神の御座所おり、誠に奇怪の所、其樣子筆の及ふ所にあらす。予既に數ヶ年の旅に奇境絕跡眼をふれざる事もなけれど、いまだかくのとき奇妙の所を見ず。往來たやすき所にあらは、いと名高くて見ぬ人もあるまじきを、かゝる深山幽僻の地なれは其名さへしる者おし。予別に其記をあらはせしかと、今又こゝにしるすおり。九州に遊ふ人必此所を見るへし。

此一足鳥時節によりては、こと〳〵く蟄伏して一羽も見へさる時ありといふ。

予か遊ひしは三月なりしが、折よくておびたゞしく居たり。又此靈泉も奇妙の水にて、もし是を汲得て飲時は萬病を愈し長生不老なりといふ。さも有ぬへしとそ覺ゆ。

○印度にては、麝香鼠が栓をなしたる酒壺の邊を走過るも既に其臭氣の爲めに内容の酒は穢されたれとも、棄つりとあり。シエルドンはうは預め栓に其臭氣のつきてあるべしといへり。○中山傳信錄卷六に云、蟲有三鼠、蝙蝠、蝎虎、作聲如雀、冬夏皆然、云

麝香鼠

薩州鹿兒島城下に麝香鼠といふものあり。多く水屋のもと、床の下などに住て、其形鼷鼠に似て其糞甚臭く、少しじやかうの匂ひに似たり、故に麝香鼠といふ。食物をむさぼり器をやぶりそこなふ事常の鼠より甚し。膳椀飯ひつなどに此鼠一たひ入る時は其匂ひ留りて幾度洗ひ清むれとも去らず、此鼠又座近く出る時は其にほひ鼻を穿てたへかたき程あり。其鳴聲甚大にして雀の聲に似たり。それゆゑ中山傳信錄には琉球の鼠は雀の聲ありと書置り。此鼠ももとは琉球の船より渡り來り、今にては城下町々家々に甚多き事と成れりといふ。長崎にも唐船より渡り來りて町家にも多くあり、されと薩州程は多からす、其外の國にてはたにて無き鼠なり。一說に阿蘭陀人は此鼠を以て煉り合せじやかうを造る法ありといふ、誠に祕法あらは麝香にもあるへき程の強きにはひある

○東岡舍記に參州村長水泉郡の者、寶飯郡の者、享保年間江戸に來りて、髮を賜ひ、寛政年間江戸に來て、米を賜ひ、また江戸に來て、八十九歳、其時、滿平の孫、百五十三歳、其子、百七十四歳、其孫、百十三歳、亦百五歳、以下百歳に滿さる者猶多し。○河國寶飯郡水泉村に生れて、七十年に滿平なる者、享保年間に、百歳、曾孫、子、孫、百歳に滿さいへり

鼠あり。

壽夭

予諸國をめぐり試るに、山中の人は長命あり、海邊の人は短命なり。京都の人は癰疔のとき腫物類は甚稀なり、長崎には甚多くして京都の三双倍五双倍とも いふへし。其由來を考ふるに食物の事にあり。山中の人は魚肉なけれは常に芋大根の類のみを食す。もし年始節句其外祝ひ日といへとも、富る者も纔に鹽肴乾物には不過、其上に高山深谷に登り下りて耕作に身を勞し、纔に麥飯に饑をしのぐ麁食にして身を働く故に長命にて無病なり。海邊の人は魚肉に飽滿て、飯のかはりにも魚を食し、船の出入有りて諸國の運送よろしければ、飯は米自由なるゆへに貧しき者もつひに麥飯なとは食せず、其上に山阪の働の苦勞は無く、船にて往來やすらかにして魚鹽の利ゆたかなれは、自然と身を安くして美しよくにくらす故、病身にして短命なり。猶又山中は人の往來不自由にして淋敗質朴なれ〻ば賣女遊里も無く、濕毒傳染の憂もあし。海邊は何方にても諸國の通路よけれは、賑に華麗にて遊女あらさる所も無く、人とに濕毒をうつり、且

○温毒は梅毒なり、梅毒は東洋にもなかりしに、歐洲にも紀元一千四百

九十三年コロムブス始めて亞米利加に見えしより、隨從なる者の病を感ずるに、時疫の流行せしのみにて、全く來りて、西洋船の支那に來りしより、東支那に傳はれり。長崎人に傳はれり。長崎人に傳はれり。延宝年間に至るまで、邦内に蔓延せしことなし。近年に至りては、梅毒の傳染せしことなし。幽なる所少からず。

○續俳諧家奇人談卷上に云、塘雨は京都の人、競を五井其諧は其さいふ、

又鹽風に濕氣を受て内外より病を作り養ひ、心氣を勞し、腎をつからし、いかなる壯實の生れ付といへども、短命病身あらざる事あたはず。是山中と海邊の壽天の違ひの根本なり。長崎は天下第一に魚肉たくさんにて、野菜の類よりも下直なる程なれは人皆日々魚肉に逢ひて飽滿、且又唐人のいんしよくを見習ひ、何のにくにても油あげにあし、厚味にして食す、其上金銀の通利格別に宜敷、人皆歡樂にして世を渡る。其故に日夜只飲食のみを樂として身を働き氣血をめぐらす事なし、是皆腥物の類の多き根本なり。京都は人皆家業を專一につとめ、身を働き、海無き國なれは魚肉格別高料にして、卑賤の者は求めかたし。故に他國に違ひ常に麁食なり。癰疔の類すくなきゆゑんなり。然れとも繁花の地ゆへ濕毒の憂は日々に多く、貴賤おしなへて病さる者無きに似たり。もし保養をよくせば京の地も長壽を得へき所あり。

神樂

余か友人塘雨、余に少し先達て日向國宮崎郡中村に遊ひしに、其地に增右衛門とて齡既に百歳に及ひ、性質律義にて物に怒らす、柔和にして人に愛せらるゝ

この俠とこころを知る、性強く、好むの癖あり、常に門戸を鎖して、遂に諸國行脚の記を著して笈埃囊に入れ、俳客の日記つくこの書より大なるはなく、才學また宏識なし。

○赤江川　一名大淀川といふ。一源あり、二源あり、一は肥後の球磨郡より越谷に發せし、諸縣郡石原山に發せし、一は諸縣郡珂郡下別府村福島村の間に流れて、長凡入拾五里、淵三町、武拾間

○土佐國清水港は多郡清水浦に屬す。

○蹉跎岬は土佐國の西南端にあり、多郡伊佐浦より幡南方に突出す、海最も危險にして舟船屢沒す。

老人あり。或時塘雨か旅宿に來り物語りしけるは、某近年の事は反而忘れかちなるか、前年の時の事はよく覺えたり。今より四五十年前までは此宮崎郡一圓に公領にてありしかは、年々に年貢の米を此地より直に江戸に積事ありしに、我も度々其船に乘りて渡海せり。此所の赤江川の湊口より舟を出し、寅卯の方に向ひ針を立て走るに、土佐、阿波、紀伊、伊勢の方を左に見なして沖遠く乘るに遠洲灘も只一乘りに打過て大阪へ到る日數にては、心安く江戸に入る事なり。勿論右の方は國あるへしとも思はれす、只針先を大事と乘る事。然るに或年いつものとく湊を出して馳し所に、土佐國清水か又は蹉跎の岬かとも思ふあたりに小島を見付て是非なく船をかけたりしか、數日風も直らず、彼島に掛り居たりしかば、水やある用意すべしと人々船より島に上り尋廻りけるに、此島人住よしもなく見へて只草木茫々たり。其中に小き社壹つあり。近き日に祭りにてもや有けん、拜殿に太皷弐つ殘れり。人々煙草のみて拜殿に休み居けるか、此太皷を見て壹人の云やう、此頃數日の舟懸りにいと退屈せり、此所に幸の太皷あり、いさや神樂舞して遊んには神も見ゆるし給ひてんとて、手ん手に竹を切て笛とし、藥鑵の蓋を以て銅拍子とし、紙をぬりて烏帽子とし、浴衣手拭それそ

れに狩衣ゆふだすきの學びをなし、彼太皷を打立て、おまりたる田舍聲を一調子はり上て大勢一同にうたひはやし、誰見るへき所ならねは恥憚る事なく、心一はいのたのしみをおして、前後をも忘れ、次第に高聲に成りけるに、其音陸地までも聞へやしけん、所の庄やなとおぼしき者とも、小舟に棹さし來りて大に怒り云やふ、汝等は知らずや、此島には昔より荒き神のまし〳〵て常には漁人の舟さへも寄せず、まして一草一木にてもかすめ取れは、大に祟り有りて近在近郷までの大難儀に及ぶ事あり、それゆへに所の人といへども、月次の祭りの外には、此島に渡る事なし、汝等は何國の者共あるやかゝる無禮を仕出して神前をけがし神威を輕しめ奉るにやと怒り罵りければ、皆〳〵肝をつぶし、左樣の事とは存せず、船がゝりの退屈のあまり太皷を見付しより、ふと興に乘せしの事あり、幾重にもゆるさせ給へとて、初のたのしみを引替て、皆〳〵頭をかゝへ我先にと船をさして逃入り、猶其島を遠く離れて沖かゝりし居けり。さるにてもいまた風も直らねバ其夜も其所に懸り居けるが、翌朝早朝にきのふ來りし船と見へて、猶其外にも數艘漕連れ出來る。こは又いかなる事をか云ひ出して咎めに來りけるやらんと、皆〳〵恐れこゝをも立てず、船底にすくみ居けるが、

彼船よりよや〳〵と呼起せば、こわ〴〵答へて一人出迎へたるに、先きの役人ともおぼしき者、其所の者共を大勢引連來りて船をつなき寄せ、きのふの荒々敷けしきには似もやらず、いんぎんに會釋し、扨々きのふは卒爾なる事申て各〳〵を驚し參らせしなり、近頃御わびを申事よ、猶それに付て此上御苦勞を賴申度事こそあれ、其子細は昨夜所の者共一同に夢中に此神の示現を蒙り奉りしあり、けふは思ひもよらず珍らしき神樂舞を見物して、面白く慰みけるを、汝等來り妨げて興をさまし、猶彼等をも叱り驚かしける奇怪さよ、早く彼船に行て彼等に安心あさしめよとの御告ありしなり、左あれば此後猶神の御咎めも斗りかたし、何とぞ各きのふの失禮はおゆるし有りて、猶神慮をもなくさめ奉らん爲に今一度まげて神樂して給はるへしと、ひたすらに賴むにぞ、船の者共も今更空恥かしく段々辭退すれとも聞入れねは、せひなく又々いざあはれつゝ彼島に上りて眞顏に成りて神樂舞をはしめけれバ、所の者共大に悅ひ老若男女つどひ來り謹で見物し、事終りけれは酒肴など設けて丁寧にもてなされ、猶其上に味噌鹽水薪などをも運ひ送れり。其翌日は風も直りけれは帆を卷て馳たりしに、紀の路の海も、遠州灘も一瞬の間に無難に江戸に着たり。老人數度の回

船にかゝる神感のいちしるしく、又おかしき事はあらさりしと始終りくはしく語れり。

いろは

我友塘雨、日向の國の片田舎に宿りし夜、ともし火の下によりつゝ手帳取出し、ひるの事とも書しるし、詠し出せし發句など獨りこちてありしかは、其家のあるしそば近く居寄りて、御客人に賴申度事こそ候へ、今見受候へは物よく書給へるにこそ、悴ともの今は十二三歳にも及び候ひぬれど、家貧しく朝あ夕なの煙立へきいとあみに、我身のいとまさへなければ、物教へき手たてもあく、殊更近きあたりに手よくかく人稀なれは、けふよあすよと此年月いたつらにこそ打過候へ、かくて有へき事にもあらず覺へ候へは、御客人の物よく書給ふこそいとゆかしけれ、何とぞ悴ともに手本書て得させ給へといとわりあく云にぞ、殊勝の志ある人かな、それがしも手よく書といふにもあらず候へど子供衆の手習ふはしめ程の事は書ても參らすべしといひて、いろは四十八字を筆ゆるやかに書とゝのへて出しければ、ある人見て是はむつかしの事を書給ふものかな、恥かしき事なから悴共はいまだ筆取そめし事も候はねば、けふぞ手習ふはしめに候へは、先ッ難波津淺香山こそ書て得させ給へかし、其後にぞいろはといふものをも手習ひ得へき事も候べしといふにぞ、塘雨驚き、今にては天下皆小兒の手習ふはしめにいろはとこそ覺へつれ、此あたりにはいまだいろはといふものを知り給はすや、誠に源氏物語あどにこそ難波津淺香山を手習ふ初とせる事見へしかど、今にてはいとむつかしく覺ゆるを、扨も昔めきたる事を望み給ふ人かあとて、則二首の歌を書てあたへつれは、これそ悴ともの手に叶ひぬへけれとて一しほに悅びける。塘雨京に歸りての後此事を余にも語りて邊土田舎にてそかゝるふるめかしく昔覺へしことも有つれ、いろは書出してそゝろに心恥かしく覺へしと、毎度いひて興しぬ。誠にかゝる所こそ、延喜天曆の遺民ともいふへく、澆季輕薄姦佞の風を露しらさるは、玉洞丹丘も外にてはあらすと知られぬ。いと風流にも、また淳朴にもありし事なり。

○古今集の序に云、難波津の歌は帝の御始なり、淺香山の言の葉は采女の戯なり、この歌のよみてふやうは、父母の手習ふ人の始にぞ、なんだにはかんくつにけらさなれば、まだなにはしづくにかひなくなれば、

○陸可彦の有古今集の序に云、にはかに御卷に云、なにはづあさかやまのうまのいとをめさしてあいなくらうあはれ、合肥安久四年正月の條字治殿（左大臣頼長公）御息女廣君勅定にて、元年四月の條元慶元年に、又東鑑元仁元年四月の條に、頼經の君の手習始に長生殿の詩をひたまひし事見えたり、しかれは、何よりさきに見ゆる事はなし、今ひたすらしむいろはよりうたりよりなり、云々

○源氏物語若紫の巻に云、ゆくてのみ思ひ給へしなれにしも給へるかなしさ聞へさせんかたなく

西遊記卷之三 終

西遊記卷之四

篤實

備後國を通し時、百姓とみへし年老し男二人ふと道連に成り、山の名、里の風俗おと尋問ひて行たりしに、我野服を着し方頂巾を戴だいきしを怪しみて、いかなる人にていつくよりいつくへ行給ふにやと問ふに、都方の醫者なるが醫術修行の爲に諸國に遊歷するなりと答へしかバ、扨も頼もしき御人や、我等が住里は向ふの山の奥なるか、親しき家の女房に奇妙の難病ありて、早二た年に成り、近きあたりに住候へは聞もいぶせく、其家にもいろ〳〵と醫療盡さゞるともなけれと、露はかりのしるしもおく、今は早命だにあやうく見へ候ひぬ、かく山深き片田舍にて名高き醫師も、候はず、あはれ都近くも有ならばなを親類の者は歎き居候ひぬ、けふはからすも京都の御醫と承候へは、親類共が常〳〵詞も思ひ出し候ひて、あはれにも候へは、何とぞ脉ばかりにても取らせ給ひて、彼等か心をもなぐさめたまはらばやと、誠の心言葉に出て、又餘義もなく見へたりしかば、余も此道修行の事なればいとやすき事ありとうけがひて、彼者共

のしりへに從て、尾の道の二三里斗こなたより右の方に分入る。鹿狼の通ふとき細道を谷に下り峯にのぼりてゆけどもゆけども程遠きに、日蔭もやゝ傾き、腹饑、足つかるれは、僕腹立て程もしれぬいたつら事とつぶやく、とかふなだめて行はゞにやう〳〵に至り着ぬ。とある山あいのいと淋しき人里あり、本郷といふ所なりと。其家に入れば病者は五十斗なる女にて其夫を六兵衛と云。案内のものしか〳〵の由をいへは家内皆驚き悅ひ、去年の冬より淋病の心地なりしが次第に強く露はかり落る便事に、其痛忍びかたく、内よりは頻に通じの心きざして腹裂る心地して、其くるしみたとへんかた無し、日〻月〻に病ひつのり、春の頃よりは一しほにて横に臥ば下ばらひとしほさくるがとく、立ばくるしく、座すれば堪がたし、それゆへ晝夜只火燵のやぐらに兩手をつかへ、立あがらうつむきて居る事のみ少し心やすらかなるやうあれは、春以來は片時も座せず、臥さず、只晝夜食事にも眠るにも此通りなり、其くるしみ中〳〵いふもおろかなり、近き頃は殊にわしけれは命の限りも遠からじと一日も早く臨終をのみ待侍るあり、命の事はたすかるべくも思ひ侍らねと、都の人と承れはゆかしくこそ候へ、何とそ一日なりとも此くるしみをたすけ給はりて、横にふして

やすらかに臨終を得さしめ給はゝ、上も無き御惠と涙を流せるさま、げに見るさへあはれなり。晝夜立てうつぶしは、れ額も浮きて活たる人のとくにもあらず、肛門は牡丹花のとく長さ五六寸もぬけたり。一しきり〳〵腹はり來る時のくるしみの聲隣を動し、聞者すら堪かねたり。病体は誠にかくのとく危く甚しけれど、其脉に見所有ければいそぎ藥を與へ、猶且藥湯を以て腰より潰し、種々の療術を用ひしかば大小用の通利出來て、初て横さまに臥とを得たり。猶品〳〵の療治をくはへ、此以後に用る藥方を委敷書しるし、猶用ひかた抔もくはしく傳へ置て、其家を辭して數里の深山をわけ出て、三原の城下へ着ぬ。三原にて此物語をせしに扨もあやうき事なりき、御心に誠有ぬればこそ佛神の助けも有りて、まとの事に逢ひ給ふあらめ、多くはかくのとき事は盜賊のいつわる事にて、旅する人を人おき深山に連行、さし殺して金銀衣類を奪ふ事珍らしからす、此後はかならず楚忽のふるまいし給ふべからずといひけるにぞ、初て心付て恙おかりし事の嬉しかりき。それより諸國をめぐり、二とせをへて京へ歸り居たりしに、或日六條の旅宿のあるしたずね來り、一兩年以前九州へおもむき給ひし御醫者はこなたなり

○尾道も三原も共に備後國御調郡に屬す

○下ノ市の字つけよる御醫師といふこと未だ思ひ得ず

やと問ふ、いかなる用そと聞けは、備後國より六兵衛といふ百姓一人のぼり來り、下に市の字の付たる御醫師を聞及ばずや、何とぞ尋くれよ、去々年ゑか〳〵の事にて高恩にあひぬれバ御禮のために來りたり、其御名は聞ざりしかとも、荷物の下げ札に市の字を見及びたりといふ、手がゝりも無き尋よふかなと存候へとも、其志の殊勝にも候へは、先試に標札をみめぐりて市の字を見當候へバ御尋申ありといふにぞ、其事ありといへは則歸りて其次の日彼六兵衛同道して來りつゝ、備後壓をみつから持て禮物とし、扨も過し年は不思議の御緣にて妻なる者御療治に逢ひ、命は無きものと覺悟致し居候ひしを、其日よりしるしを得、仰置れし日限のとくに、かゝる難病平癒して再ひ常体の人とあれる事、殊に近所の者の行逢ひより始りて御名さへ承らす候へバ、弘法大師の來らせ玉ふなりとのみ、一村の評判にてそ致し候へ、京を尋たりとて逢奉るへしといはからず候へとも、命たすかりし御高恩、一言の御禮を申さゞる心の中も安からず、もし逢奉る事なくば、東寺にても參り候て、弘法大師樣え御禮申かへるへしと存し極めて參り候ひしなり、先は尋當りて日頃の本望に叶ひ候ありとて、信實顏色にあらはれたり。予も嬉しくて、しばしもてあしなぐさめて歸しやり

ぬ、都近くの者ならましかば百里に餘れる海山をいかではる〳〵尋來るべき、邊土の民の篤實なる事感するにも猶あまりあり。

仙人

おはよその人皆才德の事に限らす、もし長生を得んと欲せバ深山に入り、飲食を斷ち、思慮をやめ、淫事を斷し、衣服を除きて性命を養ふ時は、下凡の人といへとも二三百歳の壽は保つへし。當時霧嶋山に獨りの仙人有り、其名を雲居官藏といふ。もとは武士にて平瀨甚兵衛といひしか、聊不平の事ありて官錄を捨て世をのがれ、此山奥に隱れて人にまみへず、其後數十年へて霧嶋山に住りといふを親屬の方へも聞へ、甥の得能武左衛門といふ人、はる〳〵と霧島山に尋入り、數日尋もとめて、やう〳〵にめぐり逢たり、其形木の葉の衣に髮髯おのづからに生ひ茂り、人のとくには見へす、されど武左衛門も厚く心にかけて尋入りたる事なれば、言葉をかけて近付寄り、今一たび世に歸り人の交りもあれがしと理をせめていひしかと、さらにうけがう色なく、はや世を逃れて幾年かへぬ、近き頃は仙術もやゝ成就して姓名も雲居官藏と改めたり、よそなからにも世

の人に相見る事我道の妨けおり、まして再ひ世に出ん事思ひも寄らず、此後はいかなる事ありとも尋來る事おかれとて走り去り、武左衛門も是非おく別れ歸りぬ。其後は山深く住居てはのかにも人にまみゆる事を嫌へり、まして言葉をかはす事なぞはさらに無し。山に入りて後も今まで既に百何十年といふ上に成れり、されど行歩健にて老たるとも若きとも知らず、彼邊にては人皆仙人なりと敬ひ、飛行自在其外種々の奇妙多しといへとも其事は知らず。誠にきりしま山は天下の名山にして高き事雲に聳へ、麓のめぐり三拾六里、中に薬艸奇玉多く、大なる池數十、又火燃る谷有り、仙術修練の地是に過たる所有へからず。予も此山中に三日在りしが百分が一も見つくさず、一月はかりも籠りて見めぐらゞ猶奇所を尋得へく、殘り多かりしかと、いまた仙骨を得ず、むなしく歸りぬ。又肥後國球磨郡の人吉の城下より十里ばかり奥に、たら木といふ所あり。此所に吉村専兵衛といふ百姓あり。年六十斗の時家業不如意にて世の中うとましく、ふと仙術に志して此たら木の山奥に入れり、城下だに深山のおくにて他所より見れは仙境のとき地なるに、又それより十里もおく、誠に人倫も稀なる地なるを猶避逃れて深山に入れり。飲食は木の實などを食せし、只寒氣には堪

○霧島山は日向國諸縣郡の南部にあり大隅國囎唹郡に跨る、東嶽西嶽の二峯に分れて高くして直立四百八十一丈六尺あり、山中に池多く四十八箇あり

○人吉は熊本を距る二十七里にして相良侯の城地なり

○近世畸人傳卷五に云、或人いふく、洛東白川の山中に巖居せる人あり、

かたかりしにや、冬に至れば里に出て綿入を一ッつゝもらへり、春に成り暖氣を得れは脱捨て裸体に成り、一年に一度つゝ衣類の爲に里に出しか、近き頃に至りては仙術も追々に成就せしにや、衣類も無くて住けり。山に入りて後予か球磨に遊びし年まで凡四十年餘といへり。是も近來は不思議の仙術多く、殊に百歳に餘れる行歩健にて飛が如し。九州に此二仙人有り。中國邊にてはたへて無き事あり、京都白川の山中には白幽先生ありしか今は若州の山中に移れりといふ。仙術の事もろこしのみに限らす、廣き天下には種々の異人も多かりき。

白幽子と名づく春は二百歳にも過たりやらん知らず、是ぞ知のなかむ、山に深く住るみて人に見ゆるを好まず、時はさを走り、必ず遠行く、仙人尋ねて稀にもあり、石川丈山の師にして、精深く天文に通じ、道を亞ぐ者なし、若し疑ふ者あれば希れに出して示す所あり云々、

○去る酉とは安永六年なるべし

孝行

孝子太郎八並妹万龜は薩摩國鹿兒島郡小山田村といふ所の百姓治右衛門かこにして生れ付柔和に、兩親の事かりそめにもわするゝ事おかりし。去ル酉の九月、兄太郎八は九歳、妹万龜は七ッのとき、其母産後いまだ日數たゝざりしに、時節の事なれば稲取入のため、田へ出て働しに血の道の病ひさしれこり、それよりいろ〳〵養生せしかぞもさらに心よからす、今年まで六ケ年か間、床に付、せ

ん〳〵に病ひにつかれ、起臥さへ自身にはならさるに、ふたりの子ども幼少なから常に母の側に付きそひ、おきふしの手つたひより食物の事にいたるまて、こまやかに氣をつけ、母の不自由になきやうにこしらへ、病中の事なれば母に心をつかはせ、又は腹立せてはあしかるへしとて、たとへいかやうの無理ある事有りても、あい〳〵とのみ、きげんよく返事して、すこしも母の氣にさかはぬやうにせり。元來小百姓の事あれば、少しはかりの田畠なるか、太郎八幼少ながら耕作の事をもつとめける。留主のとは妹にいひふくめて氣を付けさせける。妹もまたかい〳〵敷、心をつくし、其孝養兄にたとらず、太郎八も夕方早く歸り、先つ其まゝにて母のそばへ寄りそひ、手を握り顏をなで、其日の母の氣色くはしく尋ね、又我田地のやうす、其日にありし事どもかたり聞せ、粟の穗又はから芋などを出して母に見せ、とかくして暇にず時を移し、つひに夕飯をもわすれし事多かりしとあり。夏の夜あと百姓のわら屋殊に蚊屋の中一しはあつければ、母も不便にれもひ、再三太郎八に蚊屋の外へ出て夕飯たべよといへど、嘶しすまざる間は飯もくはず、はあ〳〵しまいて夕飯をくひ、又蚊屋の中へ入りて、そばに付そひ、しづかに母を扇ぎ、心よくせけんはなしなどして、其身も打くつろ

○今年の五月とは天明二年ふり

ぎたるようすを見すれば、母も太郎八とはおしするにて病ひの苦をわすれしとぞ。扨眠る前には兄弟の子共我耳を母の顔へよせて右と左にそひふし、万一、夜中寐入たる間に母の氣分にてもあしく、よび起す時は、はやく目のさむるやうに心得してぞふしける。又冬なと寒き夜は、みづから帶をとき、母の足をふところに入れ抱きてあたゝめもし。又母氣分あしくいたみなとさし起りくるしむ時には、兄弟打より、背中をさすり、手に取付、みづから藥を口にふくみ母に飲せ、泣かなしみ、れさな心の氣遣ふ樣子、かたはらより見るには、其病人よりもかへつて兄弟の子共の方あはれにて、あたりの者共もちからをそへて介抱してそ遣しける。母のかくのとく子共のかいはうにて貧しき中にもつゐに不如意の事を憂にす、病中に六ケ年の月日を送りしに其病日々に重りて、今年の五月むなしく成りぬ。兄弟の子共の歎き中〳〵いはんかたなし。さてあるへきにあらねは、親類打より葬送の事をいとなみしに、ふたりの子供かなしみなげきて、今生にての母の顔をみる事、是までなれ〻葬送の期を一日なりともべたしとて、昼夜母の尸の側をはなれず、泣沈しかば此体を見聞人々涙を流さゝるはなし。去年八月十八日、郡奉行得能左平次とかや、勘農の爲に村方巡行の時、小山

田村の道のかたはらに十二三才の小兒草を刈て居たるを見て、ねんころにいひなぐさめて通られけれは、跡に從ひし庄屋三島喜左衛門、此小兒は當村の太郎八と申ものにて去か〳〵の孝子ありとつぶさに語りけれは、得能氏感心有りて、其夜の旅宿にて又此事を尋られけるに、宿の女房よく知り居てくはしく物語りしける。其次第庄屋の申所に、すてしも相違なければ、其夜近邊の百姓を召集めて此事を聞糺されしに孝行いよ〳〵相違なかりしかは、翌日得能氏自身太郎八か家にいたり、其やうすを見分し、又其父母に尋ねとふに露たがはさりければ、早速こまやかに書付て大守へ言上ありしに、大守も奇特におぼしめし、御はうひとして兄太郎八に米二十五俵、いもと万龜にせに五貫文をぞたまひける。ばゝもそのころやまひ、やゝおもり居けれともあまりありかたさに人々にたすけられて、おきあがり、たまものをいたゞきしとそ。右御はうびたまひけるとき近むらの百姓馬數十疋におわせ、太郎八かいへにはこびきたりしかば、これが孝子への御はうびありと遠近の人〳〵たちつどひ、ほめうら山ざるはなし。得のう氏よりも錢壹貫文をあたへられしかば、庄屋むらやく人、其ほかに近かきあたりのてら〳〵まで、おもひ〳〵にそれ〳〵のものをあたへおくり

ぬ、とくのう氏くわんせんのためにとて、そのほとりの男女にめいじて太郎八がいへにゆきてよろこびをいわしめ、また上よりのたまものをはいけんせしめらる。このことついに國中にかくれなく、人みな兄弟の子とも孝行をしやうびし、兄を孝太郎とよび、いもとをれ孝と名付ける。われきんねん醫じゆつしゆぎやうのため諸國にあそび、薩摩の國にしばし逗りうの折ふし、増田熊すけなる人、此のことを稱歎せらるゝを聞はべれば、人の子の手本ともなれかし、かつは國守の御仁せいのあまねきをあはぎたてまつり、また得能氏仁慈のこゝろふかきをかんじ、その言上書のうつしをこひもとめて、ありしまゝをかきしるしあづさにちりはめぬ。嗚呼わかはゝにも去年おくれぬ。世上の人々父母そんじやうの内、孝しんおこたりたまふべからす。

流人

つかさ位高きも其程〳〵に付て、國の政、家の政に寢食のいとまおく、又は世のそしり人のねたみを受る事もすくなからず、家富るものは其寶うしなはしと彼を恐れ是をあやぶみ、又出入る人の求に應しかねて、はては人の恨み身一つ

にあつまる事多かる。富貴は皆人のほつする所にて、予も是をにくめるにはあらねど、もし唯世の中のたのしみを論せば、身のよせも重からで寶もたず、衣食の事はいつれの境に居れるにも人の恵むはかりのさへありて、皆人のきそひあらそふ富貴のみちは、少しそむけつゝ須摩の秋吉野の春、只心にまかせて時におくれず、又思ふ人あれは千里の遠きをも必尋ね訪ん事こそいと興深からんとは我のみ思ふかもしらず。されど又同し事いひし人おきにもあらず。薩州にて親しく交りし友人、長谷川藤兵衛といふ人は、文雅の人なるが、近きころ小琉球の奉行にて彼地に三とせまて住ぬれは、めつらしきことも多かるへしと尋しに、海山の氣色のことやうなるは、いふもさらなるか、又殊にわわれなりし事のありしとて語られしは、彼島に何某とて流人あり。もとは京都の大寺の院家なりしか、おはやけの罪を犯せる事のありしにや、三十年はかり前つかた國の守へおはやけの命下りて此島へ送り來りしなり、此人ふみの道に廣く詩作り歌よみ、其外糸竹の遊ひ、茶道のわざまでかしこきに、此島に來りてのちは漁夫樵者の外は誰かたらふ者もなく、夜ごとの月のいろにのみ都の空を思ひ出て、かはかぬ袖に明しくらすにそ、薩摩より此島に在番のため五人づゝの武

士交代して渡れるを、人らしとて待かねて語れるのみあり。廣き島に言葉のかよふ程あるは、わづか五人の薩摩おのこ、其淋しさ思ひやりぬべし。それゆへ長谷川氏の在番の時は親にもわへる氣しきして殊に悅ひ睦び、夜る晝る行かい。別れの時なとは中〳〵にいわんかたなくあはれなりしとぞ。此長谷川といふ人、もと薩摩侯の伏見の館の下役人たりしが、文學のきこへありとて召寄られし人なり。都近くのゆかりの人にて殊に文雅の事このめれは、彼人のよろこひさもあるべし。彼人等の上手にて、月花の折々には誰聞事もあらざるに、獨りしらべて興をやり、又常には庭に築山をつくり、みづから木を刻みて堂塔の形をうつし、是は都東山なり、こなたなるは北山なり、比叡なり、愛宕なり、此堂は清水なり、大佛なり、此屋しろは祇園なり、北野なり、此中央なるは大内なりなど、こまかにうつし作りて、物しらぬ蜑乙女なとにさししめして語りきかせ、都にある心のみにうさをはらしぬるとぞ。其心の内れもひやりぬべし。又ある時長谷川に語られしは、扨も世の中のたのしみといふは富るにもあらず、貴きにもあらず、唯いづれの國にもあれ、おもふ所にさはりなくていたり遊ひ、山水の風景に心をはなたば又思ふ事もあらじと涙くみて聞へし。長谷川も此こと葉身に去

みて耳に殘れりと又予に傳へ語られき。げにかの人は身の上なれば一しほに其歎息も多かるべけれ。又世の中廣き人々も世事のわづらひにつながれて、井の中に一生を終ふるは罪なきさすらへの身ともいふべし。君父のつとめに任せる人は其道重ければいかゞはせん、只予かとき逸民は彼人の言葉にも感ずる事多ければ書しるしぬ。

阿蘇山

○阿蘇山は肥後國阿蘇郡にあり、高岳、根子嶽、往生嶽、中岳、高岳、五嶽あり、就中高岳にして高サ海面より六千二百五十尺あり

今よひは阿蘇の大宮司のもとに一すくして、あすこそは峯にのぼらんと心ざせしに、晝過る頃より風の色少しあしうみゆれは、あすにおりて雨ふり登山の繰をうしなはん事もやと思ひめぐらすにぞ、心あはたゝしう成り來て、今よりもと思へど道おしゝずぐさんもはいなけれバ、山の北の麓の的石といふ里に入りて、あないの人を賴みて山の北おもてより登る。木こりのみ行かへは道いと細くけはし。絶頂に至り付は日既にくれはてぬ。晝參詣多き時に商ふためと旅人などの行くれたるか宿る爲に茅屋あり。唯むしろもてかこひたるはかりにて床とてもなし。此内に入りて宿る。名高き峯に登りつめて、空もいと近う星探

○阿蘇神社は國幣中社にして一宮健磐龍命、二宮速瓶玉命、三宮孝靈天皇命を祭る。孝靈天皇巳列創建せしと云へり、後比咋御子神以下九神を合祀せり

るべき程なるに、夜あらしの吹わたる音も物すごくて、一山人倫たに、四方寂くたるに夜ふくるまで目もあはず、又もゆるあたりも程遠からで、地震ひ山動く、世にある心地にはあらず。夜あけぬれはきのふれもひしにはとなりて、山かづら引渡せる間に、朝日の影いと花やかあり。夜半のわびしさ引かへて心いさめり。とく起出てもゆるところにいたる。大なる穴あり、是をみかぶ〳〵いふ。中のみかぶ、北のみかぶ、法性崎と名付く、都合三か所なり。當時さかんにもゆるは法性崎なり。たとへはふいごの口のごとし。黑煙天を覆ひ、時々火出て其音のおびたゝしき事、只今此山みぢんに碎る心地す。其勢ひは筆に書つくすべくもあらず。玄ばし見居たれと我身も山とともにくだけさるべき心地して、あくまでもみつくしかたし。少し下れは大なる堂あり、内に額あり、壽安鎮國山と書り。是はもろこしの帝より、むかし此山の靈異なる事を傳へ聞給ひて、此五字をもて山を封じ給ひしなり。堂は傾き損したり、人はもとより住べき所にあらず、むかしは是より下つかたに寺院多くありしといふ。すべて絶頂は海濱のごとくにして、硫黄の氣にて白くみへ、石は皆金くその如くにして土砂ある事あし。玄ばし下れば土見へ草ありて、はじめて世界の景色あり。西の方にはるかに雲仙たけ

○豐前の彦山、一に英彦山と稱し、田川郡と下毛郡とに跨る、高三千三百六十六尺あり

○釋尊類從より收めたる阿蘇三社大宮司系圖によれば、神日本磐余彦

「神八井耳命」

「速瓶玉命」

「惟人君命」

この後阿蘇大宮司の家となれり

○正平三年九月阿蘇大宮司惟澄申狀に、傳へ云、上古の世は此地湖にして阿蘇山はみづうみの中の島なりしか、阿蘇の明神むかし此國の守なりし時、西の方の山を切り通して水を落し湖を干て田地とおせりと、誠に此地の樣すをつら〳〵見るに湖なりし事虛說にはあらしと思ふ、又人智の古今なき事を感す。それより山を下りふもとの本社ふしれかみ、神主は詩歌のすき人ときけは音つるゝにいなみもせず、いと親しくもてなしぬれはひと日ふた日留る。其家の事尋しに神孫たゝしく、天正の頃までは三十五万石を領せるか、豊後の大友氏の爲に零落せりとそ。今にては其おもかけにもあらず、然れとも位は貴く二位まですゝめる例あり。ふるき家なれは色〳〵珍敷事ども多かり、殊に下野の狩といふありて其狩の法今に傳へり。むかし鎌倉家の時富士の牧狩の催しありしかと、狩の法式たしかあらさりしかハ、梶原をして此阿蘇の大宮司の家

○類從より收めたる阿蘇三社大宮司系圖によれば、

あり、北の方に豊前の彦山を望ぞむ、其外の眺望は四方の山にへだてたり。此阿蘇の山は目八分の山四方を圍みて堤を築きたることく連りめくれる其眞中に、此阿蘇山のみ基を別にして一峯秀たり、奇妙の地形なり。此山の四方のふもとを阿蘇谷といふ、幅貳三里はどつゝにして平田あり、只西の方のみ少しはかり四方の圍の堤のごとき山きれて川流れ出たり。

祭祀禮典萬分の六慶長復興し一年公勅あり東照宮に奉たてまつりて惟神司なる大宮司の職を繼しめらるること此時より阿蘇宮の傍に移住して社領三千五百石の内十石餘にて祭を行ふとあり

へ尋させられけるとおり。今に其時の景時か尋の書面持傳へり。

仁斯至

我身の分上を知らず心志に根脚なければ、聊か才氣を具し頗學問に通ずる程、向上無邊の見識出て、反而尋常の俗人にだも及ばざる事今の世のうれひなり。余も年若き時は客氣ありて着實の風に遠かりし事を、やう〳〵に三十に近くしてわきまへ知れるもいとおろかなり。薩州に遊ひし時、日夜旅宿に來客ありて色〳〵の事を雜談しける折ふし、一人の才子いひ出しけるはわが輩學問に志て日夜聖經賢傳を讀學ふといへとも、畢竟益無き事にこそ、たとひ學問成就したりとて論語などに教玉ふ仁なといふ事は解し得とも行ふ事は叶ふべからず、只文字をよくよみ覺へ、人に物知りと稱せらるゝばかりの事にこそ、先生も口には聖經を尊信し玉ふやうなれと、推量するに眞實に尊信し玉ふとも見へず、されバこそ行ひは醫療の事のみをなし玉ふのみにて、仁なと行はんとてゝろざし玉ふ事は露見へず、又たとへ志し玉ふとも行ひ玉ん日はあるべからずといふ。余驚き、そこには扨も迷ひ玉ふ人かな、さるにても世間大かたはそこ

のことくこそ思ひ居玉ふへけれ、そこには中心に思ふ事をあからさまに云いたしたまふは、すなはなるともいふへきにや、おこかましき申事ながら我おもふ所をくわしく語り開せ申べし、しばしのいとまをかきて心靜に咄し玉へ、又聊の益にもなるへき事も有りぬへきか、それ仁といふ事は大にしていふ時は、天下を安んし人民を救ふ事なれとも、手近くいふ時には禽獸のとく我身勝手にせずして、人の爲に成るやうにする事を仁とはいふなり、故に論語にも吾欲仁則仁斯至とはの給ひしあり、そこの詞のことく天下國家を治身にあらされは仁は行はれぬものならば、いか程仁を欲するとも斯に至る事はあるへからず、匹夫にても仁を行ふ道あれはこそ、孔子もかくはの玉ひしなり、わか醫を行ふも即仁を行ふなり、若治療を求る人ありて其疾苦を救へは人の爲に成る、もし又治療を求る人なくても醫學を修行する即仁を行ふなり、醫學上達して精妙に至れは人に教しへて、其人々に世間の人の疾苦を救はしむ、もし從ひ學ふ人なくは書物にあらはして後世末代の人に告げおしへて、後世の人民の疾苦を救はしむ、しかれは我醫術を行ふも、又机にかゝりて醫書を修行するも、見臺によりて醫書を講するも、誠を盡して眞實にさへすれは是みな仁を行ふあり、

醫業のみにかきらす、神主の神明に祈請して人の福德を祈るも、坊主の佛道を弘通して人を善道に導くも、武士の其君に忠勤して其國を安んし、人民を安堵せしむるも、商人の商賣を出精して家を富し親屬をやすんし出入の者を恵むも、職人の其業に勉めて家内のものを養ふも、皆何れも仁を行ふといふべし、然れはこそ何人にもあれ、其人其身の分〳〵に付て誠を盡しつとめ行へは、其しるし忽あらはれて、其人に屬する人の安堵する事なり、いかゐる人にても人の爲に成事は其身に付てあるものゆへに、是を仁斯至とはいふなり、其人々の身の分に付ていかやうにも誠は盡さるゝものぞ、論語にも又君子思不出其位とも敎玉ひて、我身の分より外の事は思ひ志すましき事なり、そこのとく仁は我等とき匹夫にては行はれすと思へは、仁を行んと欲すれは我分より外の望出來て終には悪人ともおりぬへし、此所手近き事なれとも、大儒先生もかく手近く人々の分上に付て說聞せ玉ふ事まれなれは、學問の益多からす、醫者も人の疾苦を眞實に救んと志せば、人また其恩義をかんじて家富み名もあらはる、武士も君の爲と志して勤むれは其忠顯れて祿も增し位もすゝむ、商賈も先祖よりの家の爲、家屬の爲、一類親屬の爲にもと志して、其業を出精すれは其誠通して利德を得、家富み身も安し、今の世の輕薄風なるは醫は美服を着し、人の上席に座する事を志して醫となり、武士は祿を增し位を昇らん事をこゝろざして奉公をなし、商賈は身一分の榮曜安樂をこゝろざして金銀を貪る、皆仁の道に違ふか故にわざはひを蒙るもの多し。そこにも此所をよく〳〵心得て仁をうしなひ玉ふべからすといへば、一座みな歎服して、今日より志をあらため人の爲を先とし、我身の事を後にすべしとて退そきぬ。

○往昔は人身賣買のと本邦全州に普く行はれ、りされば世に人身の賣買狀を藏するもの少からず、現に余の知人の藏するものは享祿四年の古文書にして男壹人を代錢五百文にて賣れり

奴僕

日向邊の農民富有なる者は一生買切りにしたる奴僕を多くもてり。いかゐる事ぞと問に、米良、五箇其外此近國の山中より出る奴僕の親たる者へ鹽一俵米五升許をあたへて、其子を一生ふつつに買切る事なり。山中の者は賑ゐる地へ出る事を面目たのしみとして、親たるものも子の出世する事のやうに覺へ、子たる者も悅すゝみて出る事なり。かくのごとくして一生を買切りたる奴僕は、たとへ打殺しても其主人の心任にして、親もとより壹言のうらみいふ事なし。男女ともに此通りの奉公人甚多し。田地多く持たる農民は多く召かゝへ置ゆ

○香取文書に依レ有ニ二ようよう中男の狀之事合ほんせん壹貫

右文者、おさなかの孫太郎生年三十二に成り、明年きのえはじめ候てきさりの間五年の間、一ケ年五つくりの賣買正なりわさこと、一日も一日をまたてまひさこと、一日に廿日文づの廿上たてすまれ、此もしたいのさいかし、神社ぶつんけるもいかいじせ、此状をうけさもうへよりやせ候はしさて、先はれさしめうさ、所政所、頭の地のら所候はんの、政所、まるもあいるまじく候、一てごんんるろ、日文明五年みづの十二月三日の廿三日の晋取津宮住人左近次郎入日代賣買にあらず。

へに、其者とも私に通して出生する子をもふかくは禁せず、主人よりも厚く世話して養ひそだつるなり。これを庭の子といひて、普代相傳の奴僕にてわけて其家を我家とこゝろへ居て、眞實忠勤をつくす事なり。主人家の娘を嫁せしむる時には、かならず此婢女を添てつかわすなり。もし其奴僕主人の氣にそむく時は、主人のこゝろ次第に賣拂事あり。一生を託せる家の事なれは其主人家を實にわか家と心得、大切に忠を盡すゆへ、主人もまた我子のごとく覺へて恩愛ふかし。まことに主從の心厚くみゆ。今上方にては人を賣買事はきびしき御制禁にて、世の中にもおそろしき事のやうにおぼへたるは、人を賣買といふ事は遊女ならでは、なき事にて、其上其買出すといふに其親に納得して買たるにはあらで、人の子をかどはかしきたれる者なれは、その親に歎きかなしむ事ゆへ御制きんとはあれるならん。日向邊の人の賣買はこれには似も寄らで、其親も悦ひ、其子も悦ふ事なり、上方のごとく賣與ふべき事ならねば、夜中に幼き子を捨て折わしく人あけれは狗猫の食となるのわはれあるには、はるかに勝れり。また上方の主從といふは名はかりにて、近來は主の方より反而奴僕のきげんをとりてめしつかひ、奴婢よりは反而主人を下目にみてつとめてやると心得、春秋の出代時をまちかね、半年〳〵にて主從あたらしくなり、其前の主人にいる内より先のあり附ところを約束し置て出たるあとにては、主人家の事をそしり笑ふ事讎敵のごとし、奴婢かくのごときの心ゆへ、主人も召遣ふ内は隨分おもてむきは奴婢のきげんをとりて逃さらざるやうにすれとも、内心はわか家の奴婢をかたきのごとく思ひいるあり。かくのごとくなるゆへ主從の恩義年〳〵に薄くあり、君臣の禮もみたれて唯金銀のいきをひにて、無理に人をふくせしめいる事になれは、月〻年〻に忠孝よりも禮儀よりも金銀を尊く覺ゆる風俗になりゆくなり。武家はかく別なれとも三都の町家はたとへ其奴婢いかやうの無禮不法をなしても殺す事は扱置、こぶし一つを與ふる事もならず、もし怒りに乘して打たゝきおとする時は、公邊殊の外むつかしくありて、其主人おんぎを蒙り、ついには家をも破る程に至る。此ゆへにいかなる無禮不法ありても、主人は身を思ひ、家をおもひて奴婢に屈し居り、奴婢は此事を知りいるゆへ、主人を恐るゝ事なく、いかやうの事をおしても其家を追出さるゝはかりにて、其隣家に奉公しても前の主人よりさしかもふ事ならず、主人家は笑ひそしられて家の惡聲を世間に弘ひるばかりあり。名は君臣あれとも畢竟は寄合の傍輩

○元祿十二年三月の文正徳元年五月の高札に、人賣買堅く停止す、但男女の下人或は譜代或は年季奉公の人は永代召置事相對に任すべき事

○元文六年正月の改律には下人に不作法の義申付候主人は品により遠島

○朱舜水名は、之瑜字魯岡、明の浙江餘姚の人、明の學德共に高く、我國に來りて、水戸光圀公に聘されて賓儒となれり、明の亡ぶるに際して、我國に歸化す、居常明の衣冠を著け、明の年號を用ひざるなり、天和二年四月十七日、水戸侯に謁して文恭と復せらる、年八十二、水戸侯に私へたる諡なり

○朱舜水が日本の士人の禮儀を見て、正しきに感じ、北窓瑣談にもせり

同樣の交りゆへ、主人のいせい年々に薄くなり、奴婢の心月々につのりゆく。それゆへ奉公はらくなる事にありて、百姓たるものゝ子も皆々都會へ出るやうになり、田地を耕す苦勞をまぬかれんとするゆへ、田地年々に荒れ、都會の遊民は月々多くなり、世けん自然に困窮にも及ひ、奴婢の給銀もむかしとは以の外に高料になりて、其働は前〻の十分一にも不及事なり。かくのごとく君臣の禮儀下々より亂れ來れるゆへ、おのつから中人巳上にも其風うつり及ひて、禮義廉恥の風義薄くなれるならんか、何分にも君臣の禮は嚴重にて殺活の權柄をも司とる事にあらざれば、風儀の厚くある事はあらし。明の亡人舜水先生常陸にいられし時、縱に百石二百石の侍にて一人召つかへる奴僕も其主を敬するをみて大に感心し、我明朝も君臣の禮義かくのごとく正しくは、かくのごとく義を知る人の少くて、むなしくほろびはすまじきものをとて、なみだをながされしとぞ。明末なぞは主從の禮はなはだみだりにして家來たる者、主人より夕に立て歩行し、主人と同席し、主人と同食し、畢竟傍輩のごとくありしとぞ、我邦武家の君臣の禮正しきをみば舜水の歎息せられしもまことなり。かゝる事を思ひ合しては日向邊の主從の恩義厚きはうらやましき事なり。東國にても甲

州、上州の邊かくのごとくにて、富有の農民は家の子といふものを多くかゝへ居れり。何ごとに付ても古風淳朴あることは田舍にのみ殘れり。

西遊記卷之四　終

○おの一節安積艮齋「栖南紀東西遊記」、山川物産之奇、梁如列眉、其中霧島山尤偉絶、頗之不勝神往、漢因譯國字爲漢文、以充臥遊、與同好者共翫、しかして漢文に譯せしも識者皆これに劣れりとなす

○北窓談卷之二に云、日向國高千穗峯とは、彼國に所あり、一穗峯といふ、又霧島山といふ、又一は高千穗と云ふ山あり、雙峯後より目向へ越ゆる道なり、余考ふるに、代々神代より所の高千穗峯は、今の霧島山なり、霧島山に多くあらず、雖も地にいさらに是は彼地に斷ぜるすして、曉斷せる故なり、昔より目

西遊記卷之五

天の逆鉾

むかしあめつちいまだひらけざりし時、冊諾二柱の御神天の浮橋の上より霧のうみを詠め下し給ふに、島のごとくにみゆるものあり、二柱の御神天のとばこを以て是をさぐりみ給ふに、國なりけれは則此ところに跡をたれ給ふ。是霧島山と名づくる由來にして其鉾を逆しまに下し給ひしが、今に至り其まゝに此山の絶頂にたちて有るを天の逆鉾といふ。誠に神代の舊物にして奇絶の品又外に是を比すべきものなし。人々皆珍らしと尊びて拜せんことを希ふといへとも、此霧島山格別の高山にして殊に火もへ風動き、其外種々の神變不思儀怪異珍奇多く、登るもの不時に紛失する事抔、毎度の事ゆへに薩州の人といへども恐れて絶頂に至る者すくなし。予久敗この逆鉾の事聞居てゆかしく思ひ居つれは、鹿兒島逗留の時節志を起して登らんとす。然るに山中奇怪多しと聞けは、召連し僕などは凡庸の者なれば、もし恐れて紛失などせは惡かるべしと思案して、旅宿へ集會の人の中にて撰みしに、旅宿の近きあたりに年若き勇壯

の男子ありて、われこそ其山へ同道すべしといひしかば、則打つれて只二人霜月八日といふに薩州鹿兒しまを立て日向國におもむく。薩隅日三州は嚴寒のときといへども雪霜を知らぬといふほどの暖國なれば、かゝる高山へも霜月に登らるゝ事なり。ことに此年は格別だんきの年にて此ごろやう〳〵綿入壹ッ着するくらいの事なりしかば、少し時節もおくれしかどおもひ立しなり。扨海陸二日路をへて霧しま山に入、數十丁のぼりて霧島の宮居の前に着く。二神垂跡の地なれば宮居今にいたり殊に美〻敷、此近國にての大社なり。伏拜みて黄昏に及ひぬれば傍の山下坊といふ坊に宿す。この坊にて先達の案内者を宵の間にやとひ、明朝夜の間より登山す。雜樹生ひしげり、日かげだに洩らざるほどの山をしかとしたる道すじも見へさるに、只案内者のあとに從がひ、ひたのぼりに登る、その間奇樹異卿名もしらす、目なれぬものはなはた多し、これは南方暖氣の山なれば生くさの品類も多きなるべし。全体草木北國の山などとは格別に種類多し。かくのことき所を五十丁のぼりつくせば、それより上は樹木一本もなし、只芝のとき草のみ生ひたり。其ところにいたれば四方豁達とうちはれ、薩隅日の三州一望の中にいりて衆山は波濤のとく、大海は青靄をしきたるがごとし。其中に櫻しま山突然と秀でゝ盆石をおきたるかことし、絶頂より白き煙り四時に立のぼりて香爐のことし、景色無双筆につくしがたし。さて件の草ばかりの山をのぼる事又五十丁、それより上は草もなく、只栗ほどのやけ石斗なり。こゝに至つて登りはす〳〵急峻なり。扨このあたりよりうへ段々のほるにしたがい、天地の氣しきやゝ變じ、不時に下の方より雨そゝぎ來り、あるひは風よこさまに卷來る、又眺望のいと、まなし。それより二十丁ものぼりて馬の脊越といふところにいたる。また御鉢めぐりともいふ。此ところはのぼらす、唯平にゆくといへども左右皆谷にて劍の刃の上をゆくごとく、足のふむところ〻纔に馬のせなか程あれは馬の脊こへとはいふあり。足をはこべは栗のことくなる燒いし左右のたにへあたれ落る、其行ところの狹きをしるべし。さて左の方は万仞の谷にて、底は雲にて眼及はす。右の谷はふかさ三四丁あるひは五六丁にて、谷にみちて猛火燃へあがる。此馬の脊越にかゝりて後は唯何となく震動して、地軸唯今くだけおれて、此山微塵に成るやうに覺ゆ。また腥きゑもいわれぬ氣ふき來り、あるひは墨のとくある雲うづまき來り、同行のものさへも一向にかくるゝ事もあり。あるひは前後左右に異形の雲煙あらわれ、鬼神のと

く佛神のとき事もあり。あるひは足下より虹たちのぼり、たて横にたおひきて織りなせるがごとくある事もあり。又天地ともに金色になる事もあり。其外奇怪ふしぎなか〳〵いふもおろかなり。静に是を考ふるに是皆谷一面の猛火によりて、又陰氣もあつまり來り、火の上に雨そゝぎ雲霧覆ふがゆへに、水火相激して震動雷電し、又水火蒸蒸によりて種々の形みゆるなり。又硫黄焰硝の氣あるうへ、それに水をそゝぎたるゆへ種々の匂ひもいづる事あり。又折〳〵一陣の風ふき來る事あり。此ときは先達敎しへて急にうつ臥に倒れふさしむ、個匂にならされは風の爲に此身をとられて猛火のうちに舞ひ落るなり。折ふしは風の爲に取らるゝものあるゆへに此山にては紛失する人多しといふなり。予も殊に此かせを恐れて少しの風にも急にうつぶしになり、地に取付て風にはなたれさるやうにせり。玄はしにて又忽に風もやみ天はるゝ事もあるなり。須臾の變幻定りある事あし。此ところに取かゝりしよりさしも勇氣の若もの大に恐れ足戦ぎて立事あたはず、われと先達と前後より介抱していろ〳〵と恥しめ勵し、玄ばしが程は引行しかど後には目見へず、顔色變せしかばいかんともしがたく、はとんど難儀に及ひしに、先達いふやう、けふは山も格別にあらし、

殊にかゝる人引具し行ん事いかにも叶ふべからず、登山も是迄あり、これより下山すべしといへば、力及ばず本意なくそれより下りに向ふ。扨夫より縄に十丁ばかりを下れは天氣晴朗にして風おもむろに四方の眺望初のごとし。玄ばらく休息して燒飯あと食し、こゝろを鎭めしかは、若ものもけしき常のごとくにしてさきにはいかにして、かばかりは恐ろしかりつるにやと三人打わらふ程あり。われつら〳〵おもふにかゝる事のありて妨けにもなるべからんかと、凡庸の人を同道せさりしあり。然るに今若ものが爲に予までも絶頂をきわめずして、是より下山せん事生涯のいこんなるべし、何とぞして一人なりとも登りたきものをとおもひめぐらして、先達にこれより絶頂までは道程いかはど有ると問に、馬の脊越の長さ八丁、それを過て急にのぼるところ十丁ばかりもやあらんといふ。それなれは縄の道なり、紛れ道やあると問に、兩方は谷なれば紛るべき道なしと答ふ。さらばあまり殘念なれば予は獨歩して絶頂に登るべし、此ところに若ものを守り居て、われか下り來るをまちくれよ、これより下は案内なくては一歩もすゝめかたければ、かへす〳〵も賴おりといひすてゝ、とゞむるをもきかで足をはかりにのぼりしに件の馬の脊こえに至れば天地

たちまち變じて初のとし先達がれしへに任せ、折〳〵はうつぶしになりて風をさけ、千辛万苦して馬の背越八丁が間走りぬけたるに、先達かいひしとくそれよりは眞直に登る所あり。此ところにいたれは天地又常のとくにして奇怪なし、只いきを限りに登る程につゐに絶頂にいたれり。絶頂は尖りて縱の地面に天の逆鉾あり。是を見得しときのうれしさ何にかたとへん、逆鉾のありさま全體は唐金のとくにみへたれとも、風霜にさらせるものあれは、青く鏽て去かと云れかたし、長さ一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程にてさかさまに地中にたち、其石突の端の所に南面に鬼面のこときものみゆ。是も風霜にされたれは鼻目しかとは見へがたし、土中に入りたる先きの方は何程深く入りたるやしるべからず、只絶頂に此鉾一本のみにて外に堂宇等のときもの一つもなし。神代の舊物なりや其程はしらずといへとも、實に三百年五百年位の近きものとは見へず、天下の奇品なり。もし銘なぞも有るやとくわしく見しかとも見へず、しばらく此絶頂に徘徊するに天氣晴明にして四方目の及ふ限りみへ渡り、其心地よき事今に忘れがたし。されともかゝる所は久敗留るべきにあらざれば、いそぎ下りたるに馬の脊越にいたれば、又初のとく天地晦冥して怪異益はなはだしこと〳〵く筆に盡すべきにあらず、殊に山上の有さまは人間に洩さざる山法なり。恙なく馬の脊越をこへてひた下りに下るに遙の下に先達若ものかすかに見へて、大さ豆のごとし。嬉しくていそぐほどに下るとはなしにすべり落て、須臾の間に二人の前に着ぬ。恙なかりし事のみともに悅ひ、其夜くれ過る頃宮居の傍の坊にかへりぬ。元來急峻なる山なれは百五十丁の間なれとも下りには甚速にて暫時に下る事なり。今度の登山暴虎馮河の勇なかりしかども、もし馬の脊より下り來らば生涯のいこんなるべからんものを、よくも絶頂を極めたりぬ。宮居より左右に分れて西のみね東の峯といふ有。登る所は東の峯なり、東西只二峯のみあれ〻ば登りかゝりてより絶頂に至るまて、只一筋に登る事あり。他國の高山は多くは登る所もあり、又下る所もあるものなるに、此山のみ水筋にも從がはす、只登りにのぼるのみあり、ふじ抔の登りに似たりといふべし、山の高き事思ひやるへし。かく二峯東西に對し聳へたるゆへに昔より高千穗の二上嶽といふ神書にいふ所の山是なり。別に今世の人の高千穗の峯といふ山、此國にあれども、甚の小山にして神書にしるせる山にあらず、高千穗の峯といふは此霧島山なる事種々の慥なる證據あり、此山に登るものはおの

○西遊雜記に奥嶮云、抑岩屋は神代に建置嶮玉の上數丈の字なるに立て文字の鉾と稱せ石なり。千天逆鉾の銘ふ所なり。此ところにいたれは天地又常のとくにして奇怪なし、只いきを限りに登る程につゐに絶頂にいたれり。絶頂は尖りて縱の地面に天の逆鉾あり。是を見得しときのうれしさ何にかたとへん、逆鉾のありさま全體は唐金のとくにみへたれとも、風霜にさらせるものあれは、青く鏽て去かと云れかたし、長さ一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程にてさかさまに地中にたち、其石突の端の所に南面に鬼面のこときものみゆ。是も風霜にされたれは鼻目しかとは見へがたし、土中に入りたる先きの方は何程深く入りたるやしるべからず、只絶頂に此鉾一本のみにて外に堂宇等のときもの一つもなし。神代の舊物なりや其程はしらずといへとも、實に三百年五百年位の近きものとは見へず、天下の奇品なり。もし銘なぞも有るやとくわしく見しかとも見へず、しばらく此絶頂に徘徊するに天氣晴明にして四方目の及ふ限りみへ渡り、其心地よき事今に忘れがたし。されともかゝる所は久敗留るべきにあらざれば、いそぎ下りたるに馬の脊越にいたれば、又初のとく天地晦冥して怪異益はなはだしこと〳〵く筆に盡すべきにあらず、殊に山上の有さまは人間に洩さざる山法なり。恙なく馬の脊越をこへてひた下りに下るに遙の下に先達若ものかすかに見へて、大さ豆のごとし。嬉しくていそぐほどに下るとはなしにすべり落て、須臾の間に二人の前に着ぬ。恙なかりし事のみともに悅ひ、其夜くれ過る頃宮居の傍の坊にかへりぬ。元來急峻なる山なれは百五十丁の間なれとも下りには甚速にて暫時に下る事なり。今度の登山暴虎馮河の勇なかりしかども、もし馬の脊より下り來らば生涯のいこんなるべからんものを、よくも絶頂を極めたりぬ。宮居より左右に分れて西のみね東の峯といふ有。登る所は東の峯なり、東西只二峯のみあれ〻ば登りかゝりてより絶頂に至るまて、只一筋に登る事あり。他國の高山は多くは登る所もあり、又下る所もあるものなるに、此山のみ水筋にも從がはす、只登りにのぼるのみあり、ふじ抔の登りに似たりといふべし、山の高き事思ひやるへし。かく二峯東西に對し聳へたるゆへに昔より高千穗の二上嶽といふ神書にいふ所の山是なり。別に今世の人の高千穗の峯といふ山、此國にあれども、甚の小山にして神書にしるせる山にあらず、高千穗の峯といふは此霧島山なる事種々の慥なる證據あり、此山に登るものはおの

一嶮山の峯七斗分入一疑なり。穴ひかし給ふ。日に聞ふ。止

○同書に云、土人秘して語らず。こゝ他國よりす來る人多し。何間の山のもの

○物語りき勝考卷

二鹿兒島府下、天明初年有點

南池田來新嶺

神代記に云、

周圍形似稍傍

嶮名文之不正、何知

無一到知林放之

欺深以可疾

而峯始立此偽矛

出山且峯發異疾四

抜刃研位牌

疾暴死其子久爲顏

狀至白

因問命於卜者

撰造神劍之全

曰自致招咎

階家服退凶除

龍倉退

法偽矛矢

たちまち變じて初のとし先達がれしへに任せ、折〳〵はうつぶしになりて風をさけ、千辛万苦して馬の背越八丁が間走りぬけたるに、先達かいひしとくそれよりは眞直に登る所あり。此ところにいたれは天地又常のとくにして奇怪なし、只いきを限りに登る程につゐに絶頂にいたれり。絶頂は尖りて纔の地面に天の逆鉾あり。是を見得しときのうれしさ何にかたとへん、逆鉾のありさま全體は唐金のとくにみへたれとも、風霜にさらせるものあれは、青く鏽て去かと云れかたし、長さ一丈餘ばかり、ふとさ大なる竹程にてさかさまに地中にたち、其石突の端の所に南面に鬼面のことときものみゆ。是も風霜にされたれは鼻目しかとは見へがたし、土中に入りたる先きの方は何程深く入りたるやしるべからす、只絶頂に此鉾一本のみにて外に堂宇等のときもの一つもなし。神代の舊物なりや其程はしらずといへとも、實に三百年五百年位の近きものとは見へす、天下の奇品なり。もし銘なぞも有るやとくわしく見しかとも見へす、しばらく此絶頂に徘徊するに天氣晴明にして四方目の及ふ限りみへ渡り、其心地よき事今に忘れがたし。されとも かゝる所は久敷留るべきにあらざれば、いそぎ下りたるに馬の脊越にいたれば、又初のとく天地晦冥して怪異益はなはだし。ことく〳〵く筆に盡すべきにあらず、殊に山上の有さまは人間に洩さざる山法なり。恙なく馬の脊越をこへてひた下りに下るに遙の下に先達若ものかすかに見へて、大さ豆のごとし。嬉しくていそぐほどに下るとはなしにすべり落て、須臾の間に二人の前に着ぬ。恙なかりし事のみともに悦ひ、其夜くれ過る頃宮居の傍の坊にかへりぬ。元來急峻なる山なれは百五十丁の間なれとも下りには甚速にて暫時に下る事なり。今度の登山暴虎馮河の勇なかりしかとも、もし馬の脊より下り來らば生涯のいてんなるべからんものを、よくも絶頂を極めたりぬ。宮居より左右に分れて西のみね、東の峯といふ有登る所は東の峯なり、東西只二峯のみあれ〻登りかゝりてより絶頂に至るまて、只一筋に登る事あり。他國の高山は多くは登る所もあり、又下る所もあるものなるに、此山のみ水筋にも從がはす、只登りにのぼるのみあり、ふじ抔の登りに似たりといふべし、山の高き事思ひやるへし。かく二峯東西に對し聳へたるゆへに昔より高千穂の二上嶽といふ。神書にいふ所の山是なり。別に今世の人の高千穂の峯といふ山、此國にあれとも、甚の小山にして神書にしるせる山にあらず、高千穂の峯といふは此霧島山なる事種々の慥なる證據あり、此山に登るものはおの

○西遊雜記に云、抑さの山奥嶮嵒の玉せ石岩なる天遊代に稱せ建置の神代に錄し千丈の鉾の上に立る數の文字なり。銘文は古篆にて天逆鉾と云なり。此山の建たる所は昔人の住ふ所にあらず、只に行者に事よりて行なりし人なり。其所に見介なしてて見し都と云ふ人放あり。此地に下る路に行にふるり。九州の紀行にあり。

○同書に云、土人祕し他國語なること多し。島やの國の人なれば霧島山の間何なる人集れるやらん。是も來のものなるべし。

づから知るへし。白石先生をはしめ諸先哲只今世に稱する所の高千穂を神代の舊跡といわれしは、身其地に遊ばざるゆへに眞跡をしらざるなり。二神垂跡の義天の逆鋒の義なと皆予ふかく考ふる所有りて一說あれとも、こと長ければ別にしるして此書に畧す。西の峯も高さは東の峯におとらず、雲間に聳へぬれとも神跡にあらさるゆへに世の人のぼる事なし。只此山の高くしかも廣く大なる事無量なり、麓のめくり三十六里、山の中に大なる池五六十もあり、中にも大波の池紫の池なとはめくり三里もありて湖水のことしとゆふ。此山には蚺蛇多く住て池の邊最多く、樵者といへとも池の邊には行事あし、もし池近くを通る時には無言にて通るとなり、人語のひゝきを聞けば大蛇かあらず出て人をのむといふ。又野馬といふものありて形馬のとく、髮長くして地に引き、おそろしき姿の獸あれとも人を害する事はあしとなり。わが山にのぼりし時も初めに案内のもの此事をいひて、もし見給ふとも驚き給ふべからずといひし、予ももし見バ珍らしかるべしと思ひしかとも折惡敢て出ざりき。其外種々の毒蛇、惡獸、大蜘蛛、大蝦蟇等夥しとなり。是は南國ゆへかゝる高山深谷あれとも雪封する事なく、常に暖氣なるゆへに、格別に廣くて人跡かよわざる幽僻のと

○役小角は大倭葛木上郡の人にして佛氏を好み呪術に通し、葛城山二十三年を棄て、松果を食て仙を求め、松蘿を衣て朝廷に役せらるゝを恥ひ、其妖術を惑すを怒り、伊豆に流す、後赦され

○ぬに家を棄て、年三十二にして、葛城山に隱れ、其後きこれを流す、

○拳澄は越前の人、白鳳年間に生る、知行の富洞養老年間越前の人、錄行の養老年間天皇の病癒て大寶二年道融師の號を賜ひ、中興の祖師、年八十二年十二月六日脫す

ころ多きゆへに、萬物生しやすく、多も整せずしてかゝるものども多しと見へたり。北國にも越中立山なとは高く廣き事霧島におとらざれとも、四時雪封して生類は住事なりかたきゆへ、毒蛇、猛獸ある事なし、只鳥獸草木の種類の多きは天下此きり島山に勝るところはあらしとそ覺ゆ。又山中に溫泉の湧所も數十か所あり。硫黃のいづる谷もあり。水精は馬の脊越邊の谷底に日かけにかゝやきて遙に鏡のとく、或は月出のとくみゆるもの所々に有り、其大なる事思ひやるべし。しかれとも絶嶮のところにて行かたく、殊には其邊神變ふしぎ多き遊なれは、砂一粒といへとも、山神のいかりに觸るゝとてとる人あし。又黑雲と千丈の黑岩谷そこよりはへぬきたるあり、奇絶言語に及バず、其外いろ〳〵の珍奇いひつくすへからず。此山中に一月も二月もありてみめぐらば、面白き事限りあるべからず。されとも中〳〵仙骨をゑざれは叶ひがたき事なり。すべて天下の高山は役の小角釋の泰澄なとの開山多きに、此霧しまやまのみ佛者のいまだ手を付さる所にして、只開山は伊諾伊冊の二神とやいふべき、誠に珍敢き山あり。

目鏡橋

長崎の橋はすへて唐風の作りやうなり、兩岸より切石を壘上て橋杭あしにかけ渡せる石橋なり。他國の石橋といふは一枚石にてかけたるものなるに、長崎の石橋は小き石を切りて石がきの如く壘て、兩方より合せたるあり、長き橋はふた筋に水を通ずるあり是を目かね橋といふ。唐繪にゑがく所の橋は大かた此風あり。下より水溢るれは崩るゝ事もあれとも、上よりいか程重き物をのするといへとも動き破るゝ事あしといふ。誠に大河にはあるまじけれと長崎の川は大かた京都の堀川程の大さあり。万代不壞の橋なり。もとは唐人來りて作れりといふ。彼地は柔らかなる石たくさんなるゆへにや、京あゝにても此ごとき橋を作らは破損の憂なくしてよかるへきものを。

○廣島は沼田郡に屬す。維新以前は淺野侯の城地なり。今にても廣島にては家多し。豚なを奇へる家云く「廣島の知友云く「廣島でもこんなには居らず」さ

家豬

安藝國廣島の城下其繁華美麗なる事、大阪より西にてはならふ地あし。其町にぶた多し。形牛の小さきか如く肥ふくれて色黑く毛はげてふつゝかあるものなり。京あとに犬のある如く家〻町〻の軒下に多し。他國にては珍らしき物あり、長崎にもあれとも少くあし。是は彼地食物のやうにするゆへに多からずと覺ゆ。唐土なゝには多く飼そたてゝ食用にする事なり。琉球にも多しといふ。又長崎にたま〳〵やぎといふ獸あり。其形羊に似て色黑く毛ながきものなり。薩州鹿兒島にも是あり。隅州の内にはやぎの牧ありて多く育てりといふ。何の用になすものにや知らず。打見たる所は唐めきて、おもしろきものなり。南都町々軒下に鹿猿多く人になれたるか如く、國々土地〳〵にて禽獸にもかわりあり。

○雲仙獄、一に温泉獄さいひ、高來郡有り。○筑肥前國温泉山云ふ、肥前國温泉山は、島原の領地なり、海中に差出て後三方は海なり、上り下り半途より島原侯の番所あり。春夏切手を取て行人、此地は彦山の行の場なり。其間山の間に登れは、雙立り、普賢山と妙見ヶ地獄とあり。湯の所有り。火出見尊を祭奉る。往古は伽藍なり。大伽藍へ魏々さる丹耶蘇宗門に歸依して一切に破却せられ、今幾に一

地獄

肥前國雲仙が獄は西國の名山あり。山のふもと皆海にて纔に北の方へかり縷のごとく陸に連れり。高さ三里只一峯に秀てゞ甚見事ある山なり。唐船あゝの長崎へ渡るにも大洋の中にて此雲仙か獄を目當とするとて、予も長崎より歸る時に千々輪灘を船に乘り、此山の麓の千々輪といふ村に付て一宿す。此里は天草一揆の時賊徒の中に名高かりし千々輪五郎左衛門か在所あり。此千々輪より山に登る道嶮峻、水なくして誠に難所の山なり。やう〳〵盡過るころに絶頂に登り付く。絶頂は平地にて民家そこ〻に見へ、田畑も多く、折しも稻心よく實り、其中に幅三間ばかりの川あがれたり。天外の一小世界にして實に地上

の仙境ともいふへし。向ふをはるかにみれハ茅葺の佛院みへて撞鐘の音幽に聞ゆ、此寺を一乘院といふ。むかし文武聖武兩朝の御歸依深く、其頃は殊に繁昌し、猶近きころ天草の亂迄は寺も多く、四拾八院までありしが賊徒此山に據りしに依て、公よりこぼち捨られ、今は纔に此一乘いんばかりこそ、むかしの俤を殘せるとぞ。今の院主より六代前までは京都より堂上家の公達を申下し、住持有けるよし、いかゐる御家の公達にてかありけん、かゝる鄙のはてに來り玉ふ、其名も聞まはし。一乘院を尋ねしに院主迎へ入れていろ〳〵物語し、風雅の人、筆の跡のこしたまはれといふ。予も拙しと辭せしかど强て求るにいなみがたくて七言絶句一首を作りて與ふ。院主よろこび畫飯なと出してもてなす。それより沙彌案内して地獄めぐりす。しやう熱地ごくあり、きやうくわん地獄あり、藍屋地ごくあり、餅や地獄あり、鍛治や地獄あり、酒屋ぢごくあり、其外かず〳〵みなそれ〳〵の摸樣ありて、多くは皆熱湯の池なり。其湯墨よりもくろく、雷のとき音して湧上り、或は石はぜばしり、煙卷炎燃て其おそろしきこと書つくすべきにあらず。東國にては越中立山、津輕の燒山皆地ごくありといふ。此類なるへし。もしあやまちて落入ちはたちまち爛れ死すべし。久敢みるべき所にもあらす、十か所斗めぐりて沙彌にわかれ下山す。眺望はゆふもさらなり、此峯には瓔珞躑躅といふものあり、見事なるものにて珍敢ものなり。又大なる池あり、池の傍草うるはしく駒多し、此牧にても年ごとに駒多く育といふ。かく高き山の絶頂に廣き牧あるも奇妙の地なり。下りには東へ向ひ島原の方に道す、城下まて下り坂五里なり。其道より天の四郎か籠りし原の城なと見ゆる。今の城下よりは南の方にてやはり此山の裾なり。東南の方に海をへだてゝ程近く天草の島なり。予も島原の城下に一宿して又ふねに乘り、天草に渡れり。

東海氏の墓

長崎春德寺の山上に東海氏のはか有り。其廣大美麗なる事日本第一といふへし。其はかの体日本の墓の作りやうとは大にちがひ、山の半腹を穿ち向ふは石垣のとく壘あげ、中をたいらにして石の机あり、石の門有り、石の宮有り、四方の垣もみな石を彫りて種々の花鳥を細密にほりたり。石の柱石の門皆鳥獸草木を彫付、あるひは文字を彫たり。其外いろ〳〵の道具みな石にて作れり。其構へ廣く其細工精密にして筆の書つくすべきにあらず。はしめて造り立たる時の

爲者二壇、小通詞目弾其他親族、右準次第ナスト云、先年金銀彫ハメ光、郷日月、海上ニ映、華麗成ル處、後は金銀勿論石塔ノ爲奪去ラレ、子孫衰修理ト加事不能大荒蕪シテ幾存スル耳

○山の半腹を穿ちて墓所となす風は九州に少からず

費銀五十貫目いりしといふ。其後猶心に飽たらず、二三十年か程は常〳〵石工をやとひはか普請せしとぞ。それよりして長崎の諺に手間いりて埒の明ざる事を東海の墓普請といふ。此人は唐土より明の亂をさけて日本に渡れる人あり、大福有の人なり、今にいたり其子孫東海徳十郎と名のりて唐人の通事なり。長崎に遊ふ人は必此はかをみるべき事なり、目を驚す事あり。又近き頃まて京にありて明樂の師範せし鉅苅氏の先祖のはかも、長崎の西山といふ所に有り。其製東海氏の墓のことし、されど大に劣れり、石碑のごとき物に明故伯毓禎魏公六府君。故考叟侯魏公九府君。墓道如此はり付たり、前の石階に衍瑞東南の四字を大字にゑりたり、又其一段下に椿林鐘秀の四字大字を横に彫たり、此はか小なりといへども世上のはかにくらべては、大國の君の墓所といふとも及ぶ所にあらず。其はか唐人の墓は大かた大にして美麗なり。

清正公

肥後の國熊もとに加藤清正の靈を祭りて、清正公の社といふ。熊本にては別ての大社にて一國の尊敬はあはたし、宮居のありさまより社頭の木立まで神さ

○我邦にて關羽を祭れる所京都眞如堂の傍芝薬師といふ寺中にあり、園花万薬寺に京都紙屋川の邊なる大将軍の社に關羽の廟ありといへり

○櫻島は大隅國に屬し鹿兒島灣の中央に位す、周回十里餘、南北二里、東西一里二十四町あり

○笈埃隨筆卷二に云、安永八年乙亥九月中旬薩州鹿兒島邊の地時々して

びたれは年ふるく祭り來れる事とそ思はる。誠に天正のむかし天下大に亂れ英雄豪傑きそひ起り、武勇の大將かず〳〵ありし中に、今の世にいたるまで神靈をあがめ、緣もなき人の祭りたふとむは、只此清正一人なり。誠に清正の人となり義を先としていつはりを行はず、勇にして頗る仁慈の心あり、其頭の武士の中にては、殊にすぐれてぞ見へし。誠に人心の義に感ずるは和漢とも同じ事にて、唐土にても人多き中に關羽のみ今に神と祭り、諸國とも尊ふとむあまり、日本の地まで關帝堂といふものを建てゝ、長崎遊の人は甚尊信する事なり。清正も其事跡は異なれども其勇敢義烈の氣象關羽の風あれば、人心の歸する所ありて後世までも其神を祭れるにや。

山汐

安永年間薩摩の櫻島山大に燒て後、山上より大水溢れ出て田地民家大に損せり。所の人これを山汐といふ。抑此櫻島といふは海中にありて麓のめぐり七里、山の色黒く一峯に聳て、比叡山二ッはかりも重ねたるごとくに高し。ふもとのめぐりに人家田地ありて富饒の所なり。其峯の燒たりし事は希代の珍事にて、

鳴動す、いかなる事にやと諸人怪しみをなす、ところに、廿九日鹿府の前海中にある櫻島の東南白濱といふところより火煙て出、天地も裂くるがごとく震動し、土木大石など飛ばし、暴風山を崩し侍りき、村々これが爲めに燒失し、又た海なるところ岩々も數ヶ所か開砂石降積、天地晦冥し、三日の間日光な見す、漸にして頓て晴れども只地底の鳴響く音は月を越へても止まざりき、その大變に人馬も夥しく横死せり、また吹出したる硫黄海水中に落聞り、輕石と成て、小山の如く積て、人其上を往來せり、しかれども浮さるものゆへ次第に冲へ漂ひ出たり、また櫻島の南は浴海なるに海底より探投しと見えて、海原に忽然と小島三つ涌出てまをに希有の地變ふり、抑此櫻島は鹿府の前なる海に在

くわしき事は別卷にしるせり。其燒漸鎭りて人々も再び活たる心地して悦あへる所に、或日又山の峯震動しておびたゝし。すはや又燒上るかと見る程に山の峯より雪をとけるがごとき物眞逆樣に落來る。何事かといふ程こそあれ大水山を碎き石を飛し、樹木を拔てまくり落る。其水先きに當る所は人家田地の差別なく、只一刻の間に大海へ突出せり。さばかりの嶮岨なる高山の峯より、海を切り落せるかごとき大水眞さかさまに落來る事なれば、其勢ひの急なる事たとへんものなし。人馬ともに逃るいとまもなく、しかと見定めたる者もなしとかや。予も其地に渡りし時、其跡をみたりしに其水すじは大なる谷となり、其傍の田地の中或は小たかき岡の上なとにも、大さ貳丈三丈、あるひは五丈六丈にも及へる石ながれ殘れり。かゝる大石の事なれば人力に動かす事もあたはず、田畑なども さまたげられながら其まゝに捨置り。是を見るにもまことにかかる大石の水の爲になかれ下れる事、其時の水勢思ひやられたり。今も櫻島の小兒のうたふ歌をきけば、島のおたけがどろ〳〵鳴るぞ、村丈はよにげ、山汐が來るとうたへり。其ときのおそろしかりけん事みるかことくなり。

すべて高山大やけの後は、多くは大水溢れいづる事あるものなり。天明癸

てその里斗里に縄七里高一里ばかりの峰になりて壮麗なる山見えて盆の如し。草木繁茂し、漁猟盛んにして、村落二千戸ばかりあり。産物多く、専ら製塩を業とす。更に考出せるこの島中世湧出せるなり。○天明三年七月信濃国浅間山噴火し、灰石を飛ばし、害を被ること三十五村に及び、死者三万五千餘人

○秀吉名護屋在陣の時、京都より大政所の病篤の由急報あり。しかば、俄に京へ還るとぞいふ。

○小倉は豐前國の郡名。○企救郡は豐前國の東北の七町ばかり。○篠瀬は一に次兵衛瀬とも云ふ。○東西南北共に長四拾八間餘、幅八間餘、退潮長三間を見はす。礁標あり。

卯信州浅間かたけ大焼の時の洪水もおひたゝしかりし事、みな人のしるところあり。その委敷事は又別巻にしるせり。

與次兵衛瀬

中國と九州と分れたる地は長門の國と豐前國なり。赤間が關と内裏とさしむかひで縄に一里の海をへだてたり、小倉へは筋違にて三里なり、此所兩國の山迫たれは、海の幅狭くさし潮引しはともに其汐先き甚急にして、誠に大河のごとし。其故に此所の渡海は汐の満合たる時にのみわたる事なり、汐先きには渡海あし。予か赤間か關にいたりし時は渡りの時刻を過て、便船一艘もなく、明日まて逗留すべしといふ。いたづらに時日を移さん事も心うくて、縄なる海の面なれば何とぞして渡るへき手たてやあきと人に問ふに、獵船をかり切りて渡り玉はゞ今半時か程は猶わたらるべしといふ。さらばとていそき獵船をかり、予僕と二人、船人二人、都合四人乗りて渡りぬ。初の程はさもなかりしか、中流に至れは誠に大河のごとく逆巻大波漲り落つ。常〳〵手なれし船頭なれと、急流に押落されて遥に筋違にこそ渡りぬ。其水勢只川のごとくにて海のやうにはあらず、小舟なれは木のはのごとくゆらめきて座すべくもあらず、僕はとく病臥しぬ。予も急流の目ざましきにいと珍敷おもひて詠め居たりしが、あまりに強くゆられて心地も常ならねは面白風景も詠つくさず、辛うして渡り付ぬ。誠に潮の流るゝ事もすさましきものなり。又此渡りの中流に岩山の長きか一ッ水の上縄に出たり、是を與次兵衛瀬といふ。通船の恐るゝ瀬なり。いかなるゆへに名付しやと問ふに、大閤秀吉公朝鮮御征伐の時肥前の名古やまで御出陣ありしに、此海をわたり給ふとて汐先きに押ながされ、御座ぶね此瀬に流かゝり、すでに碎けて海中に沈んとせし所を四方よりたすけ船馳來り、助け乗奉り、無難に渡り付給ひしとぞ。其時の船頭を與次兵衛といひしが、大かたならぬ不調法なれば、即時に此瀬に上り切ふくして失たり。其後此瀬を與次兵衛瀬とは名付しあり。太閤の御座ぶねだに流れたりし事、其汐先きの強きをしるべし。又此下に巖流島あり、此島は佐々木巖流宮本武藏仕合の地あり、其事は世の人口に溢るゝ事あればしるさず。

景清の母、

○萩の下露に云、景清墓は日州小邑にあり、風土水址に景清大居士と謚す、保二戊八月十五日卒

景清か塚日向の國にあり、世の人皆しる所あり。然るにいかなる故にや、景清か母は球磨の人吉の城下より五六里程東の切幡村に祭れり。此所に景清が娘のはかも有り、切幅の神社とて一村の神に祭れり。此村はなはた盲人を忌む、坐頭たる者は他所よりもいり來る事ならず。もし是をおかして入る時はたちまち大なる祟りありて、難儀に及ふとなり。世にいふごとく惡七兵衛景きよ後に盲人に成りしゆへにや。

○こたつ草に云、河原上京師祇園の下野佐野の嘉兵衛か娘はこれ終ひ清水の上に埋もれ來りて父丸の墓に食卓料理を供せり、

○景清か娘は日向の國の人吉の城下の宮崎邸の上に埋もれ來りて父丸の墓に食卓料理を供せり、

○又景清か娘は相模の國鎌倉丸の娘荒神の後に住せり、今は鐵道工事のため他所に移せり、

○筑紫の國の上野の古墳に景清か娘の墓あり、其傍に景清か娘の碑石あり、

○河内の國の上野の古墳に景清か娘の墓あり、

卓子

近きころ上方にも唐めきたる事を好み弄ぶ人、卓子食といふ料りをして、一ッ器に飲食をもりて主客數人みづからの箸をつけて、遠慮なく食する事なり。誠に隔意なく打和し奔走給仕の煩はしき事もなく、間約にて酒も獻酬のむつかしき事なく、各盞にひかへて心任せにのみ食ふと、風流の宴會にて面白事なり。寺院にも黄檗宗などの寺には、不茶とて精進おから卓子料理をするとなり。是日本にてはめづらしきことに思ひて至て心易き朋友中ならでは行ひがたき事なるに、唐土にては世間常のことなりとぞ。それゆへに長崎に來れる唐人、日本の常〳〵貧家といへども、膳椀みな別〳〵にひかへて、おのれが箸にては香の物一ッもとらざるを見て、大に感心し、扨も日本は禮義正しき國なり、家内のしたしき中にてさへ日夜飲食の事にかくのごとく禮をみださず、貧家といへども膳椀を別〳〵に備へたるは、唐土などにてはおもひもよらざる事といへるとぞ。誠に是を聞ては日本の風義正しきをよろこぶへき事なり、禮儀正しき中にてたま〳〵上方のごとく卓子料理も打和してよけれども、此事常に成りてはいとみだりかはしき事あるへし。唐人の感心するも尤の事なり。すへて是に限らず、日本の正敗事は唐人などの不及事多し。日本の内にては數百千里をへだてたる所の文通にも、いかなる秘みつの事にても、又金銀を贈ることにても、紙一重の封しにて糊付にしたる麁畧のものにても、いさゝかの間違なく屆く事を、唐人聞ていと不審がりて驚くことなどぞ。日本にはいか成横著無頼のわるものにても、馬かた船頭のごとき下賤のものにても、封したる狀をみだりに開くことは決してなき事なり。金鐵にて錠をおろしたる器よりも、糊づけに封したる狀は堅きなり。是等の事常に成り心付ざれはこそあれ、唐人なぞより見はあなどりて感心すへき事なり。近き頃長崎の官に下向し給ひし御人、唐人館阿蘭陀館

巡見のときに、阿蘭陀館内はさつはりと掃除し、無用の雑人一人も出居る事なく、黒す又ろすおどいふ下賤のものはいづかたにおしこめ置し事にや、壹人も目にかゝらず、唯カピタン以下の役人たるものばかり出迎て、禮義嚴重にて尾籠の事聊もおかりしに、唐人館にては唐人の雑人大勢道の左右に出て行列を見物し、あるひは立かゝりて行列の中迄も押入り、あるいは木にのぼり塀に攀て高聲にわらひのゝしり、いかように制しても一向聞入れず、無禮至極おりしかは、こゝたよりきびしく咎め給ひしに、猶承知せずして彼國にては乾隆帝南巡の時だにも行れつ近く立つどひて見物せり、天子にてさへかくのことくし、それ以下の人の事さして無禮にはあらずと答へ居けるとそ。天子の巡幸に左様なる事上下和順にして美事なりといへども、法度のみたりなる事は思ひやるべし。すべての事に唐土は文弱の風氣にて、下賤のものには法度の嚴粛なることは行れかたきならはしと聞ゆ。かへつて阿蘭陀おどは法度正しきといふへし。朝鮮人などにても、來朝の時下賤のものども道中筋にても尾籠なるふるまいするにても、其國のふうぎ思ひやりぬへし。

○カピタン、蘭語 Capitein の訛なり

鍾乳穴

○水田領は阿賀郡に屬す

○雲根志第三編卷國中山大岩洞の穴の中に炭石の消なるもの有り、此洞ふかきもいのふ物あり、鍾乳穴明りあり、鍾乳穴の中に鍾乳の形ふ彫ふ、鍾乳洞と云ふ、鍾乳石の中に比留坂と云ふ、又備中國の鍾乳石の多くあれは名付しなり。松山城下よりは七八里をへだてたり。其穴入り口はなはた大にして暫く入れは行當りて石壁あり、その石壁に小きあなあり、其小きあなをくゞり入れは、甚大にひろきところに至る。此所は少しの日光もなく暗黒はなはたしき所なり。案内の者松明を多くともし入ることとなり、其所の廣さ凡四五十間四方も有るべし、此所に上より鍾乳石夥敷下り居る。又御釜の蛮、魚の棚などいふ所あり、皆自然の石にて其形をなせり。段々奥の方に入り行くに又行當りに石壁あり、其石壁の上に横さまに小穴あり。やう〳〵伽劬してくゞり入る程の小あななり、其あなをやうやうにしてぬけ出れは、又廣き所に至る。此所は二段になりて高き所あり、又低き所あり、遙に瀧の音聞ゆ、松明をふり立てだん〳〵に進みゆくに、切岸のとき懸崖あり。其がけをやう〳〵にしてつたひ下れは、瀧の流れの川ありて、水足首をひたす斗なり。其川を渡り越へて猶すゝみゆけは、又ゆき當りて石壁あり。其壁上に又小穴あり、それをもくゞり拔れは又廣き所あり。此所は初の二け所よりは大に狹くして纔に五六疊とふはかりと見ゆ、又其向ふの壁石に小穴あり、是備中國水田領の山中に、俗にかねち穴と稱する洞あなあり。かねちとは鍾乳といふ事あり。其洞あなの中に鍾乳石の多くあれは名付しなり。松山城下よりは七八里をへだてたり。其穴入り口はなはた大にして暫く入れは行當りて石壁あり、その石壁に小きあなあり、其小きあなをくゞり入れは、甚大にひろきところに至る。此所は少しの日光もなく暗黒はなはたしき所なり。案内の者松明を多くともし入ることとなり、其所の廣さ凡四五十間四方も有るべし、此所に上より鍾乳石夥敷下り居る。又御釜の蛮、魚の棚などいふ所あり、皆自然の石にて其形をなせり。段々奥の方に入り行くに又行當りに石壁あり、其石壁の上に横さまに小穴あり。やう〳〵伽劬してくゞり入る程の小あななり、其あなをやうやうにしてぬけ出れは、又廣き所に至る。此所は二段になりて高き所あり、又低き所あり、遙に瀧の音聞ゆ、松明をふり立てだん〳〵に進みゆくに、切岸のとき懸崖あり。其がけをやう〳〵にしてつたひ下れは、瀧の流れの川ありて、水足首をひたす斗なり。其川を渡り越へて猶すゝみゆけは、又ゆき當りて石壁あり。其壁上に又小穴あり、それをもくゞり拔れは又廣き所あり。此所は初の二け所よりは大に狹くして纔に五六疊とふはかりと見ゆ、又其向ふの壁石に小穴あり、是

○郡上は郡上郡に屬す

○多賀は犬上郡に屬す

よりおくへついに恐れて入りたる者なし、其奥はいかなる所なりや、いまた知る人なし、余か友喜菴、先年此地に遊びて其近邊の案内知れる老人を鄉導として、其穴に入りしに鄉導の老人も、若き頃より此穴の案内者して數人を案内せしかとも、かの二段目の懸崖を下りし事はなく語りも傳ざりしに、喜菴好事の癖にて膽勇あり、かねて文字の力もある人なれは、しいてすゝみて三段目の廣き所までは入りしに、猶其奥を探らんとすゝみしに、鄉導の老人大におそれて松明の用意少ければ、万一穴の中にて松明盡なば再び人間に歸る事叶ふべからす、猶この奥にはいなかるものか住居らんもはかりがたき所なれば、速にいで給へとて先に立て逃出しかば、喜菴も力なく出て歸れり。此事を記に作り畫にも圖して余に示せり。余は道のつもり惡敷て其地にいたり得ざりし、殘念なりき、いとめづら敷洞穴あり。又美濃國郡上の山中にも天馬の窟とて甚ふかく、奇異の洞穴ありて、數十丁奥までも至られ、其奥に石馬ありといへり、先年其洞中の圖をみたりし事のありし。また近江國多賀の山中にも鐘乳石多くある穴ありといへり。昔にて富士の人あな、伊豆國の伊藤か崎のほらあなあと、名高き穴なれとも、今にては埋れけるにや、入りたる人ある事をきかず。唐土にては說

鈴といふ書に出たる雲南にある洞穴、ふかさ五百里と見へたり、錢塘の人其洞あなの限りを極めて行ぬけて又地上に出たる事を載たり。五百里といへば、たとへ六丁壹里にしても、日本道五六十里あるへし、數日の糧を携へ、穴の中に數日夜をへてをくにいたることときみやうの事なり。唐土人も好事の癖ありて、其限りをきわめたるも希有の人なり。世界の氣かよひかたく陰陽の化なき穴中あれば、魑魅魍魎其外大蛇毒むしの類も生あるものは住がたきゆへにや、反て奥深き穴中に恐ろしきものゝ居たる事は聞へず、されど暗黑の穴ふかく入るは心細きかぎりなるべし。

西遊記卷之五 終

一近來江戸書林より此方橘南谿先生作の西遊記續編をひそかに奪ひ、其上、本書にも無之虚談數々を書加へ、此方作の樣取成し、板行し賣弘、猶其外にも東西遊記拾遺などいふものを追々作り出し候樣に書記し有之候、是等皆偽せものに候間讀人信用有へからす候、此方作は西遊記前編目錄四十五ヶ條同續編目錄三十八ヶ條東遊記前編目錄三十七ヶ條同後編目錄四十一ヶ條都合四部限りにて、此外に此方作の東西遊記は無之候、偽せ本實談らしく見へ候故此段わけて斷り置ものなり。

右は本書の出版元京都勝村治右衛門等より本書の表紙裏に貼して世に弘めしものなり、その偽書といふは寛政十年九月江戸本石町二丁目西村源六、通新石町中村善藏、同所遠州屋清左衛門の三書林の名を以て版行せしものにして諸國奇談西遊記後篇と題して五卷あり、その目錄を掲くれば

壹の卷　青葉笛　唐蘭の櫻　池山氏の物語　嬉し野
貳の卷　隱戸の瀨戸　文述　方言　姥ヶ嶽　產婦　鶴嶋
濁酒　尾上の鐘
參の卷　扶桑木　同畧記　海水增減　蓋其昌　廣平の地　古朴
小田の木佛　綱引　牛合　惡癘
四の卷　龍鐘を愛　肥後の毒水　武者修行　吹上の濱　熊膽
五の卷　五ヶ村　高麗の子孫　孟宗竹　六親の和　鍛冶祐定
學心和尚

この中本書に同じく見ゆるは記事も畧ぼ同しく、文も大同小異なり、小中村清矩氏の話よ、東西遊記もと紀行體にてありしを其一節づゝを抄出し、それ〳〵題を設けて今の本の如くなるものなれば、その實はその書も偽作とあらず、むかしゃ抄出の節を異にせる故、かゝる二樣の書を出せりと聞らる、さもあらんか、猶虚實を確めし上にて更に本篇に漏れさるのを增刊することあるべし。

西遊記續篇目錄

一碑文　之卷
一吹上の濱　一ヲガ島　一古朴
一曾根松　一小田の木佛　一扶桑木

二　之卷

一熊膽　一鵠鴿　一孟宗竹　一五ヶ邑
一毀譽　一流れ物　一龍鐘を愛す

三　之卷

一嬉し野　一鼠島　一徐福　一陽氣
一濁り酒　一姥ヶ嶽　一牛合　一饑饉
一隱戸の瀨戸

四　之卷

一那智の瀑布　一桂林　一出來嶌　一肥後の毒水
一豆腐怪　一高麗の子孫　一龍の玉　一那須

一海水增減　　五之巻
一楓樹　一唐書の櫻　一綱引　一産婦
一奇器　一劍の舞

西遊記續篇目錄終

○日本にも古より碑の文あるふさ、墓碑のみにかぎらず、山上の碑、城國宇治橋碑、野國群馬郡山名村觀音堂碑、伊豫國道後温泉碑等あり

○深川洲崎辨天社の前にたてたる碑はふれゝ似たり

西遊記續篇卷之一

碑文

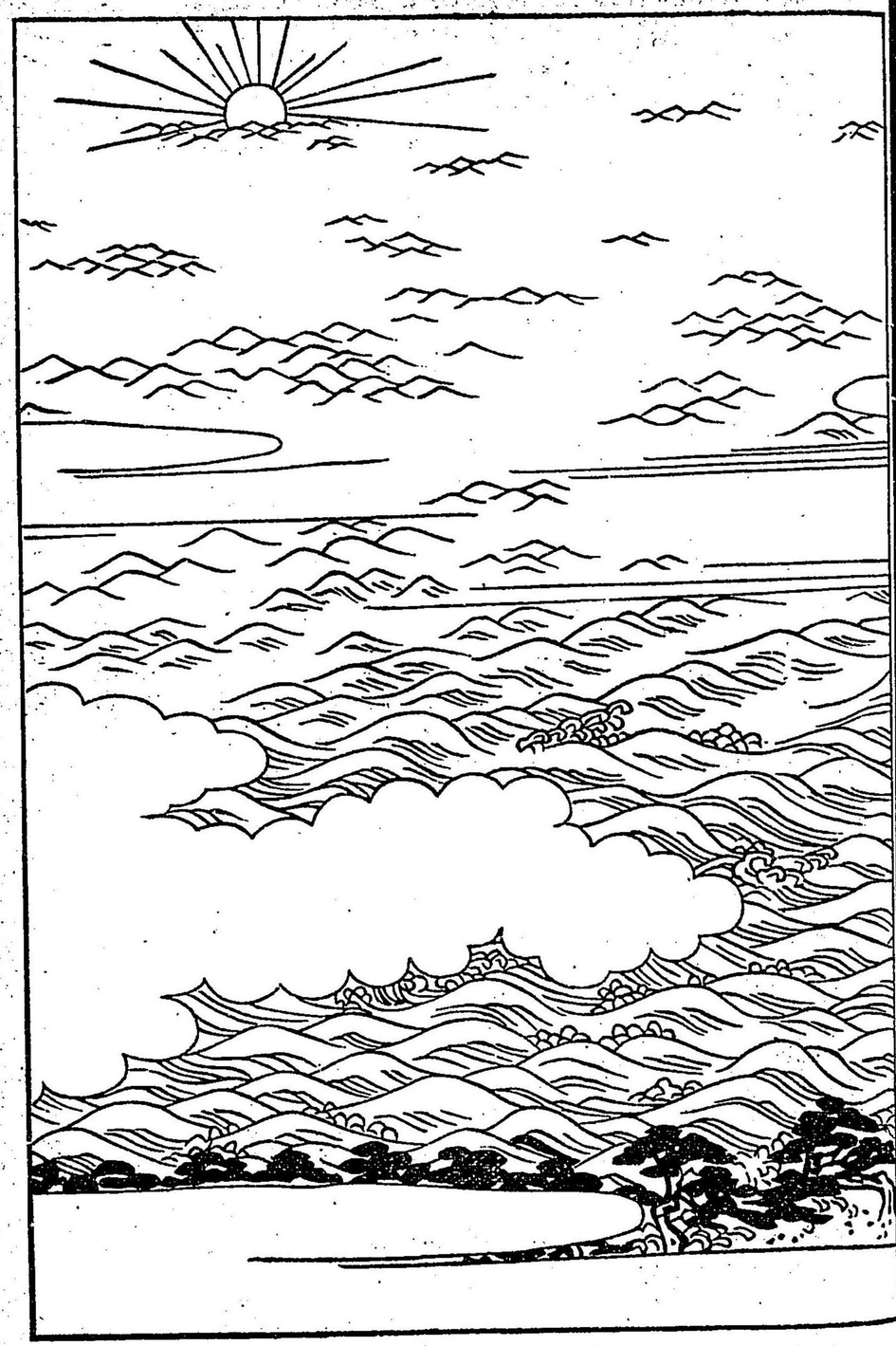
唐土には墓碑のみにかぎらず、橋普請、堤普請、其外堂塔古戰場など多く石碑を建て、其事を千歳の後までも記し殘せる事多し。日本も近年は別して其事多くありて、皆文人の文筆を振舞ふことなり。然るに唐土は文字の國なれば、名文奇句もありて、其手柄多けれど、日本は漢文にては俗に通じがたく、玄るもの少し、只風流文雅の慰ばかりとなれば、漢文もよけれども有益の事を專に主意とする碑には、世俗通用の文や勝るべき。余熊野海邊の長島といふ所に遊びしに、佛光寺といふ禪宗の寺あり。其寺に石碑あり、碑面に津浪流死塔と題せり、裏に手跡も俗樣にて文も俗に聞にやすく、寶永四年丁亥年十月四日未刻大地震して津浪よせきたり、長島の町家近在皆〳〵潮溢れ流死のものおびたゝし、以後大地震の時は其心得して山上へも逃登るべき樣との文なり、いと實体にて殊勝のものなり。誠に此碑のごときは後世を救ふべき仁慈有益の碑といふべし。て

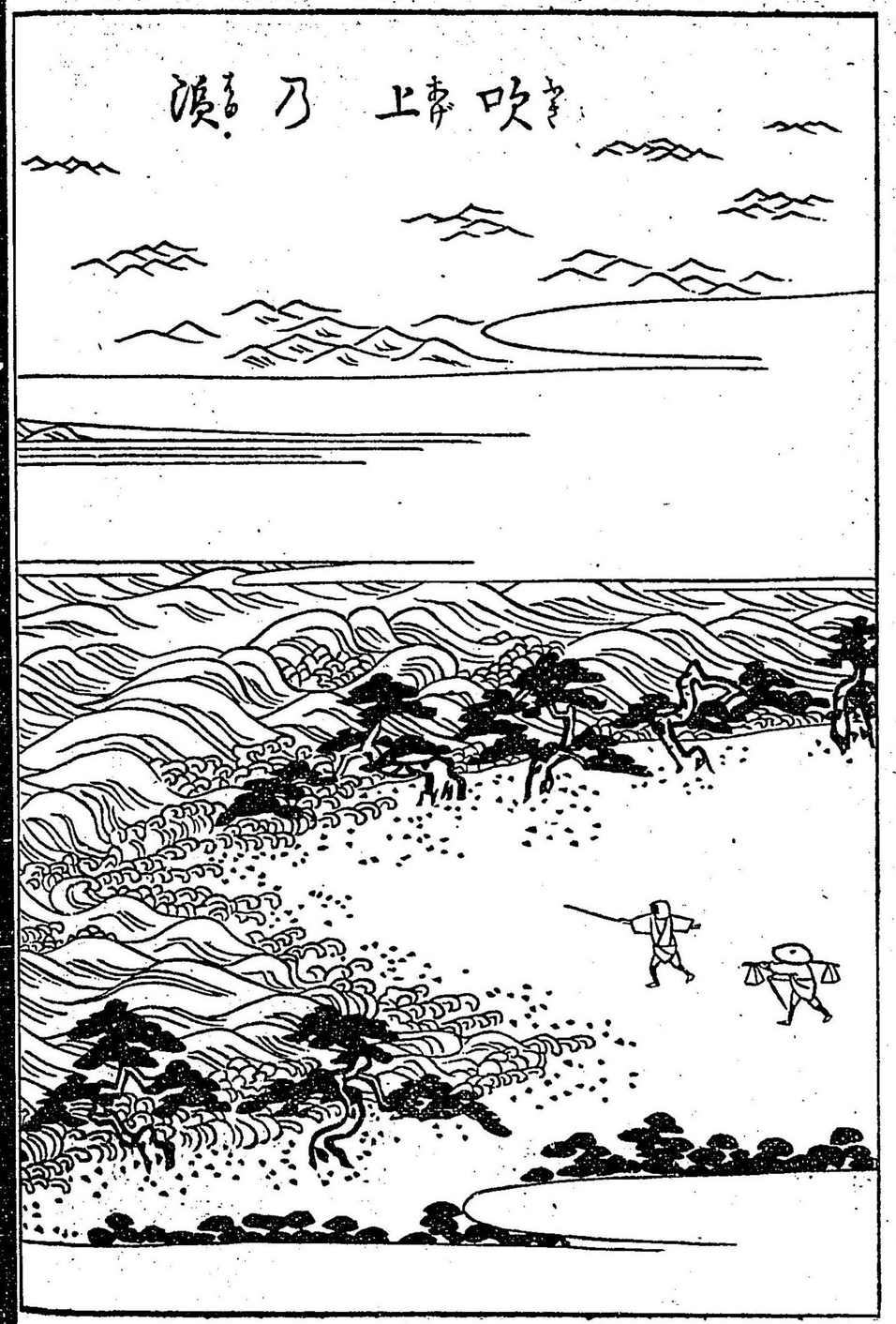
れら漢文にては益少かりぬべし。諸國にて碑をも多くみつれども長島の碑のごときはめづらしく、いと殊勝に覺ゆし。其津浪の事、其あたりにてたづねしにあまりふるき事にてもおければ、語り傳へて今におそれあへり。それより段々浦々にて尋るに津浪よせたりし浦もあり、又さのみ高くのぼり來らざる湊もあり。同じ南面の熊野の浦にて、かく違ひあるはいかなるゆへぞと、其地理を考ふるに、幅狹く海の入込たる常〳〵に勝手よしといふ湊は、皆其時津浪來りて人家皆々流れたり、海の幅廣く常〳〵は舟のかゝりわしく、しかと湊ともいひがたきはどの所は、其時津浪高からず、人家流るゝはどの事はあらざりしとなり。されバ海幅狹くふかく入こみて、つねづね舟かゝりよく、風のおそれもおしといふべき湊は、別して大地震の時は用心すべき事にこそ。大雨後の洪水、又は山津浪なども山ちかくの地に多きものにて、大坂などのごとき四方皆川々多く、つねづねも水危きやうなる土地には、洪水のうれへはかへつてなきものあり。四方へ水のさばけよきゆへ激怒のいきほひあき成べし、大海よりよせ來る津浪も亦是に同しと見へたり。すべて津浪は一旦沖のかたへ俄に潮引去りて後、其返し大に登り來るものとぞ。寶永の津あゝみも一たん海水、ことの外に引去り、つねづね見へざりつる海底の岩などまであらはれぬれば、海邊のもの皆々あゝ珍らしと見物に出たるに、去ばらくの間に沖より大浪よせ來りて逃べく間もおくて、流れうせぬるものの多かりしといへり。西國の求摩川にても、大雨の後川水俄に干て河原となりたるを、不思義の事珍らしと見物に出て、大水川上より俄に押來り、流れ死せるとあり。これは洪水にて川上の山崩れ、川中へ落埋りて、暫くは川水をせき留けるが、やがてせき破れて大水俄に落來りしなりしとぞ。されば海も川も不時にゆへあくして俄に水引去るは、跡にて大水必來る事ありと、用心すべき事あり。

○近くは武藏東京に吹上あり、紀伊國和歌浦をも吹上潟といへり。○鹿兒島名勝考卷壹云、（吹上小松原）小松原村（川邊郡に屬す）に有、武藏志小松原これ西海より海なり、風砂を吹上げて大白雪の如くなり、白雪の樹堆に似たるに松樹吹上の砂に埋れて僅に見るなり、これ同世上の云ふ所の吹上の松は云ふ所の吹上に聞ゆ。○同世上云、（吹上小松原）の雪の時彼の人々のおもひきや筑紫

吹上の濱

諸國に吹上の濱といふは數多所あり。海風荒く遠淺の濱に白砂を吹上る地をいづかたにても吹上と名付るなるべし。就中すぐれたるは薩州西南の濱の吹上なり、其海元より限あき大洋にて風荒ければ白砂をうづ高く吹上、又是を吹ちらすゆへに其砂の高低さだまらず、殊に濱長く數十里を一目に望む潔白の海上にて白砂一點の塵もなく、風景不雙あり。此吹上の濱の蜒乙女のよめると




滾乃 上東吹

の海のはてまて
もの和歌のうらなし
みかいるへしさ

○刷井目肥に近衛
信輔（即ち三藐院
殿）太閤秀吉と諧謔
は（魔魔の坊）
す津にして
ノ津に遷け
と流るこ
れたみゆ
にあらさ
ら御信輔
ぬ家傳
と

洛のみ
よ麁兒島名勝考卷
○に云（近衛屋
二敷一乗院より海
人目のみ主けにみ主けにはみ惜そ

信尹公御近衛殿
人目のみ主けにみ主けにはみ惜そ

てむかしより彼地に名高き和歌あり、

吹上の松は眞砂に埋れて老木ながらの小まつ原哉

是は三藐院殿の坊の津へ左遷ましく て、暫く滯留おはせしとき、此和歌聞し召てかんせさせたまひしとぞ、また自らよみて蜑乙女なりと宣ひしとも云傳ふ。余も例の出次第に、秋風の眞砂が上に渡るなり、夕日うすつく吹上の濱と、口ずさみて過つ。三藐院公の御借座はわつか暫の間と聞しに、此公ましませし餘風にや、今にいたり此國は和歌をこのむ人も多く聞ゆ、

花にあかし紅葉にくらす折〳〵は住ばやと思ふ山ぞ多かる

と詠しは、近き頃曾山氏ある人のよみける歌とぞ。余が如き諸國名勝の地に、西とおく、東となく遊ぶ身は、いつも此歌思ひ出して心留る景地のみ多し。猶此外にも耳に留る歌ども多く聞しかど、旅の日の事繁くて忘れぬ。誠に名公の餘風遠く殘れりと、其むかしこそゆかしけれ。

ヲガ島

余が熊野に遊びけるは冬のはじめなりけるが、其年の夏の頃かとよ、彼地の二

○骨ヶ島は目下東京府の管轄に屬し、周廻凡五里、戶數百四十餘、人口七百五十餘、八丈島の南に在り、鬼島の一名別稱あり

○殘なけり

○疫伊豆日記七月廿六日の條に、八丈島より巳午の方三十里ばかり隔りたる青ヶ島あり、ともいふ、

○明和の頃島の山の焼出て、人田園少なく、砂石なし、

○殘なけり

○殘なけり

木島といふ所に、伊豆の沖の青が島の人漂着して、其中に出來次郎といふ若者病しかば、余が友喜多氏療治をくはへて日久敷行かいければ、いろ〳〵の物語を聞りとて、余に語れり。青が島をヲガ島と唱ふ、其島は伊豆の八丈が島より遙に南の海中にある小島なるが、人は多く住けるに、十三年以前島の山大に焼出て、島中火となり、人畜焼死ける。其中に身分宜敷百姓の船を持たるが、家内十餘人其船に取り乘り、火中を遁れ出て無難に八丈が島にわたり、此年月居住したるに、青が島近年は火消て無事に成りしと聞て、故郷あつかしく八丈が島をいとま申て、又もとの船に家内男女皆々取り乘り、家内の雜具並農具まで取そへて、今年青が島へ戻る海上、難風に逢て吹流され、熊野浦へ着たるなり。其百姓の嫡子を出來次郎といひしなり。珍敷名あり。八丈が島にても出生の子もありて幼少の童子をも具せりとぞ。一島皆焼はてたる跡へ年經て只一家のみ立歸りて、何をおして世のたつぎともし、又何を樂しみともせんとにや、いかにふるさと懸しけれバとて數百里はなれたる沖の島に、人もおく牛馬も無きに我家内ばかり歸り住たく思ふは、外よりはいと不便なる事あり。其上又いつか焼出んもはかりがたきに、あはれおるは人心ありけり。其後土佐薩摩邊の人の南海

○骨ヶ島は目下東京府の管轄に屬し、周廻凡五里、戶數百四十餘、人口七百五十餘、八丈島の南に在り、鬼島の一名別稱あり

○殘なけり

○疫伊豆日記七月廿六日の條に、八丈島より巳午の方三十里ばかり隔りたる青ヶ島あり、ともいふ、

○明和の頃島の山の焼出て、人田園少なく、砂石なし、

○殘なけり

に吹流され、年經てやう〳〵船を得かへり來る船路に、彼青が島へ船かゝりけるに、島中に只九人、是も他國より吹流されて船碎け、歸らんやうなくて、島に留り居けるをたすけのせ歸れりとの沙汰を聞けり。されバ船の往來さへ無き遠き島なりとそ思はる。

古朴

繁華の地は人の氣も輕薄にて、年々月々に今樣當世の風に移り、家居、器物、髪形、言語等にいたるまで、むかしの風はいづれへか失て、美麗のみに長ずる事あり。邊鄙の地は是に違ひ、何事も質朴にして外を飾らず、古代の風義見るもたのもしげなり。邊國にても城下町家などは都の風にも押移るものなるに、薩摩などは格別の遠國故にや、城下にも猶古風殘れり。器物も酒の銚子といふものなし、皆錫の德利あり。膳も宗和おどいふ膳は一つも見へず、皆二枚脚の木具あり。扨多くは皆土器類を用ゆ、只京都にて官家に交る心地す。その外元服の儀式、婚姻の禮法甚嚴重にして、古法ある事余おどが知らさる事のみ多し。其外にも狩の作法、犬追物の式等は薩摩に殘れる事世の人も知る所なり。余彼國に在し時、或

町家の好みにより、兼好が徒然草を講せし事ありしに、鷹の鳥の付やうの所にいたり、そらにてはしかとおぼへざりしに、座につらなりしもの大かたは皆爰に居て、余に語り聞せ、猶色〳〵委敷法ありとて鳥の付樣の圖を出して示せり。町家の人だに斯のごとし、誠に恥べきとありき。其外手近き事は尙更にて何事も故實に從ひ、人皆かたく守り居て、假初の事にも等閑にはせず、是は此國四方にきびしく關所を居られて、出入易からず、他國の人も入易らず、自然に隔りて繁花の風にも押移されざる故なり。近き年はやう〳〵に他國の人も往來するやうに成て、器物抔も好事の家には當世の品を調へ持るも間々あり。又下女はしたなどは今に丸ぐけの帶あれども、妻娘などは帶も幅廣くあり、髪形ちも漸上方を學ふ家もあり。

曾根

播州曾根は高砂より程ちかし。菅丞相因緣の地ゆへ天滿宮を祭れり。宮居の前に年ふるき松の木あり。まとに龍蛇のごとく横さまに臥廣がりて千年の古色あり。其むかし菅公筑紫へ御配流の時、暫く此地にあがらせ給まひ、御手づから

○曾根の松ハ播磨國印南郡曾根村社の境内にあり、幹圍一丈八尺許なり。菅原道眞の手づから植えしものなりといひ傳ふ。古は猶巨大にして枝葉四方に張る。

曾根の松

松を植置せたまひけるに、其後年々に繁茂して其松今に存在するといふ。誠に松は諸木に勝れ齢ひ長くめでたきものと世にいひあらはすも、ことはりなり。されど老木のゆへにや、身木に朽入りて枯れんとすると度〳〵なるを、神主歎き、身木の朽たるうつほの中に、煤古く付たる麥藁を入れて、是を焼て療治を加ふるに其効るしありて枯んとする枝葉、再び蘇生り綠の色恙おく、如此おること近年度〳〵なれども、其たひに療治をくはへて、今猶めて度榮ふ。諸木とも藥灸など治方多き中に、松は川芎を煎じて根に度〳〵灌げば、枯れんとするもの再びよみがへるといふ。又常〳〵鐘乳石を細末して、根に埋めば、其松よく榮ふとなり。蘇鐵に鐵を根本に入れ、身木にも金釘を多く打てば、甚榮ふかごとく、諸木ともそれに相應せる藥種あるへし。灸はいづれの木にもよくきく物なり。煤付たる古き麥わらを焼たるも、大なる灸をしたる理なるべし。曾根松おとは千年の古木なれば、何とぞして長く榮ふる樣に願敷ものなり。其外都ちかきあたりにも辛崎の松、堺の難波屋の庭前の松など、甚見事なる松にて目を慰せり。されとかくべつ古木とは見へず、奥州武隈の松、阿古屋の松などはむかしの木にはあらす、追々に後世に植繼しものといふ。其外にも奥州に義經の腰かけ松など

さ十八丈、最も奇觀を呈せりといふ。今のは其餘孽のみ

○陸國里人談卷四云、相模國印旛郡菅根村にあり、天滿宮の祠木なり、村僧ふ管公鈔紫へ迫き給ふ時此地に植し給ひけるに、所に小松を村ら給ひ、邪正祭木なる松杉ふさなり、其松杉榮榮えて今執る榮榮の名木となる、高サ一丈三尺、圍り一丈八尺、乾より巽へ指して七丈、長より坤へ紅り十一丈、巽小枝毎に枝にす、其數百八十五本

○されば和泉國堺の妙國寺の大銀杏には數多釘をうちさり

○義經腰掛松は岩代國伊達郡桑折驛

藤田驛との間にあり、三周程もあり、枝の廣がりて、東西十三間、南北十八間ある赤松なり

○神路山は伊勢國度會郡にあり、太神宮の山なり

○今昔物語に、昔近江國栗太郡に大きなる柞樹ノ生ひて、其圍五百尋あり、其影朝にさし、夕は伊勢國に差す、其國の志賀、栗田、甲賀三郡百姓、日當らざる故にこの木陰に籠れり、田畠を作り得ることなかりしかば、

いふ見事なる松あり。熊野には西行の植しとて法師の松といふあり。是等は又年新らしければ其木にもやあらん。其外楠杉などには折〳〵古木あり、隱岐國に八百比丘尼の手づから植し杉三本ありしに、近年の大風に壹本折れたるが、其木にて一の宮の本社御普請ありしとて、其殘木のきれを彼國の國造余に贈られしを、香箱に依りて今に余か家に藏む。八百比丘尼いつの比の人にや、何にもあれ千年の古木といふ。伊勢の國多氣山中の大杉谷の杉は格別大木にて、天下無雙の物一本ありて、國司の頃より前つかたにや、大杉大明神とこの大木を祭り來れるに、近年枯失けるとあり。肥後國阿蘇山の麓にも、神代の杉今にありといへり。余見ずして過ぬ、殘り多し。伊勢神路山の杉の古りたるは、皆世の人の知る所なり。唐土にも孔子御廟前の聖人御手づから植たまひしといふ柏樹、折ふしは枯れ又折ふしは、若芽出て榮へし事、近年新渡の唐紙半枚に石摺にしたる柏樹の圖記にくはしくみえたり。孔子の時分より今にありといふは二千年に餘りて久敷事なるに、不思議のものなり、日本にも伊豫の扶桑木、近江の栗田郡の栗の木おと、今にあらばいと珍らしかりぬべきに切り倒しぬることは、殘念の事なりき。

天皇に此の由を奏聞す、天皇勅宣して、此樹を切倒さしめ給ひしかば、そこなれる百姓田島なりし由、みゆ

○山海經曰、黑齒國在其北、……下有浴谷、十日所浴、浴谷有扶桑、居水中、大木、九日居下枝、一日居上枝、○淮南子云、日出暘谷、拂子、鳴谷、扶桑、是謂晨明、故曰、東方之中、有山、名曰扶桑、東方之中、日在扶桑、木、是謂明明、○大荒東經云、大荒之中、有山、名曰豐絙、有扶木、其葉如芥、有谷曰溫源谷、

小田の木佛

肥後の國蘭木のこなたに、小田といふ所有。道の傍にちいさき寺有て、其表にいと大ひなる楠あり。枝葉生たる木に、南面に馬頭觀音の像を彫付たり。傳へ云ふ行基菩薩の一刀三禮の作なりと、誠に楠は命長き木なり。其實否は知らねども、行基菩薩の比より今の世にいたるまて恙なく存在する事、珍らしといふべし。道傍に見へて彼あたりには、名高き觀音の像なり。

扶桑木

扶桑の事は山海經、淮南子、大荒經の諸書に出たり。上古の世限りなき大木有て日影を覆ひ、朝は此木より西の國は是がために影ろひ、夕は此木の東日轉を見すと、此木を扶桑と名付て、其生たる國をも又扶桑國といふ。則日本の事なりといふ事和漢久しき云傳へあり。余が長崎に遊びしころ安祥寺の多門院といふに宿りしが、此院に始より伊與の國の沙門明月といふがこれも旅宿してあり。此僧は內典の事はもとより外典のことにも通じて、猶其餘詩文章をもよくして

博學の人なりしかば、同し宿りに殊に親しく語り合しが、ある時裳中よりくろき木を取出して、これは日本の上古にありし扶桑木の朽殘れるなり。其木の生ひ居し地は、我伊與の國なりけれと、數千歲のむかしのことなれバ誰かいひいだす者もあくて過ぬるが、近き頃より海をさぐり、山を穿て其木の折殘れるを取出し、もてはやすことはありぬ。殊に珍敢て唐土の云傳にも見にぬることなれバ、此一塊はる〳〵と此長崎に持下り、つゐでよくは唐土にも渡さばやとおもふなり、夫故に此傳記も其名に云そへたりとて示さる。誠に其木色黑く、漆にぬりたるかことく、木理明らかに見にて、和木の樣にもあらず。たとへば黑椶に木理あるがごとし。其記傳をよめば上古よりの由來掌に見るかごとし。余も驚て扶桑のことはかねてしも聞つる事なるが、今まのあたり見るとの珍らしければ、歸路には必ず四國路を經て、其生ひ居たりし所をも見ばやと約して別れぬ。其後余も九州を廻り盡して、四國の地へ渡り、先彼古都をたづねしに、其扶桑木のありし地は、伊與郡、喜多郡の二郡に根はびこれりとぞ。城下にても此木の事をめで問ひければ、吉田久太夫といふ人より、此木にて作れる硯の大きさ壹尺餘あるを恩まる、其外小き切はし數〳〵乞ひ得て歸りぬ。誠に長崎にて明月上

如芥、有谷曰溫源谷、○神異經云、東方有樹焉、高八千丈、葉長丈餘、廣六尺、名曰扶桑、一丈廣六尺、名曰扶桑、三丈廣六尺、名曰扶桑、五丈廣六尺、名曰扶桑、○博物志云、海內有扶桑、其下人民、皆以桑爲名、○伊勢國風土記云、國之中有埋木、是謂阿武隈川之埋木、古者、此國之人、伐此木以爲舟、中古之時、此木埋沒、年月既久、木化爲石、其色黑如漆、土人取之、以爲硯、其價如金、○平田篤胤云、此埋木を扶桑木とさ決し、たるハ信せられす

ぬ説な？國入は
扶桑木さいふも有
る畫なれざ多く
は桂さいひ傚よお
ざぞで己れも其木
な得石識さろに其
覚は院の如くに
て實なるか漆
よりも界く木理
は詳ならればざ甚實
に桂木にやさ甚ふ
質の無きにしも非
す又質の然しも
堅界ならぬ所は
櫻よは非さるかさ
思ハるいも多かり
◎渉輔草子耄之
三に云加久夜長
留刃節信は數寄者
也始て逢三能囚
て相互よ有見怨能
因云今日見塞の
引出物可中物侍
さて自齒國其館の
小殺を取出り中よ
絶屑一筋お實示
云是い習重時也
長柄椅造之云鐵く
つなりさ云甚子ず
時節信非悦紙ふて
又自齒中之薯物
な取出朋かへ見に
かれたるな井るな
りこれ云墜の
雖に侍云各慎共に
総欺して今世之
退散云云嗚呼の
入可再ニ欺

人に聞しに違はず、世にはかゝる珍敷物もありけり、古きものゝかぎりといふべし。諸書に傳へたる扶桑木の大きさ誠とも思はざりしに、今まのあたり其根の殘り、其枝の海底にいちじるしきをみれば、そらごとともいふべからず。むかし能因法師の長柄の橋杭の朽のこれる木の切を珍らしと、もてはやしぬるが、此扶桑木にくらべぬれば、ものゝ數かは。京都にかへりて塘雨主人に此切れを贈りて書遣りしを又こゝにしるす。

扶桑木畧記

此色黒き木のきれは扶桑樹なり。千早ふる神代の御時、今のいよの國に大木有て梢は大空を拂ひ、根は海山にまたがれり。是が故に日出る頃は筑紫をも覆ひ、入るときは陸奥の果までもかげろひて、年のみのりを妨しかば、國民歎きにくみて集り切しかど、限りなく大なるが故にとみにもきりはたさず、日ふるまには癒あひて其事ならざりしかば、終に火もて焼からして後ぞ、切たほしぬ。其後幾千年經て、人のしろしめす御代になり、景行の帝、肥後の熊襲御征伐の時、此國の温泉尋させ給ひて、豊後へ渡らせ給ふに、尚扶桑の朽木海上二三十里程にまたかり倒れたり。官軍皆此木の上をあゆみて、舟せずして筑紫の地にいたり付

○この明月さいふ
僧扶桑樹傳を著は
す、その中よ云、
我鄕有扶桑樹、
而地傳人實、世世
未平之豈不遣
蹤登客識余之南
遊海上隨之
以嚴見扶桑之茲
雌其山海之間
巨細石盛有紫美
質白色則立黃結
骨殺純雜無親余
嚴石之也余遠木之
化者也故縱横
木理備存其魚
而埋者爲見在伊
隈導多二今ノ山海
數十里郡海潮之
中往往有其上磯
者其然潮海山之
惡判船不所潮海
爲海殺所勢傳極
也其海遡可群由
之風就之畏落春
則斧剖判大用之
歯頭之而者之其
余亦得堅還粹
質如則黒取祀
研之炭實於珍
光澤流者
靈浴古稱擬得樹
余實擬之傳桑匪
所傳說扶閣
○中島說也
扶桑木署屈はこの
て蹤木辨記なし
著はせてふ遊な

給ひぬ。其後の事は書もつたへず、此頃古き事好める人出來て、其頃たづねしに木のありしといふあたりを堀穿てば、其根朽殘りてそこ爰より取出しぬ。又またがりわりしといふ海の底に、網を下して探りみるに、潮にされ貝など付たるを數多引上ぬ。色〳〵の器に作りなして、皆人のもてはやせるを乞ひ得て歸りての後の日、我にひとしき心の友にはかち贈るとて、彼國にて聞しむかしがたり書添るなり。

西遊記續篇卷之一　終

西遊記續篇卷之二

熊膽

肥後國球摩に遊びけるに、彼地の高き人病み給ふことのありて、余に治療を求められけるに、熊膽を用ゆる藥ありければ請求めて一具を拜領せり。其膽に紙札ありて皆越村新兵衛と書付たり。いかなる事ぞと聞くに獵師熊を取りたる時は其旨を案内するに、役人來りて見分して其熊を解しめ、其膽に取得たる獵師の名を書付て献せしむる事あり、故に少しも贋物の氣遣ひなきあり。余が得たる膽重さ纔に一兩三分、加賀などより出る膽とは甚だ小し。此地の產は皆小さし。尤其物の事なれは氣味は甚だ上品にして、賣買にある熊膽とは格別のものなり。委細を尋るに此地に木熊、土熊とて二種あり。土熊は土の穴の中に住て其体大ひなれども鈍し。木熊は枯木のうつろに住、其体小さくして健かなり、よく樹木の上に登る、其故に木熊の膽は小さけれども氣味猛なり、土熊の膽は大にして鈍しといふ。又木熊の膽の中に琥珀手といふ物有、是も又上品なり。京都にて撰む品は加賀の熊膽を最上とす、信濃は少し大なり。蝦夷松前より出るは

格別大ひなり、然れども皆加賀の膽にはおとるといふ。熊も又松前は甚だ大ひにして、就中羆などは殊に大ひにして、よく牛馬を摑裂て喰ふ、人を害する事大かたならず、其猛勢あたるべからずとぞ。彼地より來る熊の皮をみるに毛甚だ深く、皮大にして毛の色金色なるも有、毛至て厚きものは人の手を五つ重ねて猶よく毛の中に隱るゝあり。皮の大きさも疊三帖を隱すもの有、虎の皮三枚の大さあり。他國にはかゝる熊はたへてなし。都ての獸を考ふるに南國は柔弱にして、北方は猛勢なり。熊にかぎらず、狼などにても、薩州などには土人曾て狼を恐れず、猟犬もよく狼をとると云。中國にては狼を恐るゝ事甚し、其猛惡の勢ひ皆人のよく知る所なり。馬も中國の馬は動もすれば人を咬、九州の馬はいかほど強き馬にても人を咬事なし。又琉球抔には熊狼などのごとき猛獸は生ずる事なしといふ。寒暖によりて万物の違ひありけるにぞ。故に松前邊にては乗馬にても小荷駄馬にても野外に出て、其山の近きあたりに羆居れば、匂ひを嗅得て、その馬恐れ立すくみて、小便おのづから出て一歩もあゆむ事能はず。斯のごとくなれば、武家などの乗馬は、多く南部の馬を用る事とぞ。奥州地には羆無きゆへ、南部生れの馬は知らざるゆへ、羆を恐れず。初にこれを試るに馬場の眞中に、羆

○西遊雜記に云、小田の木町、山中常左衛門と云ふ酒造屋に止宿せしに、庭前の樹に目馴れぬ鳥二ツとまれり、其形圖の如し(圖)は黒し、羽の先と尾に至て白く、其外は一身黒くして形は粗鳥に似たり、何鳥ぞと尋るに跡、鳥と答ふ。土人の言傳に、秀吉公朝鮮征伐の時先陣の軍船釜山浦に著陣せし時、此鳥飛來りて帆柱の上にとまりてカチ〱と鳴く、軍の先表よしとて諸軍大悦し、此鳥秀吉聞傳へ給ひて御覽有度とて、朝鮮在陣の人へ被仰遣、三つがひ取寄給ひ、御覧の後常關へ放し給ひし鳥

の皮を敷て馬をすゝむるに、松前生れの馬は恐れてあゆまず、南部生れの馬は皮の上をも、よくあゆむなりとぞ。

鷓鴣

九州には珍らしき鳥多し。筑後には筑後鳥とて、其形ち、ひよ鳥の少し大なる程にて、尾長く羽色眞黒にして羽の下に少し白き處もあり、是誠の鵲成べし、筑後に尤多し、肥後にも折節見ゆる。又肥前、肥後邊の海上に脛高く口ばし長く、少し鼠色にて翼に白き點紋ある鳥あり、舟人にとへばしやくといふ鳥なりといふ。余肥後の隈本にてある醫家を訪たりしに、折ふし彼家へ鳥を送り來れり、主持出て余に此鳥をしり給ふやととはる。先に此邊の海上にて見し鳥にて、上方にては見侍らざる鳥なりといへば、あるじ笑ふて此鳥は唐土の南方にありといふ鷓鴣なり、船人などは云ひ誤りてしやくと覺えたり、上方の人にはめづらしかるべければ料理すべしとて、やがてあつものとなしぬ。其味誠に美にしていと珍らしかりき。又其翼をこひて歸りしに旅の日永くて途にて鼠の爲に齧はれぬ。此鳥いよ〱鷓鴣なりや。唐土にては南國のみにある鳥にて、多く詩に作

にて、其巣をろし て今は此所に多し さなり、此島の巣 をかくあ領ハ領主 より村々へ觸て子 を取ることを禁し、 小責よても巣のあ る所へは行くこと ならず、さま人物語 りぬ

○薩隅談に「孟宗竹近頃は江戸に大なる竹籔、諸所よ出來たり、明和の比は皆人珍らしく思ひし竹にて有以なり、四五年て來、笋も太くし尺 ○嬉遊笑覧に云「孟宗竹は通志に栽る江府竹一名國竹にて元琉よりり献り再ら食 ては孟宗の笋も珍かりしとみゆ のやひ正十料 故う月年さよ名 に〳〵淡よ來すり國 熱〵竹りなる献竹栽 竹終出出りこりにる 出るろさ再て江 てこて此いら元府八十 めころ用笋三食琉竹國に

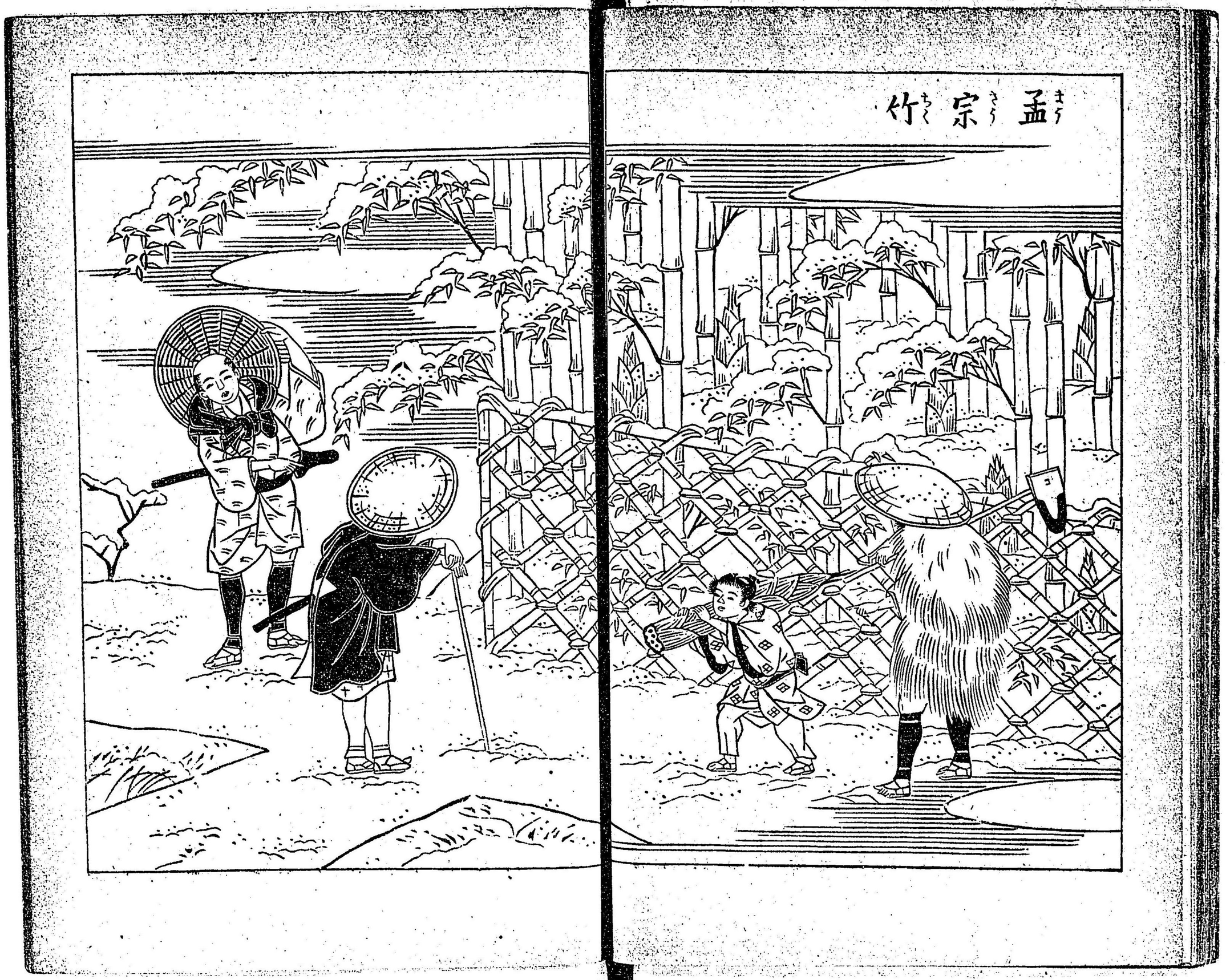
りて皆都遠く離れたる情を述たり。日本に鴝鵒有事を聞ざるとにて、いぶかしけれど、彼醫家も博物の人あれバ考ふる處もあるにや。

孟宗竹

薩隅の邊に唐孟宗竹といふ竹あり、人家に多し。常の竹よりは薄く節低く枝に似たり。然れども甚だ太くして大なるものは二尺廻り以上に至る。花生等に用ひて甚だ見事なり。此竹冬笋を生ず。味甚だ美なり。寒中にも平皿一はゐの笋を生すると、他國にはいまだ見ず。京都にも甚だ細く指ばかりなるは、早春に出して料理に用ゆれども、名斗り珍しくて味は宜しからず。孟宗竹の笋は大ひにして、しかも和らかに、味夏の笋におとらず。若此笋を京都に送り登さば稀代の珍味なるべけれども、道路三四百里を隔てたれば其事叶はず、おしむべし。風の透間のなき樣に包みて送れば、漸く長崎までは無事にして届けりといふ。夫より遠方へは損じて送りがたしとなり。此笋元來常の竹の子よりも格別和らかなるゆへ、尤損じやすしとなり。孟宗竹の孟宗は古人の名なり。親の爲に冬笋を得たる事、廿四孝に見へたり。此笋寒中にも出るゆへに孟宗竹といへり。元來唐土より渡り來れりといふより、薩州にては唐孟宗と呼あり。猶この外種々の奇竹多し。苦竹と稱する竹も冬笋を生ずれども、細ふして味苦きゆへ食用には湯煮して苦味を去り用ゆ。其外四方竹とて四角の竹あり。珍らしければ余歸る時、此四角ある竹を杖にして携へかへれり。又鹿兒島城下大龍寺には七股の竹あり。彼地にても奇ありとて庭に植て見ものにせり。都て暖國には竹よく生育す。寒國は竹にあしく、信濃の國には竹一本も生せず、甚だ不自由成事あり。桶の輪には竹にあらざれバ叶ひがたきゆへ、三河尾張より輪につくりて送り來り、甚だ高直なり。壁のゑつりは山茅を用ゆ。大ひある茅ある故に、多くは竹のかはりにこれを用ゆ。他より思ふとは格別にして、又相應にかへ用ゆるもの生ずるも天地の妙あり。それより北方、越後、出羽、奥州も南部領邊は人民一生竹を見ざるもの有。太き竹は絶てなし。夫故人家の邊に南國のごとく竹藪といふものなし。山中に徃あり。是も熊笹にて竹の用に立べきものに非ず。南國にては竹ほど人家の重寶に成るものはなく、一日もなくて叶はぬやうに覺ゆれども斯のごとく竹なくてもさのみ不自由なる樣にも見ゑず。只桶の輪のみ何方にても難儀に見ゆ。津輕秋田邊にては樺の木の皮の樣に見ゆるものを曲て、樺にてとぢ、桶として

づらしからず、苦竹はさらなり、殊に孟宗は他笋よりもやはらかにして笋中の第一なるべし

○北越瑣談後の三に云、竹ハ暖國によく寒國には生ぜず、京師庭園に植る竹も、其根皆西南に向ふ、故に薩摩大隅の邊種々の竹有り、三又五又の竹、或は四角なる竹など最奇品なで、又京師武井元立家に献る竹の花生甚奇品なり云々


孟宗竹

用ゆ。又太き木をくりぬきたるも見ゆ。遊土は人民にいとま多きゆへ丁寧なる細工をしても用は足りぬにや。

五ケ邑

隈本の旅人宿に逗留せし頃、五ケ村のことを尋しに、宿の者いふはそれは殘り多きことなり、この國慶事の祝義の爲によべまで五ケ村の頭分の者一人、百姓數人を召連て、此家に數日逗留致せしに、今少しはやく來り給はば同宿して語り合給ひ、面白物語もあるべきものをと口〳〵にいふにぞ、いと本意なくてせめてもと此地の人に五ケ村のことを尋問ふに、嘗永年中平家の人〻京都を落、須摩の屋敷をも義經に破られ、又讃岐の八島の軍に打まけ、長門の國赤間か關の海中に一門殘らず入水と披露して、其實は肥後の國の極山中に隱れ給ひぬ、其後世の中鎌倉に歸して平家の人々は永く山中の土と朽果給ひぬ、其隱れ給ひし處今の五ケ村なり、南北凡二十里斗、東西一二里より三里ばかりもあり、東は豐後、北は阿蘇、南は求摩、西は隈本なり。何方より入るにも皆二十里餘りありて、其嶮岨中〳〵いひつくすべきにあらず。更に道とてもなし。夫ゆへに平家の人々の

○五ケ村は一肥後國八代郡に屬す。肥後に關田代耕作卷壹に云、又說に肥後國東南の山中隱れ給ひし平家の村族なり。其稱は安德帝神祭崇傳へ社に祭りし御靈殿なり。寶劍一ツ有り。無說二ツ有り。此五人の三郎方は一門の中にて平家の心變せし人なるべし。

○五ケ村の頭分の者一人、百姓數人を召連て、此家に數日逗留致せしに、今少しはやく來り給はば同宿して語り合給ひ、面白物語もあるべきものをと口〳〵にいふにぞ、いと本意なくてせめてもと此地の人に五ケ村のことを尋問ふに、嘗永年中平家の人〻京都を落、須摩の屋敷をも義經に破られ、又讃岐の八島の軍に打まけ、長門の國赤間か關の海中に一門殘らず入水と披露して、其實は肥後の國の極山中に隱れ給ひぬ、其後世の中鎌倉に歸して平家の人々は永く山中の土と朽果給ひぬ、其隱れ給ひし處今の五ケ村なり、南北凡二十里斗、東西一二里より三里ばかりもあり、東は豐後、北は阿蘇、南は求摩、西は隈本なり。何方より入るにも皆二十里餘りありて、其嶮岨中〳〵いひつくすべきにあらず。更に道とてもなし。夫ゆへに平家の人々の子孫年々に繁茂して、數千万人に及ひ、年月は數百年が間一向人間の通路はたへはて居たりしが、足利の末にや、太閤の始にや當りけん、川上より椀の流れ來れるをふと見付て、此山奥に人住けりと知りて、やう〳〵に尋ね入て始て、此五ケ村の人此世に通せり、彼方の人の世間へ出初て人交りをせし事は、元和寛永の頃にもや、此あたりにては隈本名家あれば、此手に屬したきよし申立て公にも其由聞届られ、肥後の支配と仕給ふたれど、本國の外なれば何方の領分といふにもあらす、唯支配といふのみなり。それより此方多年隈本より鹽幾十俵を賜ふ。彼方よりは五人の頭分のもの替り〳〵年始の禮詞をつとむる爲に、隈本に出るなり。熊の皮數十枚、禮物として年毎に獻上す。むかしより彼地に五人の頭分あり。故に其地を五つにわけて、各一ケ所ゝ是を司り保つ、此故に世間より五ケ村といふ、其人皆質朴にして武をはけみ、男子皆長き大小を横たふ。みつから平家高貴の人の御末なりと高ぶりて、世の人を輕んず。其地鹽なし、近ごろまでは數百年が間、彼地の人は、一人も鹽氣を食ふものなかりしが、近ころ隈本より賜る鹽をわかちて食す、其外も格別家富る者は肥後より鹽を買入て食す。故に甚だ拂底にて中〳〵末々までは行屆かず。然れども鹽は食して藥なりと

いへるにや、百姓の家々に皆見鹽とて、紙に少しの鹽を包み蛮所の柱にかけ置て、家内みな毎朝此鹽をみる事なり。此地別に君とよふ者もなく、年貢を納るといふ事もなく、皆穀物は其地廣きにより手柄次第に作り取なり。又賦役といふ事もなし。夫ゆへ人の心すなをに、衣食もあまりて爭ひ怒る事もなく、上古の世に似たり。又平家傳來の寶物甚だ多し。樂器刀劍世に珍敷ものありといふ。他の人は一向に入る事を許さず、又たとへ入ても宿を取べき所なく、難義に及べりとなり。

藥の事におろかなる故に、醫者は入る事をゆるし、入置ても彼地にて甚だ重んじ愛する事とぞ。余も此ものがたりをつく〴〵聞て兼てより其地に至り見んとおもひし事あれば、神馳魂しい飛ごとくの心地せられしかど、道といふもなく、殊にいろ〳〵の嶮絶の所ありて、彼所の人に同道せざれば、隈本の者だに至る事能はずといふにぞ、力及ばずしてやみける。唐土のむかし秦の始皇帝の虐政をさけて桃花源に隱れ住み其子孫繁昌して數百年の後はじめて人間に通せしに異ならず、日本せましといへどもまた人跡通はざる地も邊土にはおふかりぬ。

○北史攝人の云ふ事なるべし。かゝる書しざるべし。流布せし事は眷屬の恩愛強く、少過害もあり。又博奕なざさへ好みて萬つ惜人よと

毀譽

余が四方に漫遊せし主意は諸國の風土氣候を親しく身にうけ考へて、著す所の醫書にあやまりすくなきやうにあらしめ、昔く世間の病者の益にもあらんやうとの事なり。それに付ては諸國をめくれは異病奇疾をも多く見及び、奇方妙藥をも傳授を得て、醫事の修行、漫遊の益少からず。猶其あまりには文雅の事武備の事はもとよりよき人を見ては、我身の手本として見習ふ樣に心得、あしき人に逢ふてはみづからかくのごとき事やなきと顧み慎む種となせる事あり。其よしと思ひ、あしきと思ひし事、多年漫遊の間には數〴〵ありて、心やすき人には語りも傳へ、又世に殘すまじとおもふ書には書もしるせる事あり。今にいたりて其譽たりし人もつく〴〵見れば、其行ひ初の如くにもあらで操屈かぬやう成もあり、又毀りたりし人もいつよりか行ひも改りて余あどか口にてとかふ論すまじき樣にみゆるもあり。過し事既に人にも語り傳へ、文にも書しるせし事の、今見れば、よく違ひたれば、余も他人より見給はゞ、彼人をあしゝといひしは彼人に恨にてもありや、又彼人をよしといひしは彼人にゐこひいき

もけなれば其行ひ及びがたなれば里の苦めの庄を見更説を異も風なる事に著だ解を譽思はすへ等のしるばる事はすめり若位高く勢あり

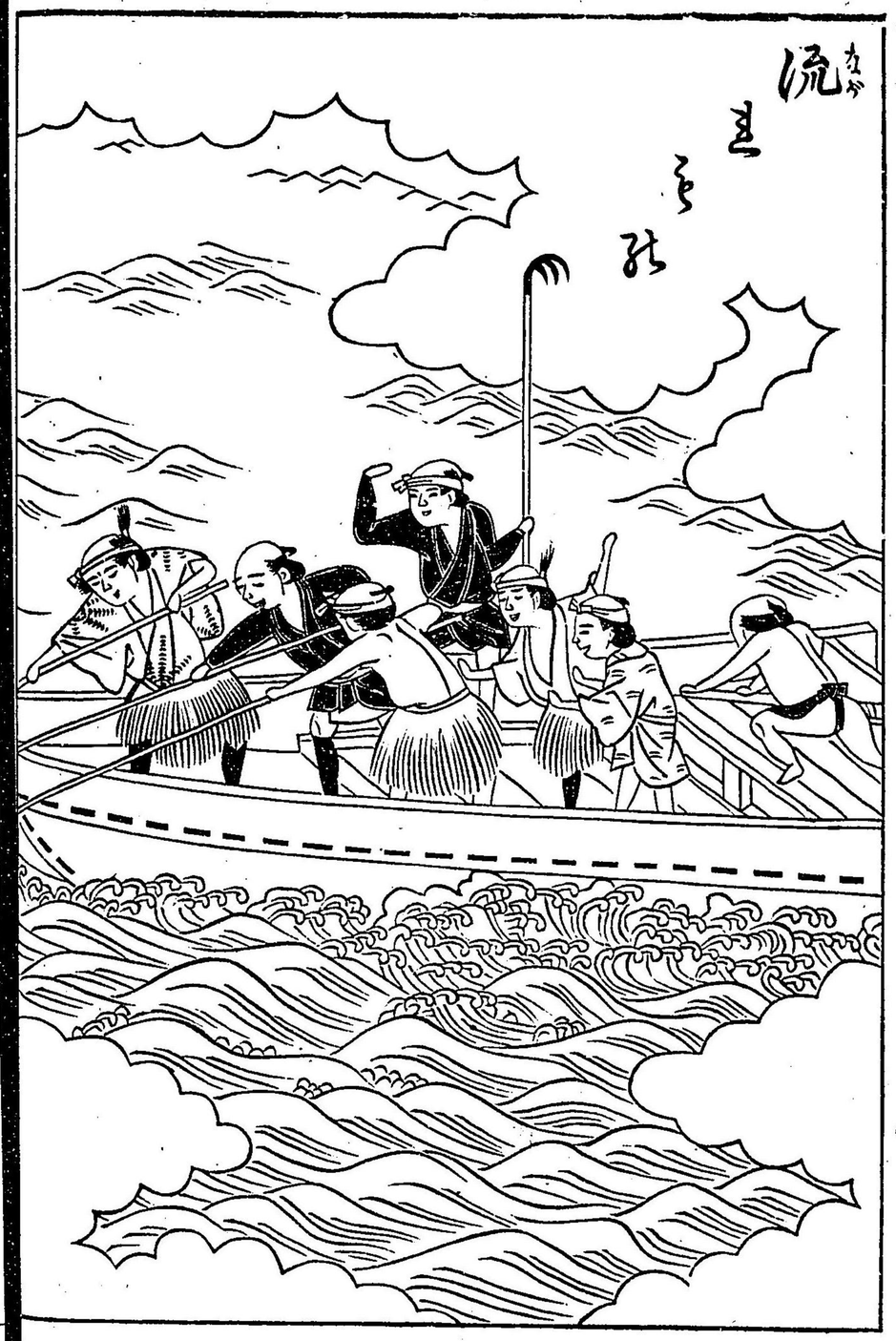
ありやとも見へて、余が定見の淺々しきをもにくみいやしみ給ふへし。實に嗤も舌に及ばすと筆に殘し詞に出せし事は取かへしがたき事、むかしも今も同じ事にてこれらの事をおもひ出れば、背中に汗出る心地す。拙き身にもたとひ恨ある人にてもよき事は掩ふまし。親しみ睦ふ人にてもあしき事は傾きたすくまじと心得居れど、只世の人の始終り調ひがたければ、余も背中に汗出る事は出來ぬ。されど余がごときは誠に名もなく、德もなく、位もなく、強て余が詞を取用る人もなければ、只みづから恥るばかりにて、事はすめり。若位高く勢ありて、かくのとくみたりに毀譽したらましかば、いかばかり世の害を引出すとの有べき。されば上にまします人々の常〳〵に御心を勞し給ふとは草間の小民の知る所にあらずかし。古しへに人の毀譽は死して棺の蓋を覆ふて後に定るといひ置し、それに違はずとぞ思はる。西國にて幼少の女子孝行の聞へありけるを、其あたりの儒士感心して其事實をくはしく文章に記し、普く人にひろめて勸善のためにもなれかし、且は孝行の名も世に聞へよかしと出されけるに、其女子成長の後姪奔の婦人にて嫁せし後、外に密夫と通じ、出奔せし事のありき。儒士初に記せし文章を破り捨て怒られしかど、益なくて世の人の笑ひ草と

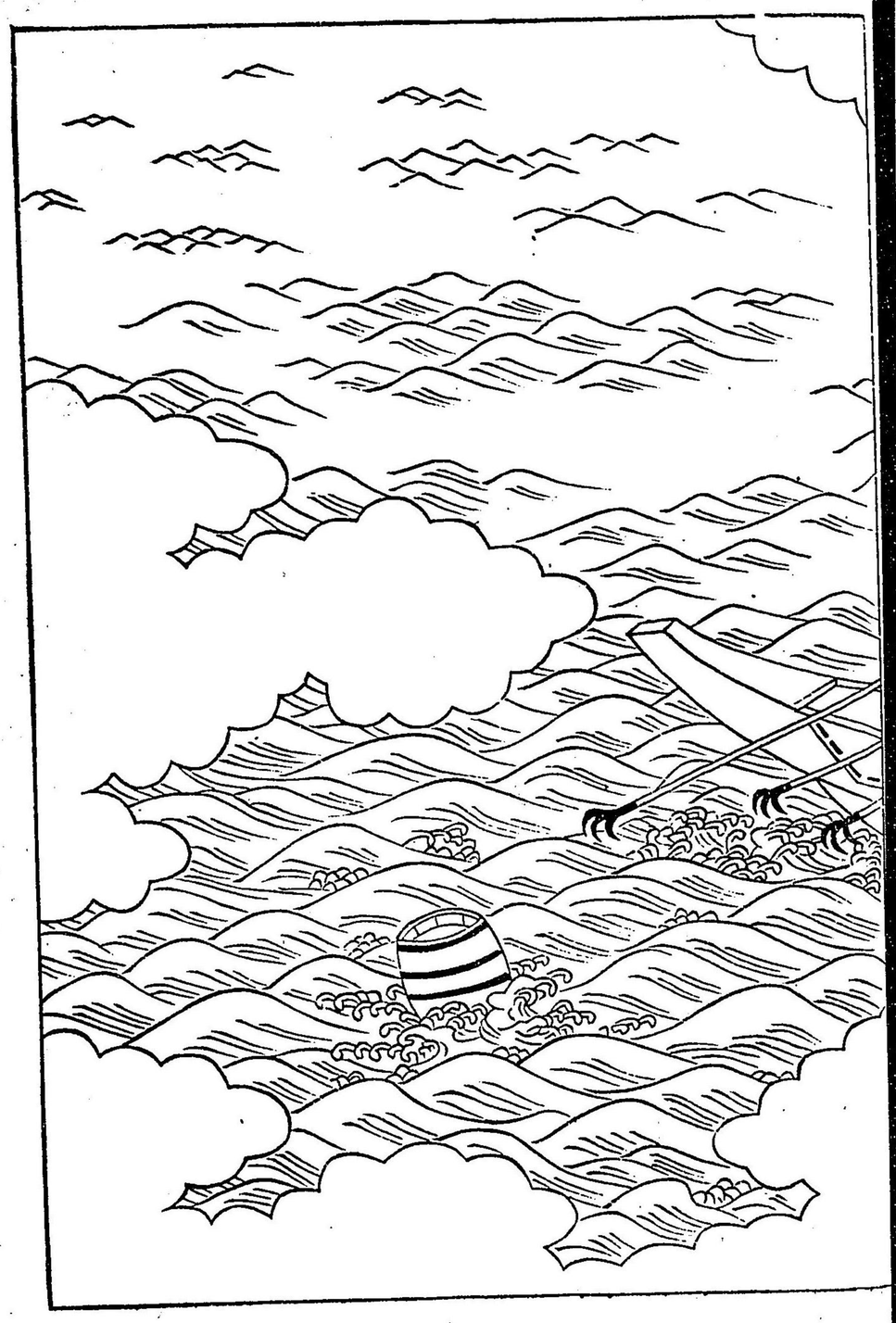
○紀伊國南東兩牟婁郡の海を熊野浦と總稱す

なられたり。此儒士の心根はいと殊勝にて君子は人の美をなすといふ心にも叶ひ、善に感ずる事の深ければこそ、むつかしき世話をもいとはず、文章をも作りたるに人の行ひの始終を全ふする事のかたき事は、昔より同し事にて、名なき女子はかくれ行て、儒士のみ人の笑ひ草となれるは歎かしき事にあらずや。かくのときとをみれば生涯口を閉るより外なけれど、人の善もかたらざれば傳らず、去るさゝれば殘らず、嗚呼いかゞはせん。

流れ物

熊野浦は南方へ遠く出たる土地ゆへ格外暖氣にてのどやかなる所なり。されど南には國もなき大海なれば、波高く風強く磯邊のあらき事は中國などの海とは格別のものなり。かゝる大海の事なれば折々大風波の後などは、常に見なれぬ珍敷もの流れ來る事ありとぞ。椰子の實又は椰子の木抔は毎々波に打上るとぞ、何れの國より來る事にや。又近き頃獵師甚八といふもの沖中へ五六里ばかりも釣に出つるに何か波に浮たるものを見付、引上見れば桶なり。悅び取歸りて能〳〵見るに桶高二尺五六寸、わたり一尺五六寸、中ふくらにて太鼓の


流れ



○球磨は肥後國球磨郡に屬す、一に人吉と稱せり

胴のごとく、桶がわの木の厚一寸餘、鐵にて輪を作り、八つを入たり、輪の幅一寸二三分甚丈夫にしたる桶あり。胴中に小き穴あり、小兒の握り拳をやう〳〵に入るゝ程なり。ヂャンにて塗りふさぎたり。桶の小口には松葉の如き文字を彫付たり。胴中の穴より見るに皮に白き粉入りたり。菱粉に似たるものにて、水干したるものと見ゆ。取得たる獵師は寶物のやうにいひ居れども、其粉何とも知れざるものなれば、誰かくべつに賞玩するにもいたらず、何國より流れ來れる物にや、何國の船より落せしものにや、つゐに何とも去る人なし。

龍鐘を愛す

余が求麻にありし日、ある夕方暴風吹おこり枝をおり砂をあぐ、暫時にして空晴れ風止たり、所の人龍卷あるべしといふて止ぬ。龍卷とは上方にていふ龍の天上すると云ふことあり。其後二三日經て城下より六里東の方のきのへといふ村の者來りかたりけるは、さても過し日の龍卷は我村にふしぎの事こそ有つれ。十二三歳の男子二人障子をひらき手習ひして居たりしに俄に風雨起りて眞黑になりたりしかは、すは龍卷ぞといふこそあれ、何とは知らず庭の眞中の

飛石の上にとふと落て微塵に碎けて飛ちりたり、其音の夥敷事たとへんものなし、只大ひなる釣鐘を微塵に打碎きたる樣に聞へし、其碎けたる拍子に其虧飛で手習仕居たる机の上に落たるを、すかさず拾ひ取ぬ、はや忽ちに空晴風やみてものゝ落たりしと聞へし跡にも怪敷ものは一つもなし、只殘りたる物は子供の拾ひし物ばかりなり。人々集りて能く見るに釣鐘のふちの所のかけ殘りたるにて、石の如く金の如くなり。ふしきなるものかな、いかに卷上たりしとて猶落殘れるもあるべしとて、打集りて只其庭を尋ねさがせしかども、夫といふべきものもなく、いかなる事と知る人も候はずといふにぞ。何卒其子供の拾ひしものを一見せばやと申せしに、則村懸りの役より早速其村の庄屋へ申送り其物早々城下へ持參すべしと下知ありしに、日を移さず役所へ持出たり。余が旅館へ送り來れは、そは珍ら敷ものこそとこれを見るに、小き箱に入て幾重も紙に包たり。開き見るに甚だ微少にして一方は銀色に、一方は栗色の漆にて、金物の漆ぬりたるがはげ損じたるにて、とかふ論すべきものにも非ず。興覺て戻しやりぬ。是は役所より急に申付たるにより、奪はれたる事もやと疑ひてかくしつる事とおしはかりぬ。持來りし者に子供の取得たりし大なるはいかがや

と問しめぬれば、夫は其節に山かせぎの者來りて、珍敷ものあれば我に得させよ、名を聞糺して又返し與ふべしとて、子供をすかし日向の方へ携へさり候ひぬと答へたり。持來るべき樣にいひやり樣も有べかりしを殘り多き事なりき。

又筑前に遊びし時、博多の崇福寺に暫くとゝまりてこのあたり一見す。此寺の住持は宗曄禪師とて福岡の龜井道才の肉弟にて才德すぐれたる僧なり。余古き交りにて、此度も尋ね訪ひしに、久敗相見ざるにはるゝも訪ひ來りし事よと世にしたしく物せらるるに、思はずも日を移しぬ、此寺は九州の總錄あり、京都大德寺、江戸東海寺ともに、住職の僧此寺に住する事とそ。筑前の太守の菩提地にて、境内八町四方、名にれふ千代の松原の眞中にあり。北は海を受て、誠に清淨無塵の勝地なり、詩を賦し禪を談せしいとま、當國の奇事をとひしに、其座に在る人の曰、此國の海中に鐘あり、其處を鐘か岬といふ。織幅山の艮の方岸を離るゝ事、纔に五町ばかりの所にあり。船にて其處にいたればよく見ゆるよし里人いふ、是はむかし三韓より撞鐘をふねに積て渡せしに龍神鐘を望み、此海にいたりて浪風俄に起り、船くつがへりて鐘は終に海底に沉みぬ。其三韓よりわたりし事は古き事にや、万葉集の歌にも千早振鐘がみさきを過れども、我は忘れ

○崇福寺は筑前國那珂郡堅粕村にあり。治元年僧宗曄太宰府に開基に創建せり。慶長七年黑田長政今の地に遷せり。寺域二萬五千餘坪

○龜井道載名は字南溟、道載は其號なり、筑前廷以人、儒醫を以て濱の山麓周南に從て大に祖徠の學を唱へり、文化七年歿す、年十二

○鐘ヶ岬は筑前國宗像郡に屬し、北響灘に突出して方十丈

ず志賀のすめ神。よみ人しらずと出たり。又新古今にも、白浪の岩打波やひゞくらん、鐘のみさきの曉の空、衣笠内大臣。又家の集、音に聞く鐘のみさきはつきもせず、おくこゑ響くわたりおりけり、俊頼。又大名寄に、聞あかす鐘の岬のうき枕夢路も浪に幾夜へだてぬなど、諸集に見へたり。龍宮のものとて人々恐れ誰か揚んとせし人もおかりしに、いつの代の事にや何がしとかやいへる國の守ありけるが、菩提寺を取立いまだはぢよき鐘もなければ、新たに造り鑄んよりは海中にある鐘こそ名高き鐘おれば引上て、此寺に寄附せんとありしを、諸臣皆此鐘は龍神のおしみ給ふと古來より申傳へ候へば、今更引上給はん事恐れ有と諫めしに、元來勇將おれば聞入給はずして我用にて我領内にあるものを取に龍神とて惜むやうやあるはやくも海より引上よとて數十艘の船を浮べ、鐘の龍頭に大綱をおびたゞしくかけ、海より岡に引きつけんとて千人力を以てえい〳〵聲を出して引たりしに、其鐘少し動くや否や大空俄にかき曇り、天地暗夜のごとく成て、大風波起りまき上んとせし船碎け綱きれて、人も大半潮に溺れて漂ひければ、終に其事とげざりけり。大守猶もいかり給ひしかども、諸臣強て諫め留め申せしかば止事を得ずして、其儘に捨置給ひぬ。其後三四代目の

大守勇氣殊に勝れ給ひぬるが、此鐘の事をきこし召、何條事や有べき、其日に折わしく風の吹ければこそ、不思義にも思ひつれ、たとひ龍神は申せバとて、領主にいかで敵すべきや。此鐘引上得ざるこそ口惜しけれとて、諸臣の諫めを用ひず、用意を丈夫にせばやとて、髪の毛を入てよりたる大綱をおびたゝしく鐘の龍頭にまとひ、船數艘に大石を數多積入て、船の脚をふかく玄づめ、彼鐘の上にいたり、鐘に付たる綱を船に嚴敷まとひ付て、彼つみたりし石を海中へ擲捨たりしに船漸〳〵に浮に付て鐘もやう〳〵うごく程こそあれ、案に違はず震動雷電して風おびたゝ敷おこりて、雲は墨をときしが如く、大波山を碎けば、あにかは以てたまるべき、船も人もみぢんに成、鐘も龍頭くだけてよこさまになり、又海底に沉みたり。夫より大浪岡にあがり、人家田地大に破壞し、人民の歎き大方あらず。ふしぎなるは其潮につれて翁の面一ッ上り來りたり。其面奇代の作にして中〳〵世間のものにあらず、大守には尙も爭ひ給ふべき氣色成しかど、人民の歎きあればとて諸臣諫めしにより、是は龍神より鐘の替りのこゝろにて、希代のものを打上し事なれば大守にも思ひとゞまり給ひて、鐘は終に人間の手に入らず、ことに横さまにありて龍頭さへくだけたれは、ふたゝび上んたよりもなくありぬ。面は奇異のものなればとて宗像の宮に納めて、今に彼宮に傳れりとぞ。鐘は此崇福寺に納るべかりしを斯龍神の愛せると云ふにより永く海底のものとはあれりと語れり。少しむかし物語めきて仰山には聞ゆれどもさる事も有べし。其外越前の國敦賀のはとりにも鐘か崎といふ所有て、海底に鐘あり。芭蕉翁なども彼所に遊んで

月いづこ鐘は玄づめる海の底

といふ發句あり。すべて海上を通ふ船の鐘を積とをいむ事あり。鐘は龍神の愛するものあれば、是を積船は必ずくつがへると云傳へて、おそれあへり。是らの事もあれば球磨の事も、龍神の鐘を持かへれるが取落せし成べしと沙汰せり。余も又別に考ふる事あれとおこがましければ畧しぬ。

○鐘ヶ崎は金ヶ崎にあり、越前敦賀郡に屬す
○芭蕉は元祿二年八月この地に游べり

西遊記續篇卷之三

嬉し野

○嬉野驛は肥前國藤津郡にあり柄崎驛を去ること三里二十三町五十四間

肥前の國嬉し野を通れるころは、日影もまた高かりしかど、此里によき温泉ありと聞しかば、先宿りを求めて夫をも心見んと賤しき伏屋に宿りぬ。都て民屋なれば茅の軒端いとゞいぶせし。誠に聞しごとく温泉は勝れたり。都近きに有らばいかばかり、賑はしく繁昌ならんに、斯邊鄙なれば其事もあらず惜むべし。夜に入ぬれば霧の間より門さし込てふしぬ。げふはいとふもつかれざればとみにも眠らず、こしかた行末思ひつゞけたる折節隣れる家に三味線の音きこゆ。しらべいとよく叶ひ、聲うるはしく調ひすましたるに、耳あらたまりぬる心地して、枕をもたけこれを聞くに鳥部山といふ歌ひとつ彈て止ぬ。かしましくいたつら彈もせず、心ありげなり。浪花を出て後は一里にても都遠ざかるに付つゝ、殊に拙く聞にくきものは音律のことなり。國々遊里なども多く、其外にも三味線の音はたゆる所もあけれと調子もおほよそにたゞかしましきのみにて、哀に靜なるきはは絶てなし。心留る所もあらざりしに今宵の音はいかなる人や

彈つらん。筑紫のはての殊にかゝる片山里に床しくも聞ゆるものかな、今一つとも待居たるに龍田川邊といふ歌ひとつひきたり。聲うるはしき其姿も見まはしく、起出て宿のあるじにいかなる女にやとたづぬれば、隣家の娘あるが三とせ、四とせ長崎にありて近き頃かへり來れるなりといふにぞ、扨は長崎も名高きはどの甲斐はありぬ。下の關博多などむかしより其名高き遊里にて、日夜糸竹に遊ぶ地なるに、只其所に至りて目のあたり其聲を聞けば、誠に田舍びて我身の故郷に遠ざかりしを感ずる心のみ起れる。然るに今長崎にて學びたりしといふ音を聞に、都近き心地して耳珍らしく覺ゆるもいと嬉し、やがて長崎に行身あれば彼地に入らば何事も都近き心地やせんと末たのもしくて、今宵は思ひよらざる調べの音に旅のうさをはらしぬ。其後日を經て長崎に入り、またしも糸竹の調べ聞しに難波を出しよりこのかたの音におぼくもとならず、嬉し野にて聞しには似もよらず、其女の勝れたるにやありけん、またまなひたる師の難波人にや有けん、又其折のわはれ深きより一しほにおぼえしにや。亦其後程を經て薩摩に入りしに、琴三味線鼓弓ともに端歌は此國かくべつにすぐれて、難波にもおさ〳〵劣らず、京の端〳〵よりは今一際まされるやうに覺ゆ。常の言葉はあく迄訛りありて怪敷ばかりなるに、端歌勝れたるはいか成ゆへにやと、そこらの人に尋ねば、この國は三味線殊にはやりて法師たるものは皆難波に登りて學ぶ事あり。學び得て歸りても四五年も程經れば、また生國の訛り出る故に又難波にのぼり來りて稽古のさらへする事なりとぞ。浪花にても名ある法師に學ぶとゆへ、いづれも節調子ともに格別の事にいたる。難波の外にては三味線のとは、薩摩のみありといふべし、不思議至極のとあり。其外の國は極邊土は元よりあり。程近き國〳〵にてもいやしく拙き事、耳に觸べくもあらず。是は其國の音聲出てふしも調子もあらき故あるべし。其外横笛、篠笛などの調子も京都の音には似たる國もあらず、水土によりて音律の替るとはいちじるしきものあり。

鼠島

肥後と天草の島との間に、海中に小き島あり。いかなることにや、此島には鼠むかしよりおびたゝしく住るとぞ、元より小き島なれば人も住ず、此鼠のみなりといふ。此故に此海を通ふ船にては、三味線をひくことを船頭かたく留めて赦さ

○竹島一名礒竹島と稱し隱岐國の西北凡百里にあり。穩地邪に屬せり

○徐福のふねは唯南紀王安傳に見え後漢書、瀛山集、列氏明世法錄、海東諸國記等に見えたり

す、若此邊にて此禁を用ひず、三味線を彈ば、かゐらず波風大きに起りて、船危き事あり。三味線は猫の皮にて張たるものなれば、鼠のいむ故ありとぞ。都方にては近きころの價の安き三味線は、只狗子皮にて張るあり。此島の鼠はひかしよりの事のみ知れるにや。又隱岐國の北の海中にある竹島には猫のみ多く有て世間の猫よりは格別に强くして鼠を取る事もよしといへり、かゝる猫のみ住る島もありといへば鼠ばかり生する島もまことにや。

徐福

もろこし秦の始皇帝と申せしは豪邁の英主にて有しに、後にはからき政を行ひ、其上長壽延年の事をこのみ給ひ、あまねく不老不死の仙藥を求給ひしかば、徐福と云人、からき政の世を遁れんとて帝を欺き、某仙人の住る蓬萊の島をよく存知候へば、彼島に渡り不老不死の藥を得て献じ奉らんとて、童男童女五百人に五穀の種、耕作の農具をとりそへて、船に積、海上に浮み、唐土を遁れ出て日本にわたり、熊野の浦にわがりて耕作をなし、童男童女を養育して、子孫まで熊野の長となりて安穩に繁昌せりといひ傳ふ。故に熊野の新宮、本宮を今にいたり蓬萊山といふ。されは本宮新宮の寶藏神寶には前秦の文書なども有りとぞ。其徐福の塚は新宮の町の濱手の畑中にあり、古木五六株ありて石碑に秦徐福墓と彫付たり。其船より初て陸にあがりたりし地は、新宮より六七里も東にて波多須村といふ所あり。此所の古老の云傳へに、徐福十二月晦日、波多須村の矢賀の磯へ着船して、此邊に暫く住居し後に本宮新宮那智のあたりに移り住り、波多須村の矢賀丸山といふ所に蓬萊山といふ楠ありて、小き社もありしに三十年ばかり以前の洪水に、社も楠も流れ失ぬとなり。余波多須村の近きあたりに在し時、木の本の山中疊堂といふ所に遊ひけるに、此疊堂といふ所は奇巖聳へ立て、數十丈高き石壁連り、見事なる所あり。徐福の舊地に近ければ徐福の事を作りて、五言絶句の詩を石面に大書して歸りしに、其後月日過て雨露に消去らんことを此あたりの人々惜み、石工に命して彫付られしとぞ。一時倉卒の拙詩千歳に殘らんといと恥しけれど、又世に珍らしき跡留れるもうれし。唐土にはかゝる事も多く聞ゆれど日本には甚稀〳〵にて余いまだ他邦にては見及はす。

○四國三十三所名所圖會に秦徐福墳新宮の島居より凡十六町計東上熊野十村邪島社より玉丁ばかり西南にあり。其前に寺院殿しるしの碑を建て給ふ。寺柄浮也墳の上に檜木ご三本あり。○松岡支遁の詩々首卷下に徐福が社は紀州新宮の中にあるあすかの明神是也墓は新宮へ行く道より墓上にだもの木を種ゆ。○笈埃隨筆に云、紀州近き辰の年滿とい那智の江天滿とい ふところの區心寺さいふより僧のみやけに國產の紙を罷出る孔雀主人從紀奉遷杉原の類ひにもあらす、また匠栖巢濃岩國なとにも似す。檜皮にて見馬れざる紀なれは けいるにろの僧云 されは此紙製に すへき程もなくわ ばづかる隔鄉に用る 樂谷福日本へ渡て 來りて熊野に來住 し紙をも漉きて用